
空虚ヲ列砂丘

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空虚ラ列砂丘

【Nコード】

N8117R

【作者名】

朝昼夜

【あらすじ】

異常災害によって世界が混乱に陥り、人々は新天地を必要としていたが、表立った動きを始めている者は少なかった。だがパプテガという漢を中心としたプロトノアの面々は、伝説の『白砂の草原』を目指している。人間という種が生存するための希望の光が、白砂の草原にはあるというのだ。それは伝説の類だとされるものだが、地学者ベスがそれが現実にあるものと発見したことから、彼らは行動に移ったのだ。船舶プロトノアに四十人ほどの人間が乗り込み、世界一大きな砂丘にあるという『白砂の草原』を求めて！しかし、

砂丘を走る船舶プロトノアはあつというまに沈没することになった。が、それはパプテガとしてはまだ予想の内だった。フェルクルという女の力を借りれば、危機を突破できると目算していたのである。動力室最深部にてフェルクルというまち針を頭に突き刺している研究者の力を借りて、プロトノアの内部で密かに作られていた小さな船に乗り込み、砂の海に埋もれる前に彼らは脱出した。hotalubi動力を利用すれば、砂の海などへっちらというわけだ。しかし次に現れたのは蟲。巨大な蟲。皆が絶望した。さすがにそれはないだろう、と思うほかなかった。だが、希望はまだあった。緑の光が、蟲の大きな、漆黒の口の中で光り輝いていた。研究者フェルクルはそれを見て狂ったように笑い出す。興奮しているのだ。なぜなら、コートマシンと少年という二つの作品が見事に起動し、怪物と同等に渡り合えていたからだ。研究者フェルクルは、大きなまち針を頭にぶっ刺しているやばそうな奴だが、実際、すごいのだった。

砂丘に行く船舶プロトノア

照りつける太陽は蒸し風呂を作り出すために空で踊っているのではないか。そんな思い込みが巡り回ってもおかしくはない程の熱が地表を漂っていて容赦が無い。そんな日中。トカゲとサソリが混じったような表皮のぶよぶよとしている生物がムカデのように滑らかな動きで、砂丘の至る所をまるで泳ぐようにして闊歩しているが、自らよりも弱小の、異常災害が生じる以前に繁栄していた虫を捕食している。触覚から、ぴゅ、ぴゅ、と放出させる黄土色の液体に驚異的な麻痺成分を含んでいて、それを相手の胴体もしくは頭部つまり何処にでもいいわけなのだが、わずかでも液体を相手に付着させることに成功すれば、同時に捕食にも成功したということになる。それほどに強力な毒性を持った液体を内部で分泌し餌を捕獲することの出来る能力を持ったそのトカゲのようなサソリのようなムカデのようなという無茶苦茶な生物は、その強力な毒によって砂丘に住まう虫の王者として君臨しているのだが、生物として王者というわけではない。砂丘に住まう虫の中では屈強という程度のものだ。だから毒に対する抵抗力の強い、獰猛な、砂丘でも平然と生きていくことの出来る野獣にかかれば、（それは一般的にラクダとライオンを混ぜたような見た目をしていて、凶暴そうな紅の瞳をしていることから、人間も迂闊に手出しが出来ない）虫の王者など、所詮は虫と言った具合に、野獣のストレス解消のための殺戮対象になってしまう。食われることすらしないのだ。人間の子供が、蟻の手足をちぎったり、蝶々の羽をむしりとりたりするのと同じことだ。勿論、人間の子供の場合は、ストレス解消のためというよりかは単なる興味心からという理由もあるだろうが、ラクダとライオンを混ぜたような猛獣の場合は、ただの殺戮願望というわけである。なんと恐ろしい生物の闊歩している砂丘だろうか。そんなところに人間がいるはずは無さそうだが、機械という人智を利用することによって、彼

らは砂丘を横断していた。

一台の、ホバークラフトに見える船舶。通常自動車などでタイヤなどが装着されているであろう下部分と、あと機体下部の側面に、伸び縮みの許容が広い特殊ゴムが装着されている。そして現在、その特殊ゴムには大気中にある空気が目一杯に入れ込まれていて、これによって特殊ゴムは空気をたつぷりと入れて膨らんでいるので、饅頭のような形となる。饅頭のような形の中身には餡子などは入っておらず、空気が入っているだけだが、舐めてはいけない、その十分に入れ込まれている空気のその力はホバークラフトの機体部分を浮上させるので、ホバークラフトは船底を地面に接触させることがない。これによって地面と擦れることによって生じるはずの摩擦力による障害を受けずに済むし、また砂丘に船体を沈み込ませてしまふという失態もすることは無く、ホバークラフトは四基のプロペラを回転させることで、砂丘を前進することに、成功している。ふううん、という機動音を鳴らしながら、今の所損傷らしい損傷もなく、危険な生物が住まふ砂丘を突き進んでいるのである。順調ということだろう。しかし、ホバークラフトは元々頑丈なものではなく、特に饅頭のように膨らんでいる、いわゆるスカートと呼ばれる特殊ゴムの部分などは消耗品であり、一週間も使用すれば交替が必要になつてくる不安定な代物であるし、そもそも水陸両用という利点のあるホバークラフトは平たい土地や足場が悪い土地にて活用されるものであつて、起伏の激しい砂丘にて活用するにはあまり適していない。空気圧によつて膨らんでいる船体の全体のバランスもさほど安定している様子ではなく、時折、突然に小さな崖のようになつている箇所に飛び出してしまうえば、船舶は特殊ゴムを破裂させてしまふ危険を孕みながら左右に機体をぶれさせてしまふ。幸運なことに崖下の砂地は滑らかに広がつていたので、船舶が横転するような事態は発生することもなく、また、特殊ゴムに亀裂が入り空気が漏れ出してしまうことも無かつたが、崖から飛び出すまで船舶の減速をさせることもなかつたホバークラフトの操縦士は、決して優秀な技術

の持ち主ではないのだろう。

事実、ホバークラフトの操縦で言えば、彼は巧みな部類には入らない。下の上、あるいは、中の下と言った程度の腕前ではあった。砂丘という場所にて中の下では、荷が重くはあるから、せいぜい中の上と言う程度の技術の操縦士でなければ船舶の未来は危ういのだが、その操縦士当人とて自らの腕前に対して自惚れを抱えているという訳ではなく、自らの操縦技術では立派な船舶を砂の海に沈没させてしまうという最悪な事態を招いてしまう可能性があるということとを、そしてその可能性が凄まじく高い確率で生じるということも、わかつてはいるのだ。しかし、他に手段がなかったのだから仕方が無かったし、また他の大勢の乗組員たちもそれを前提にした上でシートに身体を固定させて船舶が横転しないことを祈っている。中には怯えるあまりに、周りの人に心配をさせる程に震えている女性もいた。パンダのようなふくよかさの老年である。彼女は異常災害の時に住める所を失い、共に住んでいた夫の行方もわからぬが恐らく死んでしまったので天涯孤独の身になったという、絶望に身を浸してしまっている哀れな人間の一人であったが、この船舶内では、彼女のように不幸な身の上になってしまった人や、通常の間人が送るような生活とはかけ離れた生き方の、一種独特の境遇にある方など、様々な種類の人間が多いわけなのだが、その大勢の他人たちは、広大な荒地世界の東西南北各地で船舶に拾い上げられて、船舶を生活空間として成り立たせる為の乗組員となった連中だ。パンダのように丸い老女も、この船舶に乗り込んでから砂丘に踏み入るまで、彼女自身がまだ若い時に習得した手作りガーデニングについての知識と経験を生かして、小さな女の子に助手をしてもらいながら、船舶内に癒しの花園を作っていたものだった。砂丘に入り込んでからは、はじめこそシートに身体を貼り付けながらも、庭園で育てていた繊細な世話を必要とする花々の心配をしていたものだが、今では頭の中をパニックにしまっているから、異常災害の時に垣間見た、忘れる事の出来ない残酷な光景をフラッシュバックしてしまっ

ていた。美しい赤紫の花が咲けば嗅ぐことの出来る、恐らくヒーリング効果のあるあのまるやかな香りのことを思い出せば、老女も身体にどうしても襲い掛かってくる骨まで凍るような冷えに震わされることも無かったかもしれないが、船舶が衝撃によって激しく揺れる度に、老女は過去に味わった針に貫かれるような恐怖を思い出さずにはいられない。

「き、きつと天罰なんだわ。夫が死んだのに長々と生き続けていることに、か、神さまが、怒っていらっしやる。…お、お許してください…お許してください……」

老女が両手を擦り合わせながらミキサーのように全身を小刻みに振動させている様は、滝を頭から浴びながら念仏を唱えるお坊さんよりも深刻で、長い年月の間に刻まれた皺が眉間に険しく寄っているのは山脈に見える。船舶はいまだ、右に左に激しく揺れ続けている、シートに身体を固定していなければ天井にぶつ飛んでいるであろう様。老女だけでなく、乗組員のほとんどが、揺れと、砂丘の中に沈んで窒息死してしまうのではないかという恐怖で、辛くなっているのを隠せない。勇敢なる男パプテガを除いてだが。

パプテガは船舶プロトノアが世界中を廻って乗組員を集めはじめた頃の、そのもつとも初期の頃にプロトノアに乗り込んだ人物で、そして多くの他の乗組員たちから、溢れるような敬意を集めている男でもある。筋骨隆々で逞しく、身長は二メートルを超えているし顔つきも漢らしい、に加えて物腰が柔らかくジョークで皆を笑わせることを得意としているので、プロトノア髓一の人気者なのであるが、パプテガはナマズも驚くであろう振動の渦中にあっても、大木のように太い自らの両足で船内に立ち、長引く不安のせいで弱りはじめている友のために、励ましの言葉を掛けたり得意のジョークを口から零したりするのだった。彼は普段のプロトノアの生活では、不届きなことが起こらない為の警備の役割を任されているが、やはり見回りの仕事をしているだけあってか周囲の様子の変化に対する気付きには敏感で、手作りガーデニングが得意である老女イネの顔

つきが他の誰よりも青白くなっていることに気が付き、暖かいコーンポタージュの缶を自動販売機から取り出してきて彼女に渡したのは、実に気配りが利いていた。パプテガからコーンポタージュを手渡されるまで、イネは思いつ切りに目を瞑っていたが、頼りがいのある一人前の男に励まされたことは多いに彼女を安心させた。

「イネさん。このコーンポタージュを飲んだ人間は、私の知っている限りでは皆が幸福に包まれた表情になりましたよ。きっと作った人の真心がこの缶の中に詰まっているからでありますよ」

「…あ、あら、ただのスチール缶にしか、私には、み、見えないわ。そ、それに、こんなに揺れる中で飲み物を飲むことは、む、難しいんじゃないかしら」

「こんな揺れ、たいしたことありません。操縦士のミカヅキ ロウは、普段は寡黙ですから何を考えているのかよくわからない男でもあります。大事な時にはやってくれる男だということを、私はあいつ自身から何度も教えられました。世界を廻っている内にプロトノアは何度も沈みそうになりましたが、あの男の直感の鋭さのおかげで船と乗組員は生き延びることが出来たのです。…さあ、一息に飲む必要はありません。しかし一口ずつでもいいから、お飲みになるといい。身体の震えが止まるだけでなく、幸福が向こうから、勝手に歩いて来てくれる」

「あ、ありがとうねえ…、パプテガさん。ふ、ふるえちやってるけど、ゆ、ゆっくりと、の、飲ませてもらうことにするわ」

「ごゆるり、飲むといい」

パプテガは頭が大きすぎるせいで嵌ってくれない防護用のヘルメットがずれないように注意をしながら、曲げていた下半身を直立させると、老女が小人になってしまう程の高い見晴らしから、船内で困っている者はいないかと探った。すると、臆病な青年のものらしき声が「パ、パプテガさあんっ！」と彼を呼んだ。青年は、青年の隣のシートで身を固めていた、普段は地学的な研究に勢を傾けているロイド眼鏡の学者が、気を失ったまま泡を吹いてしまっているこ

とを知ったので、大体の人間が歩くことも出来ない振動の中でも他者に気を向ける余裕を持った勇敢な漢、パプテガの助けを呼んだのである。さすがパプテガは、青年の座っているシートの位置は広い空間の中でもっとも遠い位置にあったが、走って駆けつけたので、アツという間に学者の元に近づき、ずれてしまっているロイド眼鏡をしつかりと真っ直ぐに戻してあげるのだから、余裕がある。

「何時からこうなった!? これはまずい状態だぞ!」

ミルクが泡立ったようなものが口から次々流れ落ち、学者の首筋を伝い、彼が着ている服の襟の部分が濃い色になっている。パプテガは、プロトノアの唯一の医者であり名医でもあるフルーチャにすぐにも診せなければならぬと思い、隣のシートで戸惑っている青年に彼の居所を知っているか聞いた。

「のっぺり顔の名医さんがどこにいるかわからないか!」

「い、いえ…。シートに貼り付いてからは、どこに誰がいるかなんて……」

「そうか…。いや、それはそうだな」

「すみません」

「おそらく医務室にいるだろう。呑気なああの男のことだ、シートに貼り付いているのが面倒だから医務室のベットに自分の身体を巻きつけて眠っているに違いない……」

「そんなまさか!」

青年は、パプテガが言った、『ベットに自分の身体を巻きつけている』というのは冗談だと思って頬を少し緩めたが、パプテガはそれは十分にあり得ることだと思って言ったのだ。フルーチェは腕の立つ医者だが性格が変なので、誰もが驚くような突拍子なことをやる癖がある人間だが、フルーチェとは同郷で育ったパプテガには彼の変態ぶりがよくわかるのだった。

「まあ医務室にいてくれるなら話は早い。こういう振動が強い時のことに備えて、あの部屋は振動に対して抵抗が強い仕組みになっているからな。何が原因でこの男がこんな状態になったのかはわから

んが、フルーチェに任せれば、何とか治療出来てしまっただろうな」
パプテガは言葉を言い終えた頃にはシートに貼り付いていた学者の身体を自由にしてやり、船の振動によって学者が飛んでいかないよう注意することを忘れず、たった一人で、慎重に学者を肩に担いでみせた。青年は頼りになるパプテガという漢の力を目前で見ていると、男惚れみたいなものしてしまいそうになり息を飲むと、気の利いた言葉の一つも掛けなくなったが、どうい言葉が良いだろうと考えるほどに口と咽喉は緊張してしまっただった。

青年は、まともに気の利いたことも言えない自らの知恵の貧しさに落ち込みそうになったが、それとほぼ同時に今までに無い、横転を自然と想像させられるような巨大な振動が起きた。

「うわああああッ！」

青年は落ち込むことなど忘れ叫び声をあげ、そして途端、プロトノアが沈没することを脳裏に過ぎらせ、恐怖に囚われパニックに陥れば、それに追従するかのように天井に取り付けられている電灯が点滅して、かと思えば次の瞬間には停電を起こして室内は暗くなったので、乗組員のほとんどが船舶の横転によって人ごと沈んでしまっただのではないか、はたまた、船舶の倒れている所を凶暴な野獣、猛毒を持った虫に襲われて殺されてしまうのではないか、と想像してしまう。それはプロトノアの船員の誰にとっても最悪な結末で、誰もが有る程度は覚悟していたことだが、また同時に船員の誰もが、何が何でも回避しなければならぬと思っていた結末でもある。彼らは死ぬわけにはいかず、また倒れるわけにもいかぬ。プロトノアは、異常災害によって飢餓と混乱に包まれた世界に新たな光明を振りかざすであろう約束の場所、『白砂の草原』を目指しているのだから。

「ぐっ！」

シート自体を吹き飛ばしそうな程の縦揺れが生じたかと思えば、室内の側面についている外の様子を窺うための強化ガラスが軋む音を経てる程の激しい横揺れも生じる。パプテガは超人的な身体能力

でその震動に耐えてみせるために、血が滲む程に歯を食いしばり、飛び出るのではないかと疑うほどに眼球を開いていたが、気を失った学者の体重を片腕と肩で支えた上で自らの足も地につけて置くというのは、彼と言えどもあまりに酷な事だった。

天地がひっくり返るのではないかと思える衝撃が室内で踊り狂った瞬間に、青年はその犬のような両眼でパプテガが学者を手離してしまった光景を見て、また自分自身の感覚がふわっと夢に包まれるような味わいをすれば、学者が人形みたいに無抵抗で、強化ガラスを突き破って特殊ゴムを転がり落ちやがて姿を消してしまったことにも、不思議と驚きはしなかった。そして、後頭部にぶつかった何かが青年の感覚器官を麻痺させたころには、彼の肉体は天井に浮かび上がってから、床に叩きつけられてしまっていたので、気を失う。彼の倒れたすぐ真横に、広大な砂の海に一人飛び出してしまった哀れな学者の、先ほどまでつけていたロイド眼鏡が、転がっていた。

船舶プロトノアの危機

うつすらとした暗い影の増した室内。船舶プロトノアの駆動音が何時の間にか止んでいるから、耳鳴りの音が聞こえるほどに静かだった。視界はしばらくぼやけていたが、手足が動くことを確認できた頃には、青年は、自らの身体がシートから剥がれていて、何時の間にかリリウムの床に横たわっていることに気が付く。前後の記憶が曖昧なせいで何がどうなったのかしばらく思い出すことが出来なかったが、船が、横転こそしていないものの、特殊ゴムのスカートが普段鳴らしている、空気を擦らせているような音が聞こえないことに気が付けば、汗が全身から噴き出て止まらなくなる。船舶が特殊ゴムを損傷してしまい空気を集めることが出来なくなったのだとすれば、計画は終焉の鐘を鳴らすからだ。青年は落ちている、学者の遺物であるロイド眼鏡を拾い上げてそれを懐に仕舞ってから、再び震動が起きる可能性のことに気を配りながらも、大胆に室内を歩き回り、他の乗組員たちの安否を確認した。怪我をしている者はいたが、死んだ者は学者以外にはいなかった。だが、パプテガの姿がなかなか見つからなかったので、青年は勇敢な漢が砂丘に吸い込まれて命を落としてしまったのだろうかと思像し、学者が突き抜けたことによって粉々に割れた強化ガラスから、外に広がる砂の海を眺めた。真下を見た時に、青年は思わず、ごくりと息を呑む。

船舶の側面の突起部分に片手だけで捕まり、もう片方の手で学者の脱力している体を落ちないように支えているという、とんでもない漢の姿が、顔を真っ赤にして青年を見上げていた。かすれたような声で、「な、なわだ」と言ったが、青年はパプテガの強靱ぶりが異常の域に達していることへの驚きに夢中で、彼の言葉の意味を捉えることがしばらく出来なかった。よって、パプテガは青年に発見されたというのに、すぐには救助されなかった。

だが何時の間にか青年の背後にいた老人イネが、青年と同様の光

景を見れば、「 PAPUTEGAさんが、縄、縄だつて！ はやく、あなた縄を持ってこないと彼が死んでしまうわよ！」とパンダのようにふくよかな身体をぷりぷりと左右に動かしながら叫んだので、青年も意識をハッキリさせることが出来て、 PAPUTEGAを助けるために道具が必要なのだと確認することも出来た。

「ロープと、そして人だ！ PAPUTEGAさんと学者さんを助けなきゃ！」

「あなた！ もっと機敏に動かなくちゃダメじゃないの！ PAPUTEGAさんのような勇敢な人を見習わなきゃ彼女の一つも出来やしないわよ。馬鹿ねえ、ほんとお馬鹿さんよ！ はやくおし、はやくおしい！」

「わかつてますよ！ それと、僕にだつて彼女はいます！」
「まあ案外なこと！」

青年は実際には彼女などいない、寂しい男であつたが、老女イネに馬鹿にされることが悔しいので嘘を口走つたのだった。彼は室内のもっとも背部に備え付けられている緊急時用具入れから綱引きにも使えそうなロープを一本取り出すと、多くの乗組員に向つて PAPUTEGAの危機を伝える。そして手伝いをするように声を掛ければ、 PAPUTEGAの人望の力というわけであるう、自然と人々は群がって来て、それぞれが両手でロープを握り締め、持ち上げた。

青年は PAPUTEGAが力尽き、すでに砂丘に飲み込まれてしまつてい
る可能性のことを考え、不安であつたが、強化ガラスから首を出して真下に顔突き出してみれば、その先にはヘルメットを捨てて銀髪が露わになつている PAPUTEGAの猛々しい姿が、まだそこにあつた。無論、もはや血管が切れてもおかしくは無さそうな程に、顔が紅潮してはいたが、学者のことも、いまだ手離してはいないのだ。

「 PAPUTEGAさん、捕まってください！」

青年はロープが PAPUTEGAの位置にまで届いてくれるか心配したが、緊急時の縄であるから長さは余分なほどに確保してあつたらしく、見事に PAPUTEGAの目前にまで縄は垂れた。 PAPUTEGAは常人離れした

運動神経と、尽きることの無い強靱なるスタミナで、一度手離してしまつた病人を追いかけて救出し、また自らの命も失わずに船舶内に帰還することに成功したのである。

「よいしょお、よいしょお、よいしょお！」

多くの乗組員たちが声を合わせて縄を引っ張れば、あつという間にパプテガと学者は引き上げられた。勿論、パプテガの命は助かったが、学者の命はひどく危うい状態にあつたので、学者は手の空いている男数人によって担がれ、変態フルーチェのいるであろう医療室に運ばれていった。それからしばらくすると、室内は奇妙な沈黙に包まれ、勇敢な漢を褒め称えるような騒ぎも生じなかつた。というのは、褒め称えられるべき当人が、さすがに身体がおかしくなつてしまつたらしく人の話に応えられる状態ではなかつたし、また、船舶の揺れがおさまり、特殊ゴムの空気が漏れているような音が先程から鳴り続けていることから察するに、プロトノアが砂丘に沈み込んでしまふのは時間の問題だと誰もが悟れたので、皆、口を開けなかつたのだ。船舶の乗組員たちは死ぬことを本格的に覚悟せざるを得ないので、なんとか対処をしなければならぬのだが、元々シートに張り付いていた連中は生活面で活躍する面々ばかりなので、船舶の状態を良くするための知識、あるいは技術、を持ち合わせている輩はいないのだつた。皆、自らが口に出れることは不安を煽るような言葉ばかりで、せめて出来ることと言えば奇跡が起きるのを祈ることだけだとわかっている。銀髪が目映い勇敢なる大男パプテガが苦しそうにしている姿も、普段は彼を頼りにしている乗組員たちにとっては実に痛々しくあり、その姿は彼らに終末を予感させるには十分の材料であつた。その室内では、震動こそ収まつたが、またそれとは別の種類の絶望が、ゆっくりと染み込み、暗闇の色をしているというわけだつた。

やがて、ヒステリック女のヒギーが口火を切るようにして狂つた。ヒギーはウェイトレスとして料理を運んだり厨房を上手く回転させたりなどの役割をこなしていて、その仕事ぶりは悪くはなかつたが、

ストレス解消の仕方が下手なせいで周囲の人間を困らせることが多い女で、そういう人間が死神に手招きをされたので、狂ってしまったのだ。彼女は細身の身体をぶるつと振るわせると、自分で自分の身体を抱きしめるような仕草をしばらくした。そして突如、頭を両手で抱えて、何かに怯え惑っている歪んだ表情のままに、室内を駆けずり回り、そしてシートに頭突きをした。

歌うことと平和と安らぎを愛する男ヘンヴァーレが、いつも被っている帽子にくっ付いている羽根をいじくりながら、普段と同じ、全てに慈しみを与えるような優しい声音で歌い始めると、ペギーの元へとゆつたりと歩いた。そしてシートに頭突きをすることを続けている彼女の耳元で、子守唄らしきものを囁き続けた。ヘンヴァーレの歌声には不思議な力がある。慈愛に満ちている彼の心が、その咽喉から紡がれる歌にも不思議な魅力を与えているのかもしれない。ペギーはヘンヴァーレの子守唄が作り出す安らぎの繭に包まれて、何時しか頭突きをしていたシートにそのまま寄りかかり、不様な姿勢であることも気にせず、眠りこけてしまった。プロトノアではよく見られる風景だが、こんな時にペギーのヒステリーに付き合わされては心身に悪影響が出てしまうので、皆は普段よりもヘンヴァーレに感謝した。ヘンヴァーレは皆の賞賛に対して、照れたようにはにかんだ。

「ペギーが起きた頃には全てが良い方向に転がってればいいんだけどね。僕には歌うことしか出来ないけれど」

しかしヘンヴァーレの願いとは裏腹に、状況はどんどん切迫した方向へと進んでいき、暗闇の色が乗組員たちに纏いついて重みに変わっていく。誰かが操縦士ミカツキ　ロウの様子を窺いに行った所、先程の衝撃の時、わき腹に部品の破片が刺さったらしく、彼が操縦など碌に出来るような調子では無いことが判明したのである。ミカツキ　ロウは唇を真一文字にして操縦席にうずくまっていたので、操縦桿を握ってはいなかった。様子を見に行った誰かは、ミカツキ

ロウの普段見ている景色に視線を重ねて見ると、プロトノアの船

頭がひしゃげて左に九十度曲がっていることを知って、もはや船舶は不能なのだと理解した。そのことが誰かの口から乗組員たちに伝わった時、すさまじい動揺がわらわらと蠢き、そしてペギーのように気が狂った人間が数人出てしまった。だが、ヘンヴァーレの子守唄によって何とかシートに寝かしつけた。それから数分後に、医務室の方から男一人が駆けつけて来て、地学的な研究に勢を寄せていた学者がフルーチェの治療を受ける前に病気で死んでしまった、ということ息を切らしながら皆に告げた。気の短い調理師がその不仕付けに怒り出してしまい、駆けつけて来た男を愛用のフライパンで殴った。その力があまりにも強かったせいで、殴られた男は気絶してしまった。怒りが治まらない調理師にフライパンで殴られるのは、乗組員の誰もがゴメンだったので、ヘンヴァーレにまたも歌ってもらうことになった。鬼のような形相だった調理師は、子猫みたいにぐにやぐにやになって、すっかり可愛らしくなつてから床で眠った。その姿を見下ろしているほとんど全員が、自分もヘンヴァーレに眠らせてもらえれば幸せな最期を迎えられるかな、と思った。船舶の沈没は始まつたらしく、割れている強化ガラスの部分から砂が入り込んで来た。「逃げよう！」と青年が叫んだが、「何処へ逃げるというんだ。潔く埋もれるしかない」と誰かが言えば、もう絶望と諦めしか残らなかつた。本当にヘンヴァーレに子守唄を歌ってくれと要求する輩まで、出て来た。

そんな風な状況の中で、今までリノリウムの床で横たわっていたパプテガが遂に目覚めた。さすが超人的な彼は、わずかな睡眠だけで疲労していた身体が元氣を取り戻しているらしく、瞼がパツチリと開いていた。そして即座に周囲の状況を理解し、もはや一刻の猶予も無いことを知ると、みんなの注目が集まる中で、すぐに指示を出した。

「操縦席にいるミカツキ　ロウと、シートと床で眠りこけちゃっている連中を、手の空いている奴らでそれぞれ背負ってくれ！　砂が入り込んでくる前に、急ぎでだ！　そしたら、あとは俺の背中に付

いて来てくれたらいい！」

パプテガの力強い言葉を聞いた全員の瞳に、希望の光が宿った。暗闇の色はうつすらとした霧となってハジけ飛び、暖かい朱色がそれぞれの胸内で湧き上がる。ミカヅキ　ロウを率先して助けに向ったのは彼女のいない青年と掃除係の男で、他の手の空いている全員がヘンヴァーレの子守唄で眠りに落ちた連中を二人組になって担いだ。そして砂が皆の足元を覆い隠すその寸前に、全員が力を合わせたことによって、パプテガの指示をこなし、シートが幾つも揃えられていた広い室内を抜け出た。巨大なパプテガが先頭で、一番後ろは気の短い調理師を片肩ずつで担いでいるヘンヴァーレと力持ちの女だった。力持ちの女は密かにヘンヴァーレに恋をしていたので、近づけば森の香りがするというヘンヴァーレの体臭をこの機会に嗅げはしないだろうかとひっそり思っていたが、肩で担いでいる調理師があまりに油臭いのに邪魔をされて、願いは叶わなかった。密かに彼女は二度三度舌打ちをした。

パプテガを先頭にした乗組員の縦列は、何時とも背後から迫ってくるかもしれない砂の流れに、急かされるようにして船内の深部に向っていた。深部には乗組員の多くが進入を許されていない動力室があるが、深部はすなわち船の底側に近いので、動力室の方に向うのは自殺行為に等しいはずだった。だから、途中で合流した変態フルーチェと数人の男たちはパプテガに確認を何度もした。

「身体は丈夫でも頭は簡単に壊れてしまうものだ。パプテガ、天と地が逆さまになった奇妙な脳味噌になつてなつちやいないだろうな？　おい、私の顔は正常に見えているんだろうな、ああ？　目と鼻と口が順に上からくっついて見えているだろうか？」

「ああ、いつも通り、むかつくほどのにっぺりしているお顔だな。いつも言いそびれていたんだが、お前の顔って糊を幾重にも貼り付けたみたいなき感じがするよな。脅威的なっぺり具合だから、天井に貼り付くかもしれないぞ。試しに投げてみるかな」

「へ、へ、へ。さすがにそんな趣味は、難しいかなあ」

パプテガの頭が正常だということを認めたフルーチェはパプテガの背後に付くと、ベットにぐるぐる巻きになっていく自らの身体を、筋肉のある男たち数人に運ばせるのを再開した。彼は医療室のベットに自らの身体をくくりつけたまま逃げなければならなかったので、自分の足で走れないのだった。

フルーチェの乗っているベットが男たち数人によって迅速に運ばれていく様を後ろから眺めている青年は、学者の命が間に合わなかったのはこの医者が変なことをしていたからじゃないのかと疑ったが、それを口にするには勇気が足りず出来なかった。なんでパプテガはこんなへんちくりんを信頼しているのだろうか、と青年には心底不思議に感じたが、たしかに、今まで診療室で治療を受けた人の中で生きて帰ってこなかった人間はいなかったかもしれないとも思い出すし、流行り病が船内で起きた時にも、素晴らしく効き目のあるワクチンのおかげで事態がすぐに収束したことも思い出せる。

そう考えてみると、プロトノアでの初の死人が学者だったのかと思いがたることが出来て、何だか青年は空しくなって、少し嫌な気持ちになった。だが嫌な気持ちになっていたのは彼だけでは無かったし、平然とベットで横たわり目を瞑っているフルーチェも、内心ではひどく落ち込んでいた。フルーチェは変人ではあったが情の厚い医者なので、学者を救えなかったことを　しかも自らがベットに張り付いていたせいで対応が間に合わなかったので　嘆いていたのだった。実は、青年の疑いはまったくもって的確を得ていたのである。

最深部動力室

階段を降り、最下層にまで降りていく。

やがて船員の誰もが、シートのあつた室内から入り込んだ砂が、上階のほぼ全域に雪崩れ落ちたのではないだろうかと疑つたのは、今いる、動力室付近の静寂なる通路の天井から、轟くような、呻くような、そういう重低音が聞こえて来るからだつた。砂に閉じ込められたのだ、という圧迫感が彼らの胸を締め付け、老人イネなどは恐怖からくる発作を押えるためであるう、胸に両手をあてた前屈みの姿勢で走っている。ヘンヴァーレが走りながらだというのに、みんなを勇気づけるための歌を歌つたのは、自らが恐怖に怯え竦まなためでもあつたし、実際彼の歌を聞いた船員たちは足を止めてしまいたいと心が折れそうになる瞬間に彼の歌を聞けば、足はまだ動いた。それにヘンヴァーレの音量が大きいことで、天井からの砂の轟きの重低音が遠のくこともまた、彼らにとってはプラスの要因となっている。

「ここだ。…遅れている奴はいないな？ 全員、揃ってるな！ ここから先は開かずの間だぞ。覚悟を決めといてくれ」

「か…覚悟……？」

誰かの怯えた呻きに対して、白い歯を見せるさわやかな笑顔をパプテガは浮かべた。しかし言葉では何も答えないままに、懐から鍵束を取り出したのだ。金属と金属が擦れ合う音を、鍵束は発している。そして最深部に繋がっている扉の南京錠一つ一つに、鍵を差し込んで捻っていく。カチヨンという小気味良い音を鳴らしながら南京錠は扉を閉じておくという役割を終え、次々に地面に落ちていく。やがて扉が丸裸になった時には、約二十以上の南京錠が赤錆の鎖をくたびれさせながら鉄床に散らばつたから、通路で扉が開く時を待ち侘びている全員はその量だけで圧倒される。だから、自然と心持ちは昂ぶり、落ち着きが足りなくなる程に、興奮が静かに漂う。

恐れと高揚の入り混じった複雑な。

「パプテガは鍵束を懐に閉まっから、真剣な顔つきで、いくぞ」

と全員を見渡した。その言葉に声を返す者は一人もいなかったが、頷く者と生唾を飲み込む者は多かった。砂の重低音が近づいていることは、誰もがわかつている。もはや開かずの間に入り込まなければ逃げ道は無い。が、全員はパプテガという男を信じているから、この方向性に絶望を感じている者など誰一人としていない。開かずの間に踏み入りそこを駆け抜ければ命が助かるかもしれないと、パプテガという男の決定に全員は心を委ねている。そして男はそれに応えられる頼もしさを持っている。パプテガは乗組員たちから目を離し、扉の方に身体を向ける。そして左右に開く形の扉の、その取っ手を両手で掴み取り、力を込めて手前側に引っ張れば、開かずの間とパプテガが言ったその空間の様子が、三十八人の両眼の真ん前に、広がった。

はじめにそこに足を出したのは、先頭のパプテガだ。彼は以前に入り込んだことがあるということだろう、その空間に対して、躊躇することなく踏み込んでいった。だがパプテガのすぐ後ろにいた四、五人は先に進むのを多少遠慮したがったのは、蜘蛛の巣のように、地面や壁に網目状に這いつくばっている、生物の血管らしきものが不気味だったからだ。脈動している、

「これ。生きてるように見えますね、パプテガ殿」

一人だけ、パプテガ以外で躊躇無しに最深部動力室に踏み込んだのはまだ若い女であるキリサメ。ハク。刀の名人である彼女は白兵戦の時に活躍してもらったことを期待して、ミカヅキ。ロウの斡旋でプロトノアに乗り込んだ人物だが、ある戦場で飛んでくる銃弾を全て切り裂き、まるでお遊びをしているような気軽さと、空気のような身のこなしで、一人で敵陣に踏み込み容赦なく全てを壊滅させたという伝説を持っている。いわゆる、超天才という奴だった。が、呼吸と同じような感覚で刃を振るってしまう癖を持っているので、

危なすぎて誰も滅多に近づかないのでいつも一人で胡座を掻いている姿が目立つ。食事を運んでもらう時にもびくびくされてしまうので、少し可哀想なほどに孤独ではあったが、事実、彼女の刃によってプロトノア内の様々な備品が彼女に切り刻まれてきたので用心しなければ本当に危ないのだった。必要なか必要無いかわからないものだったり、あるいは代わりの効くものだったりが一刀両断されるので、実は故意で物を斬っているのではないかと疑われることもあるので、彼女と深く接する者はプロトノア内にはいない。そんな彼女が口を開くことはあまりないのだが、動力室の血管を見た途端に意気揚々と口を開いたので、実に危なっかしい予感を周囲に感じさせる。

「キリサメ　ハク。斬ってはだめだぞ」パプテガが一応の忠告を挟むと、

「まさかそんなことはしませんよ」とキリサメ　ハクは言ったが、彼女が鞘を握っている右手が、わなわなと密かにうずいているのを、背後にいた青年は見逃さなかった。青年は彼女の間合いに踏み入らないように注意しつつ、最深部動力室にひっそりと入り込んだ。

パプテガ、キリサメ　ハク、青年、と三人もの人間が進めば、他の者も足を進めることにためらいを見せなくなってくる。砂に追われているという圧迫感から逃れたいということもあるので、ためらいを無くした人々は雪崩れ込むように最深部動力室に足を進めた。が、血管のような奇妙なものに対してだけは、踏まないように慎重であったから、足元がそれぞれおぼつかなかった。ベットに巻きついたままのフルーチェを担いでいる男たちなどは、見るからに、今にも転びそうではあった。だがやがて、全員が最深部動力室に踏み入れれば、誰かが扉を閉める。扉が閉まった瞬間に、砂の重低音が聞こえなくなった。その代わりに、空調の時に鳴るような音がそれぞれに耳に入り込んだ。

「こんなに広い部屋があったんだねえ。ここが一番広いんじゃないかい？」

老人イネの呟いた言葉に、大体の人間がその通りだなと感じる。しかし、それに対して誰も言葉を返さなかったのは、あまりにも、室内の左右の広さと奥行きの高さが凄まじいものだったことで圧倒されてしまって口を開けなかったのだ。天井に照明が取り付けられていることは、見上げればわかるが、天井が高すぎるせいで、足元は暗かった。しかし血管のようなものが蠢いているのは、中に入っている液体らしきものが、緑色に蛍光していることによつて誰にも見え、その緑の蛍光を灯りにして前に進むことになった。前に進むほど、血管の網目のように広がっている様が多くなり、それはとても気持ちの悪い光景であつたから、それぞれがあまりいい思いをしなかつた。ヘンヴァーレの子守唄で眠っていた調理師の男が、何時の間にか目を覚ましており、緑に蛍光している血管を見た途端に「なんじゃこりゃあ！」と叫んで、担がれているにも関わらずフライパンを振り回そうとした。力持ちの女は心底憎たらしく思ったので、舌打ちをしながら、調理師の鳩尾にパンチをぶち込んだので、調理師の男は再び気を失つた。今度は白眼を剥いているので、あまり心地の良い意識の喪失には見えなかつた。その一連の流れを見ていたヘンヴァーレは、苦笑した。

「すごい光景だつた。すさまじいものだね」あまりにも優しい口調で言つると、その彼の整つている顔が足元から照らし上げる緑の蛍光で美しく染まっていたことに圧倒されると、自分の漢っぽい部分を見せてしまったことに対する羞恥とで、力持ちの女は恥ずかしくなつて俯いた。赤面の赤と蛍光の緑が混ざつた女の顔は、とても顔色の悪そうな感じになつていたので、心優しいヘンヴァーレは思わずそれを心配した。彼女は、俯いていたのでそのことを知らない。

力持ちの女が俯いているその十メートルほど右側にて、彼女のいない青年は、動力室最深部に入つて、歩いている間、キリサメハクの刃が届かないであろう背後の距離から、ばれないように彼女の顔を観察していた。何時とも触れがたい血管を興味本位で切り裂

くかわかったものではないので、見張っているのだ。と、いつても、キリサメ　ハクは怪しい背後からの視線に最初から気が付いているので、それは見張りというには効果があるのか危うい。実際、ただの青年一人に見張られた所で、キリサメ　ハクは常人には見えない速度で刃を振るうことが出来るので、近くで血管が損傷したとしても、キリサメ　ハクがやってないと言い張れば、見張っている青年がキリサメ　ハクがそれを斬ったのか判断を付けられなければどうしようもないのだ。限りなく黒に近い灰色だとしても、決定的となる『斬った』瞬間を誰にも見せなければ犯人にはならない。むしろ、見張っている者がいてくれることはキリサメ　ハクには都合であり、というのは、キリサメが斬っていないという証明を見張っている者がしてくれることになるからだ。見張っている常人には、彼女が刀を振るって物を傷つける瞬間を見定めることは出来ないのだから、そのこと事態が彼女が犯人ではないという証明をしてくれることになる。青年はこう言うしかない。「彼女は特に怪しい動きをしていなかった。歩き方が不自然になったような様子さえなかった」。だからキリサメ　ハクは、やるならば今こそが刀を振るうチャンスだった。誰かに見張られている今だからこそ、血管を試しに斬ってみることが出来るのだから。実際、彼女は疼いていた。彼女の脳味噌の奥底でいつも噴き溜まっている斬りたいという欲望が右手に電気信号となって響き、呼吸するかのようにして刀を鞘から抜き出し、対象を斬り、刀を再び鞘に収めるまで、彼女にはそこに到達するまで0.1秒も必要とはしない。キリサメ　ハクは緑に蛍光している血管が、床に網目状に広がっているその割合を増やせば増やす程、それらを斬った時に手の平にわずかに残る感覚がどれほどに気持ち良いだろうかと想像してしまい、刀を普段持たない方の左手でさえ、ぴく、ぴく、と指が疼く。しかしキリサメ　ハクは斬らなかつた。その緑の蛍光色に対しては、斬りたいという欲望も湧くが、それとほぼ同じくらいの大きさでそれを斬ってはいけなさと自制したくなる思いが強いからだ。彼女はその緑の蛍光色に、か

つて住んでいた、今は帰ることの出来ない、いつか帰属したいと思
っている故郷のような感覚を見出していた。だから疼きは自制され、
見張りが付いているという絶好の機会でも、刀を鞘から引つ張り出
さなかったのである。

「……おい、はぐれている者はいないな？ みんな、聞いてくれ。
これが今までプロトノアの動力の元になっていた心臓部分。つまり
コアだ」

三十八人の眼前に現れたのは、血管の色と同じまばゆい緑の蛍光
を放つ、誰もが教科書や図鑑で見たことのあるのと同じ、人間の胸
に一つだけ潜んでいる心臓そのものの形をした代物。ドクン、ドク
ン、と一定間隔で打ち鳴らされる鼓動が、空気に波紋を広げていく
力強さを持っている。その力強さに導かれるようにして、三十八人
の心臓もやかましく騒ぎはじめるように変わり、動揺がわずかに走
る。老人イネなどは、苦しそうにうずくまってしまい、「大丈夫で
すか？」と、周りは心配した。「大丈夫、大丈夫」とイネは無理を
した表情で、胸を押さえながらだが、よたつきながらも立ち上がった。
パプテガはそれを確認してから、言葉を続けた。

「だが、別にコアがここにあることを皆に見せたからといって、今
の状況が良くなるわけではない。これは船を動かす為にあるコアで
あって、俺達が砂丘に埋もれるのを救ってくれるスーパーマンでは
ないからな」

その言葉を聞いた面々に動揺が走り、血気盛んな者が慌てて叫び
出す。

「じゃあ何の為にここに来たんだ！」

「まさか、パプテガ！ 本当に策無しだったということかよ！」

「死にたくない！ 死にたくないぞ！」

その五月蠅いばかりの騒音をパプテガは手をパーの形で前に突き
出すことで制すると、その突き出した手を巨大な心臓が納まってい
るケージに向け一指し指をそれに指し示す。

「これは人間の声に反応する、生きている動力とも言われるものだ。

あまり騒いだりすると不安を感じてしまうから、聞きたいことがある奴だけが喋ってくれ。みんなが不安なものわかるが、大丈夫だ、俺には皆の命が助かる未来が見えている。この最深部動力室でみんなに見せたいのは、この心臓ではなく、二人の人間なんだ。これまで誰にも姿を見せないでこの部屋に姿を隠していた仲間が、俺達の危機を救ってくれる」

あまりに突然なことだった。学者も含めれば三十九人が乗組員ということ、その全員それぞれが持てる力を振り絞って『白砂の草原』に辿り着く。そういう話で一致団結していた現在の三十八人にとっては、実は後二人仲間がいたのだということは何か複雑な思いを感じずにはいれなかったのは、完全な信頼を預けていたパプテガが三十八人に隠し事をしていているということにそれぞれが哀しみを感じたからであった。

「みんな、隠していてすまなかった。だが、その二人、いや、正確には一人のほうなのだが……。そいつからの願いでね。決して、緊急の時以外には、最深部動力室に『生きたコア』があることと『そこで研究に没頭している人間』がいることを誰にもばらさないでくれと頼まれていた」

「だったらそいつに現れてもらいたいもんだな。そうしなきゃ、パプテガが嘘を言ってるのか本当のことを言ってるのかの判断が付かない。みんなからの尊敬の念を失いたくないから嘘を言っているということではないと、証明してくれよ」

皮肉めいた声付きのその人物は、特にパプテガを信頼していた人間だった。

パプテガは嘆きに変わりつつある信頼に対して、簡潔な、自信があることを窺わせる言い方で返事をしてみせる。

「すぐにやってくるさ。部屋に三十八人も入ってきたことに、あのひきこもりが気が付かないわけがない」

そのような言い方でハッキリと、普段パプテガが物事の指針を決定する時のよどみない声を聞けば、乗組員達全員はおとなしく彼を

信じることになり、皮肉な性格をしている人間が憎まれ口の二つを叩くことも生じなくなった。

蛍火

時間が流れる。五分間、誰も口を利かなかった。じっと、腕を組んだまま立っていたり、隣の人間と軽く雑談のようなことをする者などいたが、しかしその五分間に隠されていた二人が現れることは無かった。次第に雑談も止んで、コアが稼動していることで鳴っている音だけが全員の耳で響くようになった。砂の大群が動力室に現れるのは何時とも知れない。焦る心持ちで、沈黙に耐え切れず、誰かがもう一度パプテガを追求すべく口を開きかける。

それが遮られたのは、緑に蛍光しているコアに異変が生じたせいだった。ドクン、ドクンという鼓動音の鳴り響く間隔が縮まり、ドク、ドク、ドクと激しくなる。さらに、蛍光の色が、緑から赤に変わってみせ、全員の身体が赤く染まった。その目映い赤と間隔の縮まった鼓動が、その空間にいる者たちをパニックに近い症状に陥らせたのは、目の前で大きく佇んでいるコアの、赤色への凶暴な変化のせいで、生理的な焦燥を感じざるを得ないからだだった。そして、老人イネが倒れた。

「フルーチェ！」

「わかつているぞ」

聴診器をすでに耳に当てているフルーチェが、自らで縛り付けられている体を自由にすると運ばせていたベットから飛び降り、自らを運んでくれていた連中に感謝の意を表していると思われる仕事をしてみせた。その後、コアの変貌の影響で倒れたと思われるイネの元に、すぐさま駆け寄ったそのスピードが実に素早いのは、学者を助けなかったその失敗のことを意識しているからかもしれない。

フルーチェはしばらく真剣に、のっぺり顔を歪ませて皺くちやな顔つきになっていたが、聴診器を老人イネに数回当てた後には、安心したかのように歪ませていた皺を元に戻し、のっぺりとした顔に戻った。そしてその顔を上げて、言った。

「うむ。気を失ってはいるが、命の危機というほどではない。安心しろ皆の衆。この老人は長生きする御老体みたいだぞ」

だがそれで一安心というわけにはいかない。むしろ気を失った人間が出たこと、それとコアの赤の躍動が生理的焦燥を出現させること、砂が今にも背後から襲い掛かってきてもおかしくはないこと、という三つのストレスが交錯しているのだから乗組員たちはもう限界であった。優しいヘンヴァーレですら、苦しそくに頭を抱えているのだから。

限界が爆発する寸前。おそらく、残り数秒で爆発していただろう。だが、爆発は生じず、三十七人に隠されていた存在が暗闇より赤く染まりながら姿を現したことによって、限界が爆発することは防がれたのであった。カツン、カツン、とヒールの踵の音のようなものがするので、二人の内の一人は女だとわかり、もう一人は身長が小さいことからまだ子供だとわかることが皆には出来た。

そしてコアの光によって、身体の右側が真っ赤に染められているその二人の人物が近づけば近づく程、ヒールの音を鳴らす女が、隠されていたにふさわしい、実に恐ろしい人物なのではないかとハラハラすることにもなった。というのは、明らかに、子供よりも二倍近く身長のある女性は、頭に巨大な針のようなものを刺しているとわかったからである。まち針のようであったが、女の頭部の右上から左下に突き抜けているそのまち針らしき物は、まち針というにはあまりにも巨大であるし、頭に刺しているという時点で使用の用途がそもそもおかしかった。頭を針に、しかも斜めに突き刺しているのに、平然とヒールの踵の音を鳴らしている。

それに対して、子供の方はいたって普通の少年に見えた。遠目から見てもわかる程に整った顔立ちをしていて、それは冷酷に見えるほどの綺麗さであったが、特徴と言えばそれくらいのもので、まち針を頭に刺しているなどという衝撃を与えられている乗組員からすれば、子供が冷酷な程の精悍な顔立ちをしているからといって驚くことは出来ない。

微妙に警戒したような姿勢をしている者が多い乗組員たちのすぐ目の前に、二人が辿り着いたすぐ後に、女性の方がうざったらしきうに顔をしかめてから言った。

「こんなにたくさんの人間が一度に入ってくるなんて考えられないことだよパプテガ。見なよ、あんたたちがここに踏み入る前は真っ青な色をして落ち着いていたコアが、緑に変わって、遂には怒りを感じたせいで真っ赤に染まった。これではコアが壊れる」

「すまない、フェルクル。だがプロトノアは航行不可能になった。操縦士のミカツキ　ロウも怪我をして自分で歩ける状態ですらない危機だよ。あなたに頼るしかないから、全員でここを訪れた」

「訪れる前に一言くらい言ってもらいたかったね。コアがダメになったら頼られてもどうしようもなくなる。hotalubiは繊細なコアで、人の意志に同調してハイになったりダメになったりする生きた動力だったことはお前に言ってあったと思うがな？」

「連絡する時間など無かったんだ。もうプロトノアは砂のベールに覆い尽くされて陽の光を拝めなくなってしまう寸前だ。一刻の余地も無い。この動力室にも、もうすぐ大量の砂が押し寄せることだろう。そしたらこの蛍火というコアもひとたまりもなくなる」

「…はっ。気に食わないな。プロトノアのリーダー的存在であるお前が、マッドサイエンティストに縋るしか無い様に陥るなんざ、どうしようもないことだな。無能の烙印を授けられても文句は言えんだろう。それに私は女で、お前は男だ。こんな時に女に助けを求めろはか無くなってしまう男は、たとえ白砂の草原に辿り着いたところで皆を纏め上げることも出来はしないだろうな。…まあ、私は死ぬまでhotalubiの研究に勢を傾けていたいから、その費用と場所を確保してもらうための協力はさせてもらうが…。研究者一人が頑張ったところで、新たな土地を開拓することなんざ出来やしないからねえ…。畑を耕すことも、目に優しいお花畑を作ることも、雨風を凌ぐ建物を作ること、研究者一人じゃ不可能だ。だから、そういうことが出来る連中を集めて、そしてそれを纏め上

げて引つ張っていくお前の力が本物であると信じて、私はプロトノアに乗り込んだんだ。勇敢な男の背後でひっそりと研究に励んでくれるのなら、私にとってそんなにも有意義なことはないし、それが最終的にhotalubiの研究の成功に繋がるなら、人間文明にとっても大きく有意義な結果になる。それがみんなが得をするってことだろうか？ その最終的な得に繋がるためには、お前に勇敢で頼りがいがあったって困難を切り抜ける実力を持ってもらうことが大切だ。そのお前に、こんな初手で私に助けを求めてもらうのでは、困るのだよ」

「俺は一人で白砂の草原に向うんじゃない。ここにいる全員で、全員が持っている力をお互いに惜しみなく出し合って白砂の草原に向うんだ。フェルクル。砂丘に踏み入ることを決断したのは、お前のhotalubiに協力してもらうことを目算に入れた上でのことだ。このプロトノアに乗り込んだ面々にはそれぞれに役割があり、それぞれが重要な役割を担っている。白砂の草原に辿り着いた時に街興しをするためだ。俺が何を言いたいのかフェルクルならわかるな？ 今がお前の出番ってことだ。俺は決して、何もかもがどうしようもなくなつたからお前に縋りに来たようなナサケナイ男ではない。たしかにプロトノアを沈没させてしまう状況にしてしまったのは俺の判断ミスだ。学者のベスを死なせてしまったことも俺の責任だと言えるだろう。しかし大方、まだ予想の範囲内だ。俺は俺の頭の中にあつた計画をまだ破綻させちゃあいない。フェルクル。俺は勇敢な漢としてみんなを引つ張っていくつもりだよ。これまで、そしてこれからもだ。今ある困難を切り抜けるために、俺の頭の中にある計画を次の段階に進めるために、フェルクル、同じ乗組員であるお前に協力を頼みに来たんだ。俺は勇敢な男として皆を纏め上げるつもりだし、その実力もあると思ってるが、しかし一人で何でも出来るわけじゃないのは、所詮俺も一人の人間でしかないからだ…… 勿体ぶってないで、力を見せ付けてくれフェルクル。今まで同じ目標の仲間たちに姿を見せることもなく部屋に籠って研究してき

たんだから、その成果を見せてくれなきゃ、みんなお前のことを信用するわけがないだろ？」

しばらく沈黙が走ったが、やがてフェルクルは苦笑した。

「なるほど。パプテガ、それだけ口が回るのだから余裕があると見た。そういう余裕のある男になら、気兼ねなく力を貸せるというものだよ。試すような真似をして悪かった。お前が度胸のある男か見定めたかったのだな。……まあ、どうにしろ、もうすぐここにも砂がやってくるのだから、やるしかないようだがな。見せてやるよ、hotalubiの力を。仲間であるお前ら全員の目前でな」

低い声で静かに喋るが、しかしパプテガに向って挑発するような言い方をするのだから、フェルクルという研究者が内側に太い芯を持っている人物なのだろうということは、全員にすぐ伝わった。ああ、きつめの女性なのだ、と。

整った顔立ちの少年は何の役割を担っているのかは誰にもわからなかったが、相手がまだ小さいということが先立つから、そのことを質問することは乗組員の皆、控えた。それよりも、今はフェルクルの手腕に期待することに視線は集まっていく。

彼女はコアの収められているケージの前に立ち、切れ長の目をさらに細くしながら、コアの状態を観察しているのだろうかしばらく何もしない。彼女の手元には計器か何かと思われる、数値が書かれているグラフ、上がっているレバー、青く点灯しているスイッチ、など様々にあり、その中で特に目立っているのは、現在のコアの真つ赤とは対照的な、冴えるような青を蛍光させている球体。計器の近くに取り付けられているその球体は、コアの制御か何かに使われるものだという推測は、背後から見ている連中にもできる。誰かがその球体について尋ねる前に、フェルクルは物静かな、何かに集中を始めているような声つきで呟く。

「これはコアに話しかける為の、言ってしまうえば翻訳機みたいなものでね。私以外には扱えはしないが、この球体に手を置いてこちらの意志をコアに通じさせれば、安心するようにと伝えることも出来

る。そうすることで、コアの感じている不安を抑えてあげるわけだ。可愛い可愛い、繊細な、赤ん坊みたいな奴でね、こいつは」

青い球体を撫でているその手つきが劣るように優しいことから、彼女がhotarubiのコアに対して熱心に関わってきたことがわかる。自ら一人でそこにあるものを作ったのだとすれば、そうなるのも必然ではあるかもしれない。

「……で、大丈夫そうか？ コアを落ち着かせなくてはいけないのか？」

パプテガにも焦りはあるから、多少苛立ったような言い方にもなる。砂はもうじきやってくるのだから。フェルクルは青い球体から手を離してから、怒っているような真剣な顔つきで振り返った。

「大人しく待っている。私だってここで死にたくはないんだ。コアを落ち着かせる為には、真摯な言葉を掛けてやらなくちゃいけない。雑音が入ってしまうえば、その苛立ちを察知してさらにダメになってしまう。そしたら本当に終わりだ。ここで全員で、砂に埋もれて、死だ」

「……頼むぞ。お前のことは信用している」

「ああ。頼むから、静かにしてくれ」

あまりにも歯に衣を着せないような言い方を続けるフェルクルに對して、黙って話を聞いていた青年は何だかム力つくような心を抑え切れなかった。何でお前はそんなに偉そうなんだと一言言ってみたい気持ちにもなった。気を紛らわせようと周辺に顔を向けてみたら、刀の達人のキリサメ、ハクがいまだにウズウズしているのを横目で確認することになったので、何でこのプロトノアに乗ってる女たちにはマトモな奴が少ないんだ！と、青年は叫びたくなって、その衝動を堪える努力をすることに。

青年がそういう努力をはじめてから、他の乗組員たちも沈黙を固くしているの、最深部動力室は本当に静かであったが、ぶつぶつと、フェルクルが、パプテガに向かって話していた時とは真逆な、心が芯から優しい人であるような声音でコアに話しかけているそれだ

けが唯一の音であった。それは先程まで恐ろしく厳しい喋り方をしていた彼女の発するものとは到底思えないくらい慈愛に満ち溢れていて、意外にも程があった。

そして、その慈愛が効果を発してみせるのはあつという間。誰かが思わず感嘆をあげてしまふほどの、鮮やかさ、素早さで、心臓の蛍光色の赤が変化。何か破滅的な赤から、怪しげに輝く緑に、そして深海の青に変わってみせたのだ。

「……よし。どうやら、上手く行きそうだ。…生き延びれそうだぞ、お前達」

「本当か」

「嘘を付く暇は無い」

安堵の息が幾箇所から漏れる。だが心臓の形をしたコアが青色として平常に戻ったからと言って、例えば目の前に脱出口ケットが現れれば手持ち無沙汰で喜びを表現することにもなるが、そんなものが現れてくれたわけではないのであり、図体だけ大きくて臆病な心臓が目の前にあるだけのこと。皆は当然、実的な解決が欲しいわけであり、口で大丈夫だと言われるのではなく、命が関わっている時には目の前でポンと脱出口ケットを出してもらうことが一番に喜べることなわけである。

「ふん…。仲間達よ。そんな顔をしてないで、もっと感動してくれないとな。hotarubiのコアがこんなにも安らかな青になっているのには、癒されるだろう?」

「そ…そんなことより…!」

意識を何時の間にか取り戻していた気狂いのペギーがヒステリックに叫ぼうとしたが、隣にいた面倒見の良い女性マルーダが彼女の口元を抑えこんだ。「は、はなしなさいよ」それでも猶ペギーは騒がしくするので、コアに悪影響が及ばないようにする為にヘンヴァーの子守唄が必要とされた。目配せと目配せが行かって、無言の内にヘンヴァーにその意志が伝わり、彼はペギーの耳元で囁くようにして歌った。その様子を指をくわえたそんな顔つきで力持ちの

女が見ていた。ペギーがへによへになつて眠つた頃、皆は子守唄に気を取られていて気が付かなかったが、フェルクルの姿が忽然と消えていた。青年が慌てて、挙動不審に視線をあちこちに巡らせながら、コアのことも構わずに思わず叫んだ。

「どこに行きやがった！ ちくしょう！」

泣き出しそうな咆哮は、広いばかりの動力室に何度も反響して、コアに吸い込まれるようにしてやがて霧散する。霧散の後に、返事が、乗組員たちの背後の方から響いてみせた。

「騒がしい。ここだよ」

フェルクルの格好良くすらある低い声。全員が一斉に振り返つた。全員が驚きの表情のままに振り返つたその背後には、フェルクルが佇んでいる。

その彼女の隣に、ポンと置かれているのはエレベーターに近い見た目の箱。来る時には無かつた、前後の状況から察するにおそらく船外へ脱出するための道具と思われる筒型の箱であつた。乗組員たちが目を凝らせば、何時の間にか、そのような筒型の箱が動力室のそこら中に出現していることがわかるはずだつたが、皆、はじめはそれが一つしか無いと思つた。余裕が無かつたからだ。

だが実際には三十八人を余裕で運び出すことが出来る程度にその筒型はあつた。一つの筒型に十人近く乗れると思われる広さがあり、それが八つほどは探せばあるのだから、時間も掛けずに全員がそれに乗れるのは間違いなかつた。問題は、それで本当に船外へ脱出できるかどうかだつたが、その点については皆考えることもしなかつたし、その暇も無い。フェルクルの指示に従い、数人ずつに別れてエレベーターのようなそれに乗りに込んでいく。その途中で、コアの深海のような青白い光が動力室から消えた。ケージから心臓形のコアは姿を消していた。パプテガがそのことを心配したが、フェルクルは、「大丈夫だ。コアは下降しただけだ」と答えたから、ということはこのエレベーターも閉じれば下降をするのかとパプテガは予想した。そして実際にその通りとなり、計四十人が乗りこんだ筒型

の箱は、開いていた部分を閉じ、一斉に、最深部動力室からの下降を開始してみせた。最深部の下に何かがあるのか、知っているのはフェルクルだけだったが、大体の全員がもう安心を感じ始めている。それはすなわち、皆がフェルクルという仲間の実力を信頼したということであり、その存在を仲間内として持つことが幸福であるということを実感したということでも、あった。

エレベーターから降りた四十人の前に待っていたのは、プロトノアより遙かに小さな船舶。

全員がそれに不安を感じる間も与えないスピードで、フェルクルはそれが凄まじい代物であることを、誇らしげに語ってみせる。

「コアをエネルギー供給のためにしか使っていなかったのがプロトノアだ。コアは補助的な役割をしていた程度だと言っても良い。だがこの船舶は、小さいのにプロトノアよりも遙かに優秀なスペックを持っている。何でかを説明する必要は無いな？ 私のhotarubi動力の研究で完成させた三つの作品の内の一つが、こいつだよ！ さあお前達、さっさと乗り込め。砂のベールなんて突き破つて、こいつは空に飛ぶことが出来るんだからな！ 蛍のようにほんわかと飛ぶわけじゃないぞ。鳥のように身軽に、そして岩のように力強くこいつは飛べる。喜べよ、もつとな！」

神に仕える僧侶であり、また腕の良い彫刻家でもある男性は、皆からフン神父と呼ばれ慕われている人だ。彼は一回り小型になった新天地を目指すための新たな船舶の、その座り心地の悪くなったシートに座り込み、砂丘に入る直前に彫った木の彫刻を両手で握り締めている。座席の尻に伝わる心地が硬めで、尻をひりひりさせてしまったたり、腰を痛めてしまったりする。

小型になった、四十人を搭載しているその船舶は、プロトノアと比べると、随分と生活のことを考慮していないように思われた。というのも、老女イネが庭園を作ったり、奇抜なオブジェを誰かが何時の間にか所々に置いていたりしたので、プロトノア内は華やかというか、生活感の溢れる船内であって心休まる場所だったし、また、様々なアイディアのおかげで便利な代物がたくさん作られ、それが利用されていた。だが、新しい船舶は、鉄が無機質に天井と床と壁に敷き詰められているだけで、実に質素極まりない。シートの座り心地も悪いし、自動販売機も無ければ、ソフトクリームを食べることも出来ない。

フン神父は甘いものが食べたい。いや、舐めたい。ソフトクリームを。バナラとチョコのミックス。『全自動殺菌機構を備えながらも卓上式でとつてもコンパクトでランニングコストも良い!』という見出しが脇に貼られていたソフトクリーザーはプロトノアの談話室に置かれていたが、新たな船舶内には当然、それが備えられていない。両手で持っている神を象る彫刻を舐めるわけにはいかないの、フン神父は目を瞑り、そしてソフトクリームの味わいを妄想するだけに留め、舌上で甘味を思い出せるように努力した。が、何故か酸っぱい、ミカヅキ　ロウに以前食べさせられた梅干しという食べ物酸味が舌上で踊ってしまうので、上手く行かなかった。フン神父は悲しんで、ため息を付きかける。

(これは試練なのだろうか…神よ……)

フン神父の近くで、実際にため息をついた者もいる。それは、フン神父と同じ宗教に入っているドン神父である。ドン神父は、フン神父が以前作った彫刻をお下がりとして貰ったのだが、その彫刻をフン神父と似たような感じで握り締めている。象の、あの長い鼻が七本も付いている動物の、彫刻。七本の鼻を持つ象は彼らにとつての神をかたどっている。

ドン神父は機械いじりが得意であり、ソフトクリーザーを作ったのもドン神父の仕事によるものだった。だからフン神父もドン神父も、宗教を広める人として船舶に乗り込んでいたというよりは、それぞれ、彫刻家の人、機械作りの人、という風に周囲には認識されている。

「ソフトクリームが食べたいとは思わないかな？」

フン神父は、独り言を呟いた。呻くような、疲れたような、そんな言い方をしていた。

隣のシートに座っているドン神父にそれは聞こえたが、ドン神父は何も返事をしなかったし、相づちさえ打たなかった。だがフン神父は目を瞑りながら、独り言を続ける。

「ミックス味が食べたい。チョコとバニラのミックス…」

相づちを打たなかったドン神父は、ため息を付いてから、隣のわずらわしい神父を静かにさせるために口を開くことにした。

「僕も食べたいですよー。でも、ソフトクリーザーを作った時の材料ももうないですからねー…。白砂の草原に辿り着ければ、きつと好きなだけ、甘い物も好きな物も食べれますよー」

「まだ辿り着けるかはわからないじゃないか。それに、甘い物が食べたいというよりも、ソフトクリームを食べたいという気持ちの方がダントツなわけだよ、ドン神父。またソフトクリーザー作ってくれよー。今の内に頼んでおくよー。もう、怖いなのよって…」

七本の象の彫刻を持つ手がぶるぶると小刻みに震えているのが、隣に座っているドン神父からは見えた。だが怯えている相手に向け

て慰めをかける気分にもならなかったのは、フン神父の言い分をうざったらしく感じたということもあるし、ドン神父だって不安をまだ拭えていないから、ということでもある。実際、シートの心地が悪いことは、実は船の質が悪いものなのではないかと疑う理由になるには十分であったから、不安を拭えない者は多い。

研究者のフェルクルは、皆のその不安をコアの苛立ちを通して察知した。青い球体を通すことでコアが何を感じているかということも、フェルクルにはわかるようだった。

「お前ら。シートの心地が悪いという程度で不安になるなど、貧弱だろうが！ 安心しろ。窓の外を見ればわかることだが、hotalubiの動力の力で、船舶はもう遙か、砂の上。そして雲の下だ。ほとんど震動も感じないでここまでの高度に上がれる船だぞ。これで安心を感じないんだったら、もうどうしようもないんじゃないか？」

もつともな話だった。右端と左端に幾つも取り付けられている小窓から景色が見えるが、それはもう蒼空だし、覗き込んで見下ろせば、砂海がある。プロトノアの姿はどの窓から見下ろしても窺えないのは、船舶が既に砂海に飲み込まれた証明だ。そういう風に飲み込まれていた状況から脱して蒼空に飛び出した船なのだから、たしかに力強いのだ。だが、否定的意見が皆無というわけではない。疑い深い性格の人間は、フェルクルという人間の実力を認めたと、それでも何か口出しをせずにはいられないらしい。

「勢い良く空に飛び出したってことが嫌なんだよ。勢い良く墜落することもあるじゃないか」

「そんなこと言い出したら、何でも嫌になるんじゃないか？」フェルクルの言い方には怒りが滲んでいるが、それでも怯む事なく言葉を続ける者はいらる。

「こういう時だ。不安材料は様々浮かび上がってくるんだ。白砂の草原を見つけるまでの食料。寝床。衣服。風呂。いくら高性能でも乗っている人間が生活出来ないのでは、どうしようもない。俺達は

あんたの力に身を任せるしかないんだから、シートの心地が悪いだけで不安を感じてしまうのも、仕方が無いじゃないか」

「勝手なことばかり言うんだな。気に食わん。こんな奴は船外に放り出してやらなきゃ、コアに悪影響を与えるな」

「なんだと……」

「邪魔だつて言ってるんだよ」

息が苦しくなるような、淀んだ熱が湧き出し、四十人たち全員がその不健康的な空気を鼻腔から吸うことになる。物音をたてることが控えられ、コアの空調のような稼働音だけが鳴り、ひそかに生唾が飲み込まれる。

まとめ役のパプテガが、申し訳程度の補助椅子から立ち上がった。

「争ってる場合か。内輪揉めなんてやってコアの調子を悪くしたりなどは、許されないぞ。落ち着いて、なるべく優しい心になるんだ。楽しいことを想像しろ。上手くいつている未来を想像するんだ。そうすれ……」

「パプテガさあん！」

「……なんだ!？」

パプテガは突然に言葉を遮られたことで動揺を隠すことが出来ず、首を挙動不審な感じで左右に動かしてしまった。だが遮ったその声があまりに慌てているというか、今にも泣き出しそうなほどに弱っているそれだったので、パプテガは自分が喋るのを中止して、その声の主を注視した。

声の主は、彼女のいない青年だった。彼は、考えもしないような出来事に直面した人のように、眼を開ききっていた。そして事実、彼は左端の小窓から、あり得はしないような光景を目の当たりにしていたのだ。青年の視線につられた面々が左端の小窓に気を向ける。「イヤアアアアア！」すると、痛々しい叫びがそこから中から上がった。禍々しい、滅亡、終末を予感させるような空気がすぐさまに蔓延したのだ。あまりに壮絶的で、絶望的でもあるその反応を見た

パプテガは只事でない事態を察し、少し恐ろしさも感じはしたが、一息を付く。それから左端の小窓へと近づき、意識と、透明な輝きをたくさん秘めている両眼を、そこに向けたのだ。そして輝いている瞳を、鬱屈とした灰色に淀ませたのだ。

「……………ぬぁ…」思わず漏れたパプテガの呻きには、滑稽味が含まれてしまっている。そういう風を感じざるを得ない光景が、窓の先の遠景に、白く霞む巨大な山のように、或いは、遙か高みを目指していく塔のように、在った。ただそれは山でも無ければ塔でも無く、遠い距離からでも蠢いていることがわかる、あまりにも巨大な蟲、だった。

「あんなのが…」

「迫ってくるわ！ 向こうから這うようにして、こっちに近づいてくるわ！」

「見間違いだ！」

「いや…」

四十人を乗せている小型船舶は空を飛んでいるのだから、這っている蟲に近づかれた所で、噛まれることも船体の表面をぬめつと這われることもないはずかと言えば、そうでもない。十分に蟲は危険であり、何故かと言えば、そのあまりに規格外な巨大さが問題。

「大きな口が付いてるよ！ あんな蛆虫みたいな見た目をした這いずる蟲が、真つ黒な、真つ黒な、真つ黒な大きなお口を開いているよお！ あんな汚らしい蛆に飲み込まれてお腹で溶かされちゃうだなんて、なんて甲斐の無い人生だったのかしら！」

ペギーは相変わらずの気狂いであるがヘンヴァーレに歌ってもらうわけにもいかない。というのは、普段冷静な彼ですらも絶句し、歌を歌う余裕をなくしてしまう程の恐怖が、船のいたるところにヘドロとなつてこびりついてしまったからだ。それぞれの人間が、足を元へドロで固められ、そして浮き上がってくる汚泥の匂いで、顔をしかめさせられているかのようだった。

それほどに、船の左舷側に突如現れた蟲は凄まじい。幼虫のよう

な、或いは蛆虫のような、そういうものが船ごと全員を呑み込もうとしているらしく、吸い込まれそうな程に漆黒である大口を開けて這い迫ってくるのだから、信じられないことで、悪夢のようでもあった。しかしそれは、誰もが醒める気配の一向にない、悪夢だとしても思いたくないほどに最低最悪な、しかし間違いなく現実だった。

…ぐちゃあ…ぐちゃあ…。

蟲は自らで分泌する粘液のその上を這いずっているのだろうか、船内にも響いてくるようになったその音は、何処と無く陰湿で、何処と無く腐乱していて、何処と無く生理的に拒否したくなる。

先程まで追い詰められていた人間ばかりの船内で、その音は鮮烈に耳へと入り込む。

「あぎゃあああああああー！」

気狂いのペギーは狂走する。右足を出したかと思えばもう一度右足を出し、左足は出したかと思えば一瞬しか出さない様はスキップかと思いきや、それよりも遙かに早いスピードでびゅんびゅん、右足二回左足一回のテンポを繰り返す。しかも顔面が石像のように硬直したままでその動きというわけだ。元々痩せているペギーは青鬼のような悪顔をしているが、青鬼のお面をつけている人のように表情が変わらないから、ペギーの不気味さは普段より一層増している。子供が見ればトラウマとなってこびり付くような動きのままに、彼女は室内を三周ほど回ってから、自分の席に戻ってきてそこに頭突きを開始した。今度の頭突きは、先程よりも激しくしているのだから、止めなければ彼女が死んでしまうと思われた。

「落ち着きなさいペギー！」

面倒見の良い女性マルーダが果敢にもペギーのことを抑えこもうと近づいたのは、他者のことに気を配ることで己のストレスを軽減しようとする狙いもあったかもしれない。が、気狂いの女が暴れている時に近づくのは迂闊だった。

「ペギー！ ペギー！ ペギー！ なんとるっ……ぐえええええ！」

マルーダはシートの代わりとして扱われるかのように、ペギーに

何度も頭突きをされた。彼女は白眼を剥きながら、心地良さそうな顔にゆったりと変わっていくと、最後には天使に口付けをされたように穏やかな表情となって床に倒れた。その緩やかぶりには、あまりにも表情筋が弛緩しているので、長い時間見つめていると逆に違和感を感じるほどのもの。

マルーダを傷つけた張本人であるペギーが、その違和感のあるゆるりと垂れた顔を見つめていたが、黒目に穴が開くのではないかと思われるほどにそれを見つめた後に、何かそこに発狂の要因を見出したようだった。自分で頭突きをした癖に。

「死ぬ！ 仲良くみんなここで死ぬ！ 絶望的な崩壊！ 私たちの明日はどこへ消えていく！ 涙がこぼれ落ちて願いが叶わない！ 求めていた理想郷は見つからない！ 退廃に塗れて、廃墟の中で朽ち果て、腐り、終わってしまおう、終末が訪れてしまおう！ いやだ、いやだ、宇宙に行きたい！ 希望が欲しい生き方が欲しい未来が欲しい！ 私、白砂の草原、白砂の草原をを！」

発狂している彼女はまた騒がしい。騒がしいばかりだ。恐怖を煽るだけのペギーを止めるには、力尽くで黙らせるか、巧みな言葉で慰めるかのどちらかの方法を取るしか無い。ヘンヴァーレは歌える状態でも無いのだから。だが、実際的には、彼女の気狂いを抑える時間も少なく、いまこの瞬間にも左舷側から蟲は這いつくばって近づいてきているということを考えれば、方法は力尽くが手っ取り早い。勿論、室内で彼女を殴って気絶などさせてしまえば、皆がそれを見て小気味良く思うのと同時に、仲間がどんどん倒れていくことは、滅亡の未来を脳裏に過ぎらせる理由としては十分な代物とも言えるのだから、殴ることはもしかすると迂闊な行為かもしれないとも言える。

だが、うだうだ悩んでも時間は過ぎるばかりだ。『もしも』に怯えて行動を控えて何も出来ないのではダメだった。特に、今の状況では、瞬間的な判断能力、つまり思い付き思い付きを繰り返す他ないと思われた。

パプテガは苦虫を噛み潰すような気持ちの中で、

(こんな展開。…あまりにも想像の域を超えているじゃないか。終わりにたくはないが…)

と嘆いた。嘆きながら、数人の男たちに目配せをして、ペギーを拘束して皆の目に付かないところに連れて行き、そして迅速に彼女を静かにした。静かにしたといっても、力を抑えた技ありのチョップで彼女の気を失わせただけのことなのだから、重傷を負わせたわけではない。

ペギーが連れて行かれて静かにされたことで、残りの人間たちは騒ぐことを、自然と控えるようになっていた。それは圧力のある空気に押し潰されるような沈黙であったから、まったく持つて悪い方向に事態は進んでいる。

事実、その一悶着の間にも蟲は這いずり続けていたわけだから、船のすぐ近くに蟲はすでに到着している。大きな口の周りには、唇に似ているひだが付いていて、透明なゼラチンのような色彩と動きをしている。ひだの内側に行くにつれて透明から、苔のような緑に変わっているが、口の中から発されている緑色の吐息らしきものが、蟲の唇を汚くしているようであった。そして、その苔のような緑が、船の窓ガラス部分にこびり付きはじめた。蟲の吐息が、船体に当たり出したということだ。

ケージに納められているコアが青の色だったというのに、蟲の腐臭を船体で受けることで不安を感じたということだろうか、一気に赤色になった。それとほぼ同時に、驚くべきことだが、船の天井、壁、床に、弾けるように一瞬で、文字が浮かんだ。それは船の動力であるコアの、意志を表している文字そのものだと、誰からでも理解できた。

『EMERGENCY』 『HELP!』 『EMERGENCY』
『EMERGENCY』 『EMERGENCY』 『HELP!』 『E
MERGENCY』 『EMERGENCY』 『EMERGENCY』
『HELP!』 『EMERGENCY』 『EMERGENCY』 『

HELP!」 『EMERGENCY』 『EMERGENCY』 『EMERGENCY』 『EMERGENCY』

さらに、文字がそこかしこから浮かぶのに合わせて、けたたましい程の警報が鳴り出した。警報と言っても、それは様々な動物の威嚇する時の声なのだが、犬、猫、猿、象、虎、様々な鳴き声が室内で反射してまわってみせる。人間が怒鳴る時の声さえも混じっていたが、コアがその自らの意志で、何かしらの機能でそれを発していた。コアの蟲に対する抵抗だと見えたが、それは船内に不安をさらに募らせるには十分となる。

すでに失神している者は出ていた。

たとえば、先程倒れてから、眼球にて物を見る世界から外れ、意識が曖昧な夢の世界で漂うことになった老人イネは、自らの深層意識を垣間見ているということなのだろうか、若いころの己の姿をそこに眺める。まるで別人のように、皺もなく、肌にはニキビがあるが、水ツ気のある艶やかさが頬で潤っている。

夢の中でのイネは森林を走っている。森林といっても、癒しの効果があると思える爽やかな空間ということでもなく、葉のあいだを抜けて日射が降りそそいでくる場所ということでもない。薄暗くて湿気の強い、見通しの悪い暗闇の森だ。イネの過去にはそんな場所を走っていた記憶はないが彼女はこの場所を良く知っているような気分がした。それは違和感へと変わり、つまようじで取り払いたくなる程度のむずむずとして存ずる。だが、立ち止まって奥歯に一差し指を突っ込むわけにもいかないし、それに彼女は今気が付いたが、何かに背後から迫られていた。何かが後ろから、自分のことを捕らえようとしている、あるいは、殺そうとしていると気が付く。彼女は焦りを隠すことも出来ず、心臓が高鳴って全身に響くことを防ぐことも出来ない。逃げるしかない。

だがその逃走を邪魔するかのようにして、突如、薄暗い森林のそこかしこに幽霊のような火の玉が浮かび上がった。そしてそれが木々の葉や、土に生える草などに纏いつき、火炎となったのだ。イネ

の顔が明るく照らされ、若々しい潤いのある皮膚は、熱さのせいでも赤く腫れ上がる。自分の皮膚がただれて溶けてしまうのではないか。その最悪な想像に気を取られたイネは、足元に木の根っこが這っていることに気が付くことが出来ず、それにつまずいて転んでしまった。

(追いつかれる)

急いで起き上がるうとするけれど、焦りのせいだろうか身体が上手く動いてくれない。足が重たくて、頭がからっぽになったみたい。に軽いという奇妙な錯誤。背後から迫ってくるものに対する切迫。燃えていく森林。熱い全身。

その背後から迫ってくる者は、金具と金具が擦れ合うような音を生じさせている。ジャラ、ジャラと、走っているせいだろうか騒がしく。イネは、その音が近づくにつれて自分の死期が近づいているのだと知るから、本格的に怯える。

ジャラ…ジャラ……

もうイネが逃げられないことを知ったということだろう。背後から迫る者は、イネをじわじわと追い詰めるためであろう、ゆったりとした歩調に変わったと窺えた。

ジャラ…ジャラ……

音がすぐ間近に聞こえている。真後ろだ。真後ろに、追跡者が立っていることが気配でイネに伝わる。もう全身は張り裂けそうなほどに緊張している。頭だけがやけに冷えていて、冷えすぎているせいで碌に回転しない。死ぬ。死ぬ。殺される。殺される。そんな単語だけが踊る。

ぬあああああ

背後で立っている者は、そのように叫んだが、野獣のようであったから、イネはさらに怯える。そして怯えている最中に、右腕から引つ張り上げられてしまって、見たくもないその追跡者の顔を、見せられてしまった。目を瞑っていれば見ることも無かったが、凄まじい力で引つ張り上げられたので、眼を瞑ってはいらなかったの

だ。追跡者のその顔を見てしまい、イネは心底より驚く。

(か、可愛い……………！)

パンダの顔が、そこにあった。とっっても可愛らしい、パンダだった。

そこで夢は、終わった。

もしかして助かるんじゃないですか。

『そういえば昔、パンダに似ているって言われたことがあったわ』
イネは顔を見たことで、そんなことを思い出した。その瞬間に、
森林を彷徨う夢は終わりを告げ、夢の世界から引きずり上がった彼
女の意識は、悪夢のような現実へと帰還した。

現実に戻った後に、変態医者フルーチエの、のっぺりとした顔
を間近で見ることになったのは辛かった。だがそれは些細な辛さで
あると気が付く。彼女は蟲の大きな姿をはじめて垣間見、絶叫し、
再び失神しそうになる。大きな口が、緑色の生臭い吐息が、船体に
纏いつき、捕えようとしている、絶望の瞬間に彼女は目覚めたのだ。
だが不思議なことがある。それは、死の寸前だというのに、他の
仲間達らの顔つきが沈んでないということだ。むしろ、窓の外に広
がっている何かに対して、驚いているといった様子の顔つきであり、
特にフェルクルに至っては、底から湧きあがってくるような喜びを
表情として浮かべているのが目立っていた。イネは疑問を感じ、左
側の窓をまじまじと見やった。蟲の姿はおぞましかったが、皆の感
じている驚きの原因を、知りたく思ったからである。彼女はフルー
チエの静止を振り切って、床から立ち上がってみせ、窓の方へと眼
を凝らした。彼女自身の、パンダのようなぷりぷりとした身体の、
その中でも特にぷりぷりしている尻をぷりぷりさせながら。

「イネさん。あそこ。あれ。見えてる？」

力持ちの女が、隣から指を突き出してくれたので、その方角に注
視すれば皆の感じている驚きの正体を眺めることが出来ると知った
イネは、力持ちの女の太めの指が示している先に、意識を集中した。
そして、見つけた。

「蛍の、光…？」

動力室最深部に踏み込んだ時に血管で蛍光していた、あの緑の輝
き。hotalubiのコアの緑の光。それが蟲の、真っ黒な大口

の暗闇の中で、今にも呑み込まれそうだというのに、消えることなく、力強く光を発し続けていた。そしてその丸い形で輝く光の中、いや、中心には、何か、があった。その何かの正体を、光の中心にある物を、イネは知りたいと思ったが、眼を細めてみても、窓になるべく顔を近づけてみても、緑の光の中心にある何かの、正体を暴くことは出来なかった。

その正体を若くて視力もある人間に聞いてみようかとイネが思った時に、船内に、高笑いが生じた。高揚しすぎている、狂ったような大きな笑い。フェルクルだ。

「ハハハハハハ！ アハハハハハハハハ！」

周りにいた数人が、彼女の側からバレないように数歩下がった。が、興奮が過ぎるフェルクルは、自分の世界に入っているせいで、周囲の人間から引かれていることに気が付かない。彼女にとって緑の光があることが喜びの理由となっていて、窓の外にある緑の光は彼女の製作物ということだと皆が知る。

全員が息を飲んで、その光の動向を窺う。少なくとも、光のおかげで蟲は船舶を食べることが出来ないようだったから、乗組員の命の、最後の皆が、蟲のような色遣いの力強い光であった。

光が消えた時がすなわち全員の死。

『蟲の寿命は短い』。

そんなことを思う人間は少なからずいたが、実際にそれを口にするものは、当然いなかった。

ふと、誰かが呟く。それは眼の良い人物だったから、緑の輝きの中心にある物が何であるかを、判別したのだ。誰かは、『信じられない』という思いに包まれながら、呟いた。

「人間じゃないか…あの光の中にいるのは！」

動揺が走る。

「まさか」「人間があんな光を」「あんな巨大な、船よりもでかい蟲を」

大体の者は緑の光の中心にあるモノを判別できないが、その誰か

の意見を信じようとした。というのは、先程フェルクルと一緒にいた少年が見当たらないことから、もしかするとあの整った顔立ちの少年が緑の光の中心にいるのかもしれないと見当をつけることが可能だったからだ。

だが、先程まで高笑いを延々と続けていたフェルクルは、ふとそれを止めると、その誰かに向っていたはずらっぽく舌を出した。そして、機嫌の良さそうな調子で喋る。

「的外れの答えでもないけど、それでは残念賞なんだ。ハハハハハ！ 馬鹿め！」

興奮しているからといって無礼な言い方が許されるわけではないので、その言葉を聞いた誰かにはムカつく心が芽生えたが、いちいちそれに目くじらを立てるのも面倒だった。

「クイズをやってるつもりは無い。賞はいらないから、もったいぶるなよ」

その誰かは、みんなに同意を促すためであろうか周囲に目配せのようなことをする。目配せをされた者たちは、その誰か同様、答えを知りたいので、首を上下に振った。フェルクルは薄ら笑いを浮かべてから、

「大きな、機械さ」

と、両肩をすくめながら、もったいぶった言い方をした。

口を半開きのまま突っ立っていたドン神父が、『機械』の部分に反応したらしく、

「ほーお」

と感嘆するような呻きを上げた。その感嘆がやけに室内に響いた。そのおかげで皆は一つのこと気が付いた。緑の光に注目するばかりで気にされていなかったのだが、何時の間にか、コアから発されていた様々な動物の警報の音が止んでいたのだ。

『EMERGENCY』『HELP』という文字が壁や床や天井に並ぶことも止まっている。

コアが落ち着きを持ちはじめているのだ。

彼女のいない青年が、呆然と辺りを見渡してから、声を上げた。
「……もしかして、助かるんじゃないですか？」

人間もどき―

レフィは作られた少年だ。今はもう砂の海に埋もれた船舶プロトノアの中で創り出され、この世に生み落とされた。フェルクルの長いhotalubi動力研究によって出来た三つの作品のうちの一つがその少年で、大きな試験管の中で魚のような形をして誕生した。

レフィは生み落とされたばかりの、眼も開けてないような胎児の時分から、彼を作った主にこう忠告をされている。彼は小さな魚のような見た目をしている時にでも、言葉を理解することが出来た。

「お前は破壊と暴力を用いて生きていく他ないように設定されているから、まともになろうと思っても無駄だぞ。お前は、この機械の部品として作られたわけだから、人の形をしたパーツに過ぎないんだ。分をわかまえて、成長しろよ」

彼の成長は早い。いや、それを成長と言うのも怪しい程に、数日で身体が大きくなっていく。髪の毛が生え、身長が伸び、体重も増える。顔つきも毎日のように変化し、筋肉も子供にしては引き締まっっていく。

ろくに食べ物を摂取するわけでも、激しい運動を行うわけでも無いのにそのように成長していくことは、少年レフィ自身も人間にはあり得ないことだと知っていたから、己が機械の一部分である異常な存在だという主の言葉を、自然と信じるようになった。後は自分がパーツに過ぎないという事実を受け入れることが出来るかどうかだったが、その点に関してはほとんど葛藤を起さなかった。というのは、レフィは自我を持たされているが、パーツにしか過ぎないという空しさに葛藤を起すことのないように、主であるフェルクルによって事前に設定されていたのだ。人の形をしているだけの部品だと言われれば、人間ならば屈辱に思うが、レフィはそこに何らの感情も感じないわけである。当然のことだとわかっているからだ。だからそのことに関しては、彼にとっての問題では無い。

レフィにとつての問題は生まれて数日立つてから、はじめて試験管の外に出てプロトノアの床を歩いた時に起きた。

「これを着ておけ。裸じゃみつともないだろう」

主であるフェルクルから差し出された下着、Ｔシャツ、パンツ。それを身に纏つて生きるのが人間の常識ということはレフィにもわかるから、着ようとする。自分の股間についている小さな性器もどきが、ぶらんぶらんと歩く度にわずかに揺れるのも眼にわずらわしかったので、丁度良いと気分が良くなった。だが、下着、パンツと履いているその途中に、何か不愉快な、意識の深層から湧き上がってくるような苛立ちが生じた。何が原因なのかレフィはわからなくて混乱する。だからＴシャツを着るのにしばしためらい、両手でＴシャツの裾を掴んだまま、彼は苛立ちを抑え込もうとした。だが、意識の深層から湧き上がってくるその苛立ちは、どんどん心を占める割合を増やしていき、頭のとっぺんまで湧き上がつてみせた。そして、彼の苛立ちは脳の中で留まることをせずに漏れてしまい、彼はほとんど衝動で掴んでいたＴシャツを引き裂いた。びり、びり、と呆気なく服は破れた。しかしレフィに突然巢食い出した苛立ちは、納まるどころか、せつかく履いた下着やパンツを破り去つてみせる理由にもなつた。彼は整っている顔立ちを歪ませ、瞳に血を走らせ、全裸のままその場でうずくまつた。何かに怯えるように、或いは、何かを堪えるようにして、レフィは低く響く唸り声を上げながら、しばらくそのまま動かなくなつた。

フェルクルは彼の様子を窺うために近づく。服を豪快に破り去つてみせたばかりの危険な相手に対してだというのに、警戒する様子を一切作らずに歩み寄る。ヒールの踵の音を、カツ、カツ、と鳴らして。

「だいじょうぶか？ 調子が悪いんだつたら言えよ？」

彼女がそれを言い終えたと同時に、鋭い、初めて殺意を芽生えさせた獣のような視線がレフィから発された。フェルクルは驚きの表情に変わり、数歩距離を置こうとしたが、まるで遅かった。飛び出

してきたレフィに咽喉仏を爪で引っ搔かれて、声を出す能力を奪われた。

「……………」

信じられないと言った表情で自らのことを見下ろしている主を、レフィはもつと壊したく願った。両手も、両足も、首も、引き裂いて、ぐちゃぐちゃにしてやりたいと欲求が止まらない。レフィのその感情はブレーキを利かされることもなく続き、長く尖っている十本の爪で彼は殺戮を行った。

最深部動力室では、しばらくの間、生々しい血肉の裂かれる音が響いていたが、数分も経てば静かになり物音一つ鳴らなくなった。返り血を散々に浴びて赤と白の斑模様になった少年レフィは、うずくまった姿勢のまま血溜まりに身を預けていて、そして彼の表情はとても険しい。歯を食いしばり、拳を握り、身体をふるふると震わせる。やがて、恐ろしいことをしてしまつたと恐怖の念に襲われ、混乱してしまい考えが錯乱していく。そんな彼の頭上から、フェルクルの声が聞こえた。

「なんともひどい有様にしてくれたものだ。しかし、実験としては成功だ」

「！」

ガチャン、と重たい音が鳴つた後に、室内を明るく照らしていた照明が電源を落とされたらしく、レフィの周囲は目を凝らさねば見えない暗闇と化した。「ひっ」怯えた心に暗闇は毒となる。彼は周囲の様子がわからない不安に駆られるままに頭を抱えるが、背後から何かに見られているような気分だとか、何者かに押し潰されるような圧迫感だとかで、落ち着くことが出来ない。

フェルクルは暗視スコープを使いながらレフィの様子を上から観察するが、レフィがあまりにも感情の起伏が激しいのをスコープ越しに確認して、密かにガッツポーズをした。彼女の計算どおりに事が進んでいるからだ。

（わざわざ私と同じ見た目をした人形を作っておいたのは正解だっ

たな。あとはコアが青の光を発してくれるかどうかだが……。ここが一番のネックだ)

彼女は手に握っている青の球体。翻訳機に唇を近づけて、柔らかい声でそれに話しかける。

「心の臓。ゆっくりと、上にあがって。上がった先にいる少年は、お前の味方だから、安心して」

最深部動力室は電源が落とされたせいで暗闇だったが、フェルクルが翻訳機に話しかけてから数秒後に、空調の、風が吹くような音が行き交い出した。拳動不審だったレフィはその音に気が付くと一瞬身体を固めたが、その空調の風音にもパニックの要因を見つけ出したらしく、そわそわと床を行ったり来たり歩くようになる。尖っている自らの爪を噛みながら…。

彼が十本全ての、手の爪を噛んで噛み尽くした頃に、彼の眼球や彼の皮膚に色合いが付けられた。黒に包まれていた彼の肉体が、青に染められたのだ。レフィは自らを青に染めている物が突如として動力室最深部に現れたことに、警戒した。その何か、丸いような、それでいてデコボコにも見えるような、ドク、ドク、と鼓動しているもの。レフィはそれが何かを知っていた。

彼は自然と胸に手を当てて、自分の心臓が鼓動をしているかを確かめる。ドク、ドク、彼の視界の先にある青の心臓と同じ間隔で音が鳴っている。生きている証。全身に血液を拍出するポンプの役割を果たす内臓。

自らが入れられていたよりも更に大きな試験管。ケージ。その中で巨大な心臓が、深海の青で室内中を照らしている。レフィ自身も照らされている。そして彼は、その深海の青が自らの心を休ませしてくれる存在であると感知して、足が動く。足が、コアの納められているケージへと向っていく。物欲しそうな、弛緩した顔つきで。

(…成功だな。コアの方にも拒否反応は出ていない。どうやら…) 研究者フェルクルの気持ちは昂ぶり、高笑いをしたい気分でもあったが、変に大声をあげてコアを怯えさせてしまうことになればつ

まらないので抑える。頭に突き刺しているまち針をぐにぐにといじくりながら、時間をやり過ぎすことにした。

そしてレファイが青い光を発するコアのふもとで、穏やかな表情で眠りこけた頃になって、フェルクルは下へと降りてレファイの元に近づくと、彼を叩き起こした。先程八つ裂きにしたはずの人間が何てことは無く目の前で立っていることに彼は驚愕を隠せなかったが、何か仕返しをされるのではないかという心理から再び血走った眼に変わった。だが、フェルクルは彼に自らを襲わせないようにする言葉を持つているから、慌てることもない。

「私を殺したら、このコアも爆発して消え失せるようになっていぞ？ それでもいいのなら、私を八つ裂きにしてくれていい。だが、出来ないだろう？ そのコアの深海の青に魅せられたお前は、もはやそれに依存している。言ってることが、わかるな？」

しばらく戸惑いを隠せない様子で眼を右往左往させていたレファイだったが、やがて何かを悟ったのだろう。従順な犬のように、潮らしい顔つきになってみせたので、フェルクルは心の中で相手を征服することを達成できたことに酔った。

（私はとてつもなく天才だ……。まどろっこしいやり方だったが、これでレファイは暴力衝動を私の命令に従ってでしか発揮できないだろうし、それが破られそうになったらコアで脅せばいい。極度の不安に陥っている状況の人物に、極度の癒しを持った存在を掲示してやれば、その人物はもうその癒しから脱することが出来なくなる。依存せざるを得なくなる。これがクリアできたのだから、後はもう簡単だな。機械のパーツらしく、こいつを私の思惑の内側で利用出来る。完全に支配下だ）

レファイに対して、生まれる前のプログラミングの時に『機械のパーツとして生きることには不満を持たない』と書き込んでおいたが、人間としての知能を持って自律して物事を考えることの出来る相手に対してそれだけの処置では足りないとフェルクルはわかっていた。もっと彼の生理的な部分に刻み込むような書き込み方をしなければ、

レフィに自らを機械の一部分だと納得させないとフェルクルは疑っていた。そこで対価条件という奴でレフィを縛りつけようと思いついたというわけだ。

レフィをコアの深海の青に依存させる。コアをいじれるのはフェルクルだけ。だからレフィはフェルクルに従う他なくなる。フェルクルはこれによってレフィを機械のパーツとして自由自在に使用できる。

「じゃ、早速私の命令に従ってもらおうか。お前には機械にhot a l u b i 動力を与えるための、橋渡し役になってもらうから」

レフィにはよく意味がわからなかった。

「どういうこと？」

フェルクルはいろいろと計器らしきものをいじくりながらも、声に伝えて、長々と説明してみせた。

「んー。コアはhot a l u b i 動力のエネルギーを生成するマザーだ。エネルギーを作り出す源ということだ。だが、コアは見ての通り大きいだろう？ それに一つしかない。だから、他の様々な機械にhot a l u b i 動力を供給するには、パイプが無ければいけないのさ。そしてそのパイプに、人間の形をしているお前を使う。

お前にはhot a l u b i 動力を溜め込むことの出来る特別な心臓があるから、そこにエネルギーを貯蔵できるというわけだ。お前は人間の形をしているが、実質は、hot a l u b i 動力の出し入れが可能な、動く貯蔵庫だ。何となくイメージが掴めてきただろう？ お前は情緒不安定だが、しかし知能は高めに設定してあるから、今言った言葉は簡単に理解できるよな？」

レフィはしばらく反応をしなかったが、小さいながらも、こくりと頷いた。

フェルクルは薄く笑う。

「実践してみれば実感が湧くだろう。もうお前は十分にエネルギーを照射されているから、機械の所に連れて行ってやろう」

「でも、やり方とか、わからない」

「簡単だ。エネルギーを発散するというイメージをするだけでいい。……あまり、不安がるな。コアが緑に変わってしまったっているじゃないか」

レフィは緑に輝くようになったコアを見て、あまり良い気持ちではなかった。深海の青の方が心が落ち着く。

「青の方が、いい」

率直に気持ちを言葉で表したレフィに対して、随分としおらしくなったものだ。フェルクルは苦笑した。彼女は小さな彼の頭にポンと手を置いて、あまり優しくは無い言葉を掛けた。

「なるべく青か緑だ。赤にしてしまうようだったら……お前の将来は、スクラップだよ」

ひどい言い分にレフィの内奥は傷付き、その傷をより深くしないために冷たい言葉を放ってきた相手に鋭い目付きを送った。そうすると相手を殺してバラバラにしたいという衝動が湧き上がり、鋭い爪のある両手に力が籠った。だが、先程のように実行には移せなかった。身体が奮えるが、バラバラにしてやろうと血眼で睨みつけるほど、その相手の胸に、見えるはずの無い部分、心臓がうつすらと見えて、そのせいでコアのことが思い出されてしまう。自然とそれが抑制となつて、相手に爪を立てるに至ることが出来ない。レフィは、血眼で睨みつけるまでしか抵抗が出来なくなっている自分がいることに気が付き、呆然とした気持ちになる。

フェルクルはそんな彼を嘲笑った。

「せいぜい、役に立ってみせる」

レフィはおとなしく頷いた。というより、頷く他なかった。

従う部品となった少年と従わせた研究者は、最深部動力室のさらに下にある室内へと筒型の箱を使って降りた。筒型の箱が開くとほぼ同時に、少年はそこで船を見る。

「これは何」

「何だと思っ？」

「船」

「正解。でも、お前は船の部品になるわけじゃない」

船を通り過ぎて、暗がりの方へと進んでいく。少年の想像しているよりもずつと縦に広く、果てしなく続いていく闇に向って歩を進めているような錯覚を覚える程の長さではあった。吸い込まれていくような、闇と一体化していくような。少年は、前後左右の間隔が奪われるほどに長い暗闇を、ヒールの踵の音を頼りにして歩く。

疲れる程に歩いた時になって、暗闇の向こう側がぼんやりと明かりを発しはじめた。そして、その薄い明かりによってわずかに浮かび上がっている影が一つあった。レフィは遠目からそれが機械だと理解できたから、自分はあるのパーツになるのか、と、まだハツキリと浮かび上がってこないその正体が早く全貌を現さないかと、落ち着かない。

「そわそわ」

「そわそわするな！」

叱責されてムカつときたレフィだったがムカツとするだけで留める。その内に機械の立っているその目の前まで、辿り着いた。明かりは本当にほのかなものだから、見上げても機械の全貌がわからない。だが、それには『足』があることはわかった。人間と似た形の機械なのかもしれないと、見当をつけることは出来た。

「…これは」

何かしらをフェルクルに尋ねようとしたが、何時の間にか彼女はレフィの隣から消えていた。

慌てて周囲を見渡したレフィだったが、見当たらない。仕方がないので、聞きたかったことも頭の中で留めて、彼は暗闇に目を凝らすことで機械の正体を暴こうと躍起になることに熱中した。

その途中で、明かりが眩しくなった。バチン、と重たい音が鳴った後に、照明が幾箇所から起動して途端に眩しくなったのだ。レフィは暗闇に馴らしていた目がやられないように薄目にせざるを得なくなった。が、おかげで機械の正体が見えるようになった。薄目越しに、少年は驚く。

「ファアの付いてるコートを着込んでる……って…そんなものが…」

二十メートルはあるだろうか。そんなにも巨大な、人間では考えられない大きさを持つている代物は、若草色のファー付きコートを着込んでいて、下半身にも黒のカーゴパンツらしきものを履いていた。靴も履いていて、白のブーツだった。人間のするような服装をしている、二十メートル程度の大きさの機械が、レフィの眼前で聳え立っていたのだ。手にも、茶色の革の手袋を付けているし、頭部もファー付きのフードを被っているから、およそ機械らしい部分は顔だけだった。顔だけはやけに機械的で、鉄か何かに見えるもので構成されていて、目の部分はスコープだろうか、双眼鏡のように突出しているが、レフィから見て右側が赤、左側が青、という風にスコープは右と左で色が違っている。他にも、長い、狙撃銃かと思える程度の長さの銃を背中に一丁背負っていて、腰の部分には短めのナイフらしきものを、右と左にそれぞれ三本ずつ備え付けていたりもした。

「人の形をした、機械……」

胸奥で躍動が走った。ど、ど、ど、と血液が全身に走り回る感覚が踊り、右手の彼の指先がわなわなと疼いた。彼は初めて見るはずのその機械を、知っているような気がした。気のせいかもしれないが、そういう風にプログラミングされているのかもしれないと自分でその概知感に対してそう見当をつけた。自分はこの機械のパーツなのだから、嵌る場所に対して良い気持ちを感じるのは当然のことかもしれない、と。

しばらく二十メートルもある機械を見上げていたレフィは、その機械のことを見れば見る程に、その機械についての情報が頭の中に入り込んでくるのに気が付いた。なだれ込むように、情報が頭の中に組み入ってくるのだ。

全ての情報がレフィの脳味噌に収まった時、彼は素直に感動した。そしてこの目の前にある作品を一人で製作してみせたフェルクルと

いう研究者の才能の凄まじさに、圧巻もされた。

どこかから姿を現したフェルクルが興奮しながら言う。

「少年の心が奮えるだろう？ こいつとお前が合わされば、船よりも傑作だ。これから先、砂丘に入った時に現れるだろう怪物なぞ、楽勝に引き裂ける。それまでに、手足のように扱うための練習をしておけ。シュミレーターがこつちにある。……操縦についての知識が頭に入っている、身体がある程度覚えなくては、どうしようもないからな」

レフィはわなわなとしていた右手をぎゅっと拳にしてから、力強く頷いた。

もうフェルクルに対する殺戮衝動は湧かなかった。

自分にとって好ましい代物を与えてくれた相手に対して従順になる。レフィはそういう性質を持った人間もどきだったからである。

全員八つ裂きにしてやる！

プロトノアが砂丘に勇猛果敢に突撃してむなしいことに沈没に至ったその時まで、レファイ少年は与えられた人型機械のコートマシン。その人が乗り込む所、鳩尾にあたる部分にあるコックピットで、毎日、毎日を、何をすることもなく過ごした。時折そのコックピット内から降りる時があるが、それはコアの深海の青の光を浴びるために降りるか、シュミレーターで実際に怪物と戦う時の模擬練習をするために降りるかのどちらかで、それ以外はコートマシンのふところでも過ごしたのだ。彼は飯を食べる必要が無いし、風呂に入る必要もなかった。人間もどきだからである。

彼はコックピット内で、これから先の未来のことを、今持っている知識を活用して想像した。

レファイは、知識としては世界のことを知っていた。フェルクル以外にも人間という奴は億単位でこの星で生きているということ、しかし異常災害という地球規模の異変によって大勢の人間の命が消えたこと、人間が生活していくための数々の空間が二次災害によって汚染されたので新天地を目指す必要が出て来たこと、そしてその新天地を見つける役割をプロトノアという船舶が担っているが世界ではあまり期待されていないこと、新天地は『白砂の草原』と呼ばれていて大昔の伝説だと言われていたが地学者のベスによってそれが実際にある空間だと判明したこと、そしてその『白砂の草原』は世界一広い砂丘の中の何処かに隠されているということ。

なぜ隠されなければならなかったのか、それとも隠されているわけではなくただ見つかって来なかっただけなのか、それはわからない。そこに先住民が住んでいるのかもわかりはしない。ただ伝説によれば、人という種が未曾有の危機に陥った時にそこへと訪れれば、新たな希望の光が射し込まれるとのことだ。

フェルクルがプロトノアの一員であるということは、連なって、

レフィもプロトノアの一員になるといふことなのだが、プロトノアの一員であるからには、何かしらの役割を担っていなければならぬ。

そしてレフィの役割は、人も船も喰らう恐ろしい怪物を、コートマシンとコアの光、その二つの力を借りて撃退すること、或いは、抹殺すること。

いや、それは違うか、とレフィは思い直す。

（僕が力を借りるわけじゃない。僕は力を貸す側だ。コートマシンの部品でしかないんだし）

そうやって彼は様々なことを考えているが、次第に退屈に襲われてイライラが募ってくる。そのせいで床や壁を壊そうしてしまうが、その感情を抑えこもうとする度に、彼は深海の青の元へと走っては癒される。長い間そこに佇んでから再びコックピット内に戻って、悶々と思考をし、時にはシミュレーターで実践的な練習をする。

毎日同じことの繰り返しだった。しかしレフィはそんな日々を受け入れていて、むしろその繰り返しされる日々を心地よく感じていた。（これが、僕が機械だっていう証明なんだろうな。リピートされるだけの毎日なんて、人間だったら受け入れられないに違いないし）

実際の世の中では、機械のように同じことを繰り返し返す日々に満足してしまう人間というのはいるのだから、レフィの想像は的を得ているとは言えないだろう。彼の知識内では、人間にも様々な分類があるのだとはわかっていたが、申し訳程度の情報が組み込まれているだけだから人間についての細かなことはわからないのだった。

だから彼は、人間というものがハッキリとはわからない。よって、自分が人間と言える存在なのか、はたまた機械と言える存在なのか、それともどちらとも言えないのか、と完璧な判断を下せない。だからそういつたことで悶々とする。いわゆるアイデンティティ的悩みだった。そんな薄ら寒いことを考えていると、妙に薄ら寒い、迫ってくるような不安に襲われてしまい、コアに悪影響を与えてしまうので、スクラップにされたくない彼はそのことについてはあまり

考えないよう、自重するようになる。

その自重は思いの他上手くいった。自分が不安を感じそうになったら、或いは不安になるようなことを考えそうになったら、何も考えないように真っ白の風景をイメージする。時折、真っ白の風景の中を、黒い横線だとか変な円だとかが通過したり、珍しいものでは玉乗りをしている。ピエロが通り過ぎたりすることがあったが、それを堪えて真っ白の風景をとにかく維持する。それに伴ってしばらく眼も閉じて、再び眼を開けた時には、もうさっきまで何を考えていたのか忘れ去っているというやり方だ。このやり方に対して相性が良いらしく、おかげで、レフィはコアに対して不安を感じさせることが無くなった。少なくとも、コアを赤に変える程の不安を感じさせた結果スクラップにされてしまうという結末からは、遠ざかることに成功。

「悪くない、感じ」レフィ少年は自分で見つけ出したその手段に、えらく感動した。脳味噌蒼白法と名づけて、毎日やった。蒼白の間を時折横切っていく。ピエロが、口元から血をツーンと垂らしているのが不気味立ったりする時もあったが、それ以外には不快な思いをすることの無い、とても便利な手段だったのだ。レフィは自分がスクラップになる心配をしなくて済むようになったので、安心の日々を送れるようになった。

だが、『彼ら三十八人』がやってきた瞬間には全てが台無しにされたような気分だった。

身の毛がよだち、表面的には落ち着いてみせるという芸はできたが、脳味噌蒼白法をやる余裕が生まれず、心臓が激しく脈打ってしまった。まずい、心臓が、と思った時には、『彼ら』という大勢の人間が突如としてコアのところに見れたことによって、コアは青から緑、そして赤にまで変色してしまった。野暮な登場の仕方をしてくれた連中に、レフィは怒りを感じた。八つ裂きにしてやりたいという衝動が湧いてきて、爪を噛みたくなった。だがフェルクルが『彼ら』の元へと向かい出したその途中に、フェルクルはレフィにこ

う囁いた。

「コートマシンとお前の出番は、近いようだな。……頭の中で準備体操でもしておけ」

フェルクルの言葉には感情が込められていなくて、平坦だった。心ここにあらず、と言う雰囲気だったので、レフィは下手に返事をしない方がいいなと思い、言葉には頷くだけに止めた。頭の中での準備体操のやり方がよくわからないので悩んだので、「彼ら三十八人」とフェルクルとの問答を集中して聞くことが出来なかった。人間がどういうものなのか興味が多少あったので、人間たちの会話を聞いてみたかったレフィは、頭の中での準備体操などという冗談みたいなものに気を取られていたことを迂闊だったと後悔した。

だが、筒型の箱に乗って最深部動力室のさらに奥深くに進みはじめた頃には、後悔をする暇もなかった。コートマシンに乗ってその先、何がどうなるのか想像があまり付かず、シミュレーターに現れたでっかい蟲と同じ怪物が、現実に登場する保障もない。どきどきして、足元がぐらつく。地に足がついていないとは、こういうことをいうんだ、とレフィは解った。

「君、大丈夫かい？ 何だか、顔色が悪いよ」

羽根付きの帽子を被った、細めで長身の男にそう心配されてレフィはどう答えていいものやらわからなかった。だが、勝手に他の誰かが言葉を継いでくれたので、返事をせずに済んだ。

「あんなよくわかんない女とずっと動力室に籠ってたんだもん。そりゃ、急にこんな大人数に囲まれたら萎縮しちゃうって」

こんな時なのにやけに嬉しそうにしながら話す女の人間だな、とレフィはわずらわしく思った。聞こえて来る声全てが耳障りに感じてしまうから今は喋らないでくれ、と言いたかったが、人間にそんな挑戦するようなことを言えばどんな目に遭うのかわからないという思いのせいで、彼の唇は重たかった。おかげで、羽根付き帽子の男と嬉しそうな女の会話が延々続いて、辛い。

筒型の箱から解放されてからは、わざと歩を遅くして『彼ら三十

八人』の背中を見送った。船に乗り込むときには彼らの向きが変わるので、油断せずによく背後でくっ付いていく。途中、粘っこい視線を感じたのでその出所を探ると、じつ、とこちらを見つめている青年の姿があり気味悪くて苛立ったが、呑気そうな表情を作ってそれを見せ付けてやれば、自然とその青年も粘っこい視線をやめて、おとなしく船内に踏み入って消える。

（人間って、いろいろなんだな）

人間観察はそれほどにしておいて、レフィは、船に乗り込んだ者たちからは見えない位置に隠してあるコートマシンのところへ急ぐ。そしてコートマシンの目の前に到着して、二十メートルある体軀を見上げれば、今までの不安に近い緊張とは違う高揚感が胸奥から湧き上がってくる。だからレフィは、己が戦いに向いている鬼神に近い存在だとふと悟り、右手がわなわなと疼くのに任せて酩酊すれば、怪物を抹殺することも簡単かもしれないと考えた。

「やってやる」

毎日座りどうしですっかり慣れ親しんだ座席に腰を密着させてから、懐に仕舞っておいた起動キーを取り出し、右側にある差し込み口に入れて、左にひねる。コートマシンが、起動する。

静かな、コアの出すような空調の音がコックピット内で行き交いはじめる。それとほぼ同時に様々な計器がチカチカと点滅して明るくなる。その数多い計器の全てを目で急ぎチェックし、コートマシンに異常箇所が無いことを確認する。ただ、唯一、中央にある大きな窪み。その明かりだけが頼りなく、ぼんやりとしている。レフィは、そのぼんやりとしている箇所に、両手を突っ込む。

窪みに両手を突っ込んだままの体勢で、レフィは両目をゆっくりと閉じる。

イメージを浮べるのだ。自分自身の心臓からhotalubiのエネルギーが発散されて、機体の四肢の隅々にまでそれを染み渡らせる感覚。それに成功した感覚がくれば、次は機体の周囲にhotalubi動力の膜を張っていくというイメージを浮べる…。

機体にhotalubiの動力を染み込ませるだけでなく、機体を玉に包み込むような意識をすることで、機体に傷がつくことを防ぐ防御壁を作り出す。機体表面と、機体周辺。この二重のエネルギー的装甲と、コートによる装甲（コートマシンが着ている服はただの服ではなく、機体の骨組みを守るために必要不可欠。特殊な材質で作られているが、服なので、空気抵抗が凄まじいことになってしまふ。その空気抵抗によって邪魔されることを防ぐという意味でも、機体周辺の防御壁は必要となる）。つまり、計三重の装甲を持っている。

先ほどまでの殺気を静め、空調の音に耳を傾けながらコアのふもとで安らいでいる時のことを思い出せば、脳味噌蒼白法を使うまでもなく、安定して深海の青の輝きを放出することがレフィには出来た。約、三分間、まどろみに引き込まれて、これから怪物と戦うかもしれないということも忘れる。（こうというのが、至福の安らぎって奴なのかな）、だが三分間が過ぎ、機体表面と機体周辺に青の粒子を煌かせることに成功したならば、彼はもう安らぎのぬるま湯に浸っている場合ではなかった。これもプログラミングされていることで、情緒不安定な彼の性格は、急なアップダウンに耐えるために付けられた性格でもある。もはや、目映いばかりの青の粒子を撒き散らしはじめた中央の窪みから手を離れたレフィは、餓えた獣が餌を求めるような衝動を燃やした。

「コアも近くにはいない…！ どれだけ心を解放しても、誰にも文句は、言われない……………」

一度深海の青のエネルギーを注入すれば、後は緑にしようが赤にしようが問題は無いということは知っている。レフィは後先を何も考えていないような咆哮を上げると、青の粒子全てを、血ほどばしるような赤の粒子に変えてしまふ。機体表面も、機体周辺も、真っ赤に光り輝かせる。足を思い切り踏み込み、左右にある操縦桿を力強く握り、前に押し出す。後は、叫ぶだけ。

「コートマシンで、跳ぶ！」

まるで爆発するような音を経てながら、機体が跳ね上がる。止まらない勢いで、天井を突き抜けて、階層を上がり、突き抜けて、さらには砂の層を割って、割って、抜け出て、割って、抜け出る。たったの一跳びでコートマシンは蒼空に突き抜けて、太陽を背にし、腰よりナイフを一つ取り出す。ナイフの刃を、太陽の光に反射させて煌かせた。

「船を襲う怪物は、全員八つ裂きにしてやる！」

コートマシンの赤青のスコープが映す映像を見ることの出来る、ヘッドマウントディスプレイを装着する。レフィが首を振るのに合わせてそのディスプレイに映っている景色も変わるといふ風に、コートマシンの頭部に付いているスコープと連動してくれる。だがディスプレイ越しに前方百八十度を探っても、蒼空と砂の海が広がっているばかりでレフィにとっての殺戮対象である怪物は見当たらない。ならば、と両眼のすぐ前にあるディスプレイをくいつと片手でひねり視界から外し、コックピット内の左壁面に取り付けられているレーダーの表示を確認した。ディスプレイに映っていない箇所にも行き届く、第三の眼。赤外線センサーよりも優秀というその第三の眼は、レフィを驚かせる速さで、何かしらを感じてみせた。後方に大きな反応が一つ。その大きな反応の周辺にて小さな反応がいくつか。

ディスプレイの位置を自分の眼前に戻すと、レフィは引きつりはじめた表情のままに、操縦桿を捻って機体の向きを百八十度変える。「こつち…もうちよつと、こつちか……」うわ言のように繰り返しながら首を左右に動かす。そして大きな反応をレーダーに表示させたものが何であったか理解した。それは先に空へと飛び上がった、『彼ら三十八人』とフェルクルを乗せた新しい船だった。

「…ちつ…まぎらわしい…」

レフィは舌打ちをしたが、ならば大きな反応の周囲に散らばっている小さな反応は何だろうかと疑問に思う。面倒ではあったが、それを確かめるために、レーダーとディスプレイを交互に見比べて周辺を細かに探索する。だがその小さな反応のすぐ目前に到着しても、また、真上で滞空してみても、その反応と思わしき姿は見当たらない。遙か上空に怪鳥でもいるのかと見上げてみても、魚のような形をした雲があるだけだった。ならば残るは……

「砂の中か…！」

少年が閃いて下を見ようとしたその瞬間に、『EMERGENCY』と警告がコックピット内に響き渡った。思わず悪態を付きながら、アクセルを思い切り足で踏み機体を加速させる。だが機体の足側、白のブーツを何かがかすめて破損してしまったことがわかったので、慌てて首を動かし、ディスプレイ越しに足の方角を見ると、そこに生物の触手らしき影があった。赤い色をしていてうねうねと細かに蠢いており、先端の部分が刀のように尖っている。その刀の部分がエネルギー装甲を簡単に突き抜け、修復に費用のかかる靴を破損させたのだ。愛着がある機体に傷を付けられたということがショックで、レフィの頭に、血が昇った。

「卑劣な糞野郎！ バラバラにして二度と気色悪い動きを出来なくしてやるよ！」

親指で操縦桿に取り付けられているスイッチを押し込む。それによつて手に持っていた一本のナイフが、触手に向つて投擲される。刃に赤の粒子を纏いながら。

シュミレーターで何度も練習を繰り返した成果ということだろう、外れることなく、その触手の血肉をナイフが切り裂いた。一刀両断、hotalubi動力がナイフの刃にも染み込んでいるおかげで、実体の刃の部分よりも広く相手を斬り裂けるようになっていた。小さな刃なのに、大きめの触手を両断することができた。hotalubiの動力は攻撃の面でも機体の力添えになるということだ。

だが敵の数は一体ではない。『EMERGENCY』と警告は次々に鳴り響く。そして無機質な音声で敵の位置を伝えようとしてくれる。『敵、右斜め下、2』。『敵、背後、1』。『敵、真下、3』。

「計、六つの敵…。本体は出てこないか」

アクセルを目一杯に踏むことで機体を最大速度にまで加速させる。触手が機体を追いかけるが、追いかけるばかりで追いつくことが出来ない。逆に、分散していた彼らが一つの方角に集束することにな

る。『敵、真下、6』。そのアナウンスを聞いた瞬間に、レフィは上空に向いていた機体を反転させる。反転させるのに合わせて背中に付いている銃身の長い銃をパージして、コートマシンの両の手に持たせ、構えさせる。

「……撃つ！」

六つの敵がいる真下に向けて、レフィは引き金を思い切り引く。それによつて真っ赤な光を放つ銃弾が発射されて、一つの直線を描いた。纏まって動いていた六つの触手はそれによつてまとめて貫かれる。みつともなくうねうねと動きながら、地へと墜落していつて、やがて動かなくなつた。

レフィはディスプレイ越しにその様を見下ろしているが、その瞳はまだ冷酷。ディスプレイから意識を反らすことなく、六つの触手を持つていたその本体が砂中より現れるのを待つ。

(そろそろ来るはずだ……)

だがいくら待てど、砂中からどんな姿も現れはしない。外で吹いている風の呻くような音だけが左右に取り付けられてるスピーカーから聞こえて来るが、他の音は無い。意識の集中をやめては負けだという妙な感覚に囚われたレフィは執念深く本体が砂中より現れるのを待ち続けるが、風の音がスピーカー越しに鳴り響くだけ。だが、それでも砂海に目をむけ続けるレフィ。

だが突如として、コックピット内に動物の威嚇するような鳴き声が鳴り響いたので、レフィはディスプレイを視界から外すことになった。ディスプレイを外した彼は、コックピット内の全方位に文字が浮かび上がっているのに気が付かされる。

『EMERGENCY』 『HELP!』 『EMERGENCY』

『EMERGENCY』 『EMERGENCY』 『HELP!』

『EMERGENCY』 『EMERGENCY』 『EMERGENCY』

『HELP!』 『EMERGENCY』 『EMERGENCY』

『HELP!』 『EMERGENCY』 『EMERGENCY』

『EMERGENCY』

「……コアが……！」

レフィは己の視野があまりに狭かったことに気が付き、僕は馬鹿だと心の中で叫んだ。レーダーの表示を確認すれば、船の反応の近くに、もう一つ大きな反応が何時の間にか生じていた。助けなくてはまずい。助けを必要とされている。コアがやられてしまえば、深海の青には浸れなくなる。そうしたら、どうする？どうなる？

レフィの興奮は強まった。焦りと不安と怒りが内混ぜになってぐちゃぐちゃとなる。

「こっちは囿……。化け物の癖に頭を使うのか！……レーダーだって、何でいまさらになって……使えないな、このレーダーは！」

物に己の感情をぶつけてから、彼は船の飛んでいる方角に向って機体を全力で飛ばした。頭に電流みたいなぴりぴりが走り、操縦桿を握る手が細かに震える。全力でアクセルを踏んでいるつもりなのに機体の速度が全開に達しないのは、足に力が上手く入らないからだ。

(……！。……だが、まだコアがやられると決まったわけじゃない)

考えが足りなかった自分を責める暇は少年には無い。だが、失敗したことを即座に取り繕う器用さも持っていないから、全身に不純物が詰まっているようで重苦しいままに機体を前進させなくてはならなかった。その重苦しさを払拭するために『EMERGENCY』『HELP!』と騒がしいコアの呼びかけに対して悪態をつきまくる。悪態を付くのは、ディスプレイに映り始めた、塔か山のように大きく映っている怪物のその威厳に負けないための対策でもあった。少年はコアのボディガードなのだから、怯むわけにはいかない。

こちらが近づいているのか向こうが近づいているのか。塔か山に見えていた怪物とコトマシンの距離が縮まる。船は丁度その間の位置にあったが、怪物の方が船に近いのは明らかだった。レフィは怪物の形状を確認してそれが大きな蛆虫とでもいうかのような蟲だとわかり相手が危険な存在と知るが、それなのにアクセルを踏むことしかできない今の状況に腹が立つ。が、焦ってもどうしようもな

く、蟲が船の間近にまで接近するばかり。

「…せめて……！」

操縦桿のスイッチを押し込み、腰のナイフを二本投擲させる。こちらに気を取らせる程度のことをさせる為であったが…。

「…ちっ！」

ナイフは途中で赤の光を失い、地に落ちて消えた。無駄なあがきにしかならなかったということだ。

だが、投じたナイフが力無く砂丘に飲み込まれていくそのやるせない光景は、レフィの元々興奮していた心が爆発するには丁度良い材料となった。彼はわけもわからぬままの、獣じみた咆哮を上げた。一度や二度ではなく、狂ったように何度も叫んだのだ。ほとんど錯乱していると言っても良い。心臓のビートを小刻みに、激しく鳴らし。

「うああああ」と顔を真っ赤にしながら。

hotalubi動力は人の感情と繋がり合って影響を与え合う動力だから、乗り込んでいるレフィが興奮をすればhotalubi動力も赤となって血走る。その血走ったhotalubi動力の粒子が満ち満ちているコックピット内で佇むレフィは、より赤を引き出されていく。片方の興奮がもう片方の興奮を促すということを繰り返すことによって、時間が経てば経つほど、コートマシンは戦闘意欲の赤を活発化させていく。それが実際に兵器としての戦闘能力を高めていく。

だからこそレフィはコートマシンの部品として欠かせない存在である。人間の姿形をしているからこそ、hotalubi動力と同調し合い、機体能力を向上できるからだ。

そして今、同調によってコートマシンはその速度を上げた。機体周辺のエネルギー的装甲はより赤の粒子を濃く発生させ、機体はまるで赤の球体そのものとなったかのようになり、粒子の尾を空気中に引きながら一気に前へと進んだ。

「…！」その急な速度の上昇にレフィ自身が戸惑い、機体のコント

ロールができなくなる。

蟲の側面にナイフと銃撃を浴びせようと考えていたが、蟲の口元へと機体は進んでしまった。だが機体の急加速が無ければ守るべき船が食べられていたのだから、悪くは無状態に変わってきている。レフィは蟲の漆黒の大口から発されている、腐った色をした吐息を機体に浴びせかけられるのが屈辱な気持ちではあったが、それさえも怒りの糧としようとしながら、ナイフを二本取り出し、蟲の大口の一部分に、躊躇なく突き刺してやった。蟲は多少だが、怯む。効果はあった。

その反撃ということだろう、スपीカー越しに蟲のものと思われる低い唸り声が聞こえた後に、『EMERGENCY』と警告。漆黒の大口の内部から赤い色をした触手が何本も昇り上がってきた。先ほどの囷よりも凄まじく大きく、また動きも速く見える。反規則的に柔軟に動き回ってくるそれを仕留めるには、反射的に一匹一匹に狙いを付けていくのが重要だとも見えるが、今はそんな暇は無い。触手に気をとられていては、蟲本体によって船が飲み込まれてしまう。

触手と蟲本体。その二つを同時に抹殺するための方法。

(その方法を知っている。それをやる事に躊躇なんて感じるわけがない。僕の存在意義はコアを守ること。だから、コアが無くなるのは僕にとつてのすなわち死。……)

彼は自分の目的を知っている。やることを知っている。そのやることから逃れても仕方が無いということも、知識として知っている。いや、或いはこれもフェルクルによって書き込まれているのかもしれないと想像もする。何かに依存している身は、その依存している対象が消えるのを防ぐために、自らの命を差し出すことになる時もある。その度合いが強ければ、なおさら。それに役割でもある。ボディガードは対象を守る為に命を犠牲にするものだ。

レフィはコアの深海の青に魅せられているから、それを守るために命を投げ打つ覚悟も持っているし、自分の役割を果たせなければ

存在として意味が無いとも思っている。だから彼は躊躇無く、中央の窪みに両手を突っ込むと、両眼を閉じ、至極呆気なく、言葉を呟いてみせた。

「SUICIDER！」それが解き放つための言葉。

コートマシンは今まで赤の粒子を纏っていたが、途端、緑に色が変わり機体を包み込むようにしてその輝きをどんどん増していく。

蛍火は強く光り輝いて、だがすぐに消えていってしまう。フェルクルがそのことを見越してhotalubi動力とつけるとは考えにくい。けれどもコートマシンを中心にして周囲に広がっていく緑の光は、hotalubiと名づけたくもなる美しさと儚さをたしかに兼ね揃えている。

コックピット内で、レフィは光の広がりとその美しさに見惚れながら、自分の命は残りわずかだとわかっているから、涙が溢れるような悲しみがせり上がった。彼は機体が光を膨張させるだけさせて爆発するその直前に、柔らかな微笑みを浮べてこう呟いた。

「青の方が、僕は好きだな」

コートマシンはhotalubi動力を暴走させることで超強力な爆発を発生させた。緑の色をした爆発は、蟲の発する腐った緑とは違って、眼と心を休ませるキラキラとした点滅のある粒子が、とても美しい。そして美しいだけでなく、蟲と触手をまとめて殺戮するに十分たるエネルギーも持っている。蟲のことも触手のこともhotalubiの光でぐるぐる巻き付くようにして覆い、それらの内側から外側に至る全ての部分を支配し、緑の粒子に変換させた。

緑の粒子は形を崩していき、ばらばらになって宙を舞うと、砂海へと雪のように落ちていく。

雪のような蛍。あるいは、蛍のような雪。

人間として

世界で一番広いといわれている砂丘の蒼空の中で、蛍火の雪はしんしんと落ちていく。

生命を殺傷するために利用されていたそのエネルギーの残滓は、景色を神秘的な色合いの強い、清廉で触れがたいものに変えていく。そして蒼からこぼれ落ちていく蛍火は、砂に染み込んでいき隠されていた白の建築物を暴き出した。

蛍火によるものなのか。はたまた、蟲が果てたことによるものか。蛍の雪が砂丘に降れば降るほど、いままで影も形も無かった、真白の建物ばかりから構成されている街、が姿を現していく。

「…すごいな……」

レフィはたいして生きていないが、何よりも忘れがたい光景が自分の前に広がっているのだと察した。だけど勿体ないなとも感じる。天と地が逆さまになっている状態でこれを見るのは、ある意味滅多に経験できる体勢じゃないからいいが、片目だけではなく、両眼で蒼空と蛍火と白建物の三境界が織り成す光景を見れば、これの二倍は感動できたよなと思ったりする。

自分の身体がゆっくりと消えて行くのは、不気味で、そして冷たい。半身がすでに緑の粒子と化して砕け散っている。hot alu biのエネルギーに身体が侵され、蟲と同じように彼の身体自体も蛍火になるうとしていた。今まで彼が乗り込んでいた機体も、着ていたコートが全て剥げ、骨組みとなって落下している。コートマシンは粒子に侵されることのないように作られているだろう、骨組み自体は、緑の粒子化をしていなかった。

「僕の身体もそういう風に作ってくれよな……」

そんなことを愚痴ってから彼は薄く微笑んで、自分の全てが粒子化される時を待った。怖かった。自分が消えてしまうということが不可思議で、理解が容易にできないことだと感じる。どうせなら消

えることに怯えないようにプログラミングしておいてくれればいいのに、そうすればこんな恐怖を感じずには済んだのに、とレフィは思ってから、ハッと気が付く。

（消えるというのは、こうやって恐怖を感じることも出来なくなるということだ。こうやって、消えるのに怯えることも、戦いで気持ちを昂ぶらせることもできなくなるということなんじゃないか。それはどのような世界なのだろう。無くなるとは、どういうことなのだろう。無になったら、こうやって考えることもできなくなる……？ コアも無い。コアの青の安らぎに浸ることはできない。今、目の前に広がっている清廉な景色を見ることができない。無になるとは本当に無じゃないか。今、最後まで消え果てたら、僕はどうなるんだ……………）

背筋を通り越して背骨が震えるのがわかった。芯まで不安に覆い尽くされて、心が食い潰されていくとわかった。この運命から逃れたいと思う。しかしもう手遅れだと知識でわかる。

レフィのまだ粒子化していない左眼から、涙が流れる。涙はすでに粒子化されていて、人間の瞳から蛍が飛んでいくようだ。すでに血液も全て粒子化を終えていて、左足が形を失いはじめているレフィは、そのぼやけかけた視界で、清廉の景色を直前まで眺めていようと思った。

だが、その途中、左足が蛍火となって蒼空を舞った頃。

蛍火が降り注いで白の建築物が砂丘に次々に生まれていたのは、白砂の草原が出現したのだろうと見当をつければ何か安堵すら覚える。コートマシンの自爆で蟲を抹殺した結果、建築物が砂丘に姿を現したのだから、自分の手柄だとも思えるからだ。自分が船員として、役割以上のことを果たせたと思うから、悲しみの中でも、よるこべる。

しかし、レフィ少年の視界から見える砂海のほとんどが数々の真っ白の建築物に変わると、途端にそれらに異変が生じた。どうということだろう、建築物はオセロの白がひっくり返るかのように、次々

に黒の建築物たちへと色を変えてみせたのだ。

目指していたのは『白砂の草原』。それはある程度比喩としての言葉だとはわかっていたから、白い草原ではなく白の建築物が現れても、そこまでの驚きは無かった。

だがそれが途端に黒に色を変えれば、驚きどころか、何か不吉な兆候を感じ取ることもなる。

手柄を立てたと喜んでいた感情も消え失せた。その次の瞬間には、黒の建築物の中でも特に大きな建物　良く見ればそれは巨大な砲台だったのだがレフィには視界がぼやけるせいでわからなかったから、青白い何か光った。レフィがそれが何かの見当をつける前に、青白い光は直線となって空に飛んだ。つまりその青白い光は光線となって、砲台から放たれたのである。

レフィは骨組みになったコートマシンが狙われたのかと思った。機体がとどめの一撃でもさされたのかと思った。だが、それは違ってもある、あのコアの納まった新たな小型船舶。つまり、レフィにとって守らなくてはいけない対象が撃ち抜かれたのだ。船は黒煙をもくもくと上げて、高度をどんどん下げていく。船が墜落するのは時間の問題だということは、誰の目にも明らかかな状態となった。つまりその光景は、レフィにとっては、大切なコアが、守らなくてはならないコアが、ボディガードの尽力が至らないせいで沈没していくという事実には他ならなかった。

「う……あ……あ……！」

悔しさ、至らなさ、情けなさ、その怒り。そんなものが湧き上がって心から泣くのを止めることはできず、拳に力を込めたく思った。だが、残っていた左拳はちょうど粒子化を始めていたから、力を込めることすらできない。やがて左の拳も螢火となって宙を舞い、左腕の粒子化が始まった。

未練が、湧いた。こんな状況のままに、役割を貫徹することもせず朽ち果てて消えるなどあり得ないと、歯を食いしばる。食いしば

つたせいで歯の粒子化が進み、レフィの唇から蛍火が漏れていくが、それを気にするわけが無い。左眼を船から反らせず、未練という感情の膨張が止まない。

（僕は人間もどきなんかじゃなかった。僕は人間だ。パーツでもあるかもしれない。でも、人間でもあるんだ。だって……こんな感情が………！）

レフィは、意識を集中した。一つのイメージを頭の中で固めていく。

まだ自分の役割は残っている。まだ、やらなくちゃいけないことがある。

だから。

消えてたまるか。

白砂の草原

『白砂の草原』は街として昔から地球上にあった。が、異常災害が生じた遙か以前の時から、砂丘の巨大蟲の御腹の中に閉じ込められていたので、地表に姿を現わすことは無かった。しかし、コートマシンの身を呈した攻撃によって蟲は粒子化して死に絶えたので、『白砂の草原』は蟲の御腹から吐き出された形となり、ついに隠れていた姿を砂丘に晒したのだ。

もちろん、今はもう真っ黒の建築物ばかりが立ち並んでいるから『白砂の草原』とは言えない。

螢火の粒子が全て地表に降りたことで真っ青に戻った蒼空。撃たれて落下していった船の、黒煙の後残りがまだ空の中でもわもわとしていたが、そんなものは、時間が経てば大体が青に溶け込んで霧散した。そんな蒼空の下にある街。

空を飛んでいた船を沈没させる砲撃を放ったばかりの街だというのに、騒がしさは無く、随分と静まり返っている。いや、砲撃が放たれた時でさえ、街は静かなものだ。人々の喧騒らしい喧騒も無かったし、いきり立った怒号もなければ、戸惑いの悲鳴もない。すでに墜落した三十九人を積んでいた船は、街の人間たちからはまるで空を横切る飛行機のように無関心に扱われたように見えた。

沈没させたのだからまるで無関心ということは無いだろうが、人の騒ぎが起きないというのは、そのことに無関心であるということに違いはないのだろう。ぼんやりとしている人の姿が黒い布生地の間を縫うようにして、ところどころに見受けられはしたが。

その黒一色の街並に人の姿はまばらだ。そもそも黒ばかりの建築物だけの街というのは、とても人を寄せ付ける作りでないように見える。住まう人々の活気を奪っていくではないか。

実際、その街での人間と建物の比率は1：1だった。一つの建物には一人の人間しか住んでいない。

これは随分と前から、その街での普通、常識、通常で、そこに住まう人々にとつては不思議と感ずる状態でもない。

メメルという少女も、そういう人々の内の一人で、そして彼女は一軒の家の所有者であり、また所有される者でもあった。彼女の住まう家はテングロンハットに似ていて、口やかましい隣人から羨ましがられる悪くないデザインと住み心地。口やかましい隣人の一軒家は手袋に似ていてデザインは悪くなかったが、住み心地は良くなかった。五本に別れている指の部分の行き来を、いちいち手の甲にまで戻らなければ出来ないことが最大の欠点で、口やかましい隣人はいつもそのことをメメルに愚痴る。メメルはいつもそれを適当に流して聞き、適当な相づちだけを打って、最後に生気の薄い笑顔を浮べてから、「さようなら。次は楽しい話になるといいね」と嫌味な別れ方をする。それは日常。それが日常。

隣人は立腹するから、また次の日も愚痴を零す。なるべく相手に退屈を感じさせる為に、同じ言葉尻、同じイントネーション。メメルは生気の薄い笑顔を浮べてからいつもと同じ別れ方をする。

「さようなら。次は楽しい話になるといいね」

『白砂の草原』がまだ蟲の御腹の中にあつた時　つまり建物の外觀が全て白で統一されていた時といたことが　住人たちは家宅で動き回るといふことだけを生活としていた。とても謎めいている話ではあるが、蟲の中にあつた白に統一された街において人間が為さなければならぬ、いわゆる『仕事』という奴は、『それぞれに与えられている家宅で動き回る行為』以外には無かつた。では具体的に、動き回るとはどのようなことか。

親も兄弟も親族も無しに、テングロンハットの形をした家宅に住まう一人の少女、メメルという子の繰り返される日常をほんのりと覗いてみれば、『白砂の草原』についての多少の理解を得ることもできるだろう。

メメルにとつてのAM:5:00。おしゃぶりを口に加えている赤ちゃんの格好をしたトナカイの人形を抱きかかえながら、目覚ま

し時計も無しにむっくりと起き上がる。天蓋付きのベッドには可愛らしいひらひらがたくさん付いていて、POPな花柄のクッションが色とりどりに散らばっている。

彼女は抱きしめているトナツト君（メメルが決めたトナカイの名前）をベッドの隣にある小さめの棚に座らせてから、ベッドから降りて床に足を下ろす。今は寒い時期だからホットカーペットが引かれている。眼にまばゆい赤の色をしているそれが朝の彼女には好ましくは無かったが、あまり気にはせず、真白の壁、真白の天井の自室を歩き、部屋に唯一ひとつだけの小窓を開く。

「…午後には、雨が降りそう」

蟲に食われているその街に、朝日が昇ることはない。一日中ずっと薄暗く、藍色の空をしている。月も無いのだから真っ暗になるのではないかと思われるが、白の建築物は全てがやや明るめに発光しているので人が外に出れないほどの暗闇が広がっているわけではない。常に、藍色ではあるが。

メメルは、というより街に住んでいる住人全てがやっていることなのだが、一日の天気を知りたい時には空のてっぺんにある、常に光り輝いている亀裂を見るのが常識だ。亀裂が怒っている人のようにギザギザになっているのは雨が降る予兆であり、逆に楕円の形をしていると大便をした後の人のようにスッキリしている時は一日中、雨も雪も降らない。天気の子エックはとても大切だ。『白砂の草原』で降る雨は、硫黄の生臭い匂いを持っているので、わずかでも浴びてしまえば身体から硫黄の匂いが染み付いて剥がれなくなってしまう。二日くらい臭いままになる。それほどにしつこい臭気だから雨が降ってから後、二日間程度、人は一軒家からの外出をしない。

メメルは小窓から外へ上半身を出して亀裂の観察をし、ギザギザが昨日より多くなっていることをわかって少し憂鬱になる。不潔なものは嫌いだ。そんな気持ちのままに上半身を屋内を戻そうとした時に、お向かいに住んでいる名前も知らない男の人も自分と同じように亀裂をチェックしている所なのが見えた。長身でスマート

な人。スマートっていうのは内面もスマートそうという意味での、スマート。向かい側に住んでいるその男性は、メメルにとっては密かな憧れの対象であったから、雨のせいで抱えそうになった憂鬱は爆散し、かわりに乙女的キラキラがぶわっと誕生した。

そして、なんだかいろいろ妄想して楽しんだ。うふふ、とクツシヨンに顔をうずめてぐにやぐにやしたりした。

それを楽しむのに飽きたのがAM:6:30。それから三十分ほどクツシヨンを尻に敷きながらぼーっとすること三十分。AM:7:00に、棚の上におさまっているトナツト君から朝の挨拶をされる。『good morning! 俺のことで楽しんでいただけ、なんだか恥ずかしいね!』

メモルの全身に熱がほどばしつた。脇にも首筋にも冷や汗がドツと飛び出て、反射的に身体がひくつくことになる。その後には彼女は棚でぐったりしているトナツト君のほうに顔を向けてから叫んだ。

「いつも通りの声に戻して!」

メモルのそれは、その場に他人がいたならばそれら全員がひくくり返ってもおかしくはない程の音量だったことから、メモルの羞恥心が凄まじく刺激されたことが窺える。棚の上におさまっているトナツト君から発された声は、先ほどのメモルの妄想世界の中で様々な格好をして現れたスマート男性の声そのものだったから、メメルは不意を突かれた形となり戸惑い、怒ったのだ。

怒声を浴びせられたトナツト君は、人形だから表情が動くことはないが、その全身をお化け屋敷に怯えている人のようにふるふると震わせたが、それはメモルの怒声に威圧されて怯えたというわけではなく、トナツト君にとつてのそれは嘲笑を表現していた。赤ちゃんの格好をしている割には餓鬼のような悪戯が好きなトナツト君。『ごめんごめん。たまにこういうことをしたくなっちゃうんだよ』

彼は普段の、『物腰が柔らかかそうでどんな時にもメモルを優しく扱ってくれそうな男の子の声』に自らの発生音を調節した。『物腰が柔らかかそうでどんな時にもメモルを優しく扱ってくれそうな男の

子の声』というのは随分と長つたらしいが、このテンガロンハット型一軒家に住むメメル希望によりトナット君はそういう声音に設定されている。

トナット君は、先ほどの悪戯のせいでむすつと不機嫌な雰囲気になつてしまったメモルのことを気にしない風にしながら、続けて口を開く。

「さあ。今日も明るく元気に生活していこうよ。まずは下の居間に行つて、朝ご飯の支度だ。食材の調達は、いつも通り、もう済んでいるよ」

そういうわけでAM7:10。メメルは随分と目の覚めたままに寢室を出て、日々の積み重ねで少しくすんだ白になつている階段を降り、テンガロンハット住宅の中で一番広い居間に、ドアを開けてのっそり入る。そんな彼女をトナット君の声で迎えたのは、動く白熊人形。

『good morning!』

「挨拶はさつきしたでしょ」

『エへへ』

「いたずらばかり」

『暇つぶしにはちょうどいいだろ』

動く白熊人形は執事の格好をしているが、サイズがちよつと合つてないのだろう、着ている執事服はいつもボタンがはちきれそう。トナット君と同じ声の彼は、名前をシロマルと付けられている。

シロマルは居間の中央に置かれている黒の長テーブルに指を突き出す。そこには今日の朝ご飯を作る為に必要な食材、ロールパン、ウインナー、キャベツ、ブロッコリー、アスパラガス、カボチャ、大根、ニンジン、ジャガイモ、カッターチーズ、ドレッシングソース。一人分を作る為に必要な分だけ、バスケットに纏めて入れられている。メメルはバスケットを両手で持つと、清潔感の保たれている白を貴重としたキッチンに踏み込み、シロマルに声を掛けた。
「今日は一人で作るよ。ホットドックと温野菜サラダはもう飽きる

ほど作ってきたから」

明るい調子でそういう意見を出したメメルに、シロマルは特に反論もせず表情の変わらない顔をこくりと頷かせる。

『やる気を出して取り組んでくれるのは、僕としては嬉しい限りだよ』

「別に、きまぐれでそういう気分になっただけ」

『きまぐれでも何でも構わないさ。ただそういう行為をしてくれるだけで喜ばしいのだから』

「うん。その替わり……」

『……何?』

「昨日食べた飴をもうちよつと食べたいなあって」

クロマルは思わず苦笑した。表情を変えないまま、体をわずかに震わせる。

『なるほどね。飴でやる気になってくれるなら、僕としてはありがたい限り。ちよつと幼すぎて心配にはなるけど』

メメルは『幼い』という言葉によって反発心を引き起こされたらしく、少し険しい顔を上げた。

「別に幼くはないよ。飴はおいしいんだから、おいしいものを食べたいって思うことの何がおかしいっていの?」

シロマルは(そういう言い草が幼いんだ)と心の中で思いつつもあまり下手なことを言ってはせつかくのメモルのやる気が失われるかもしれないという想像もするから、言葉は少なめに返す。

『冗談だよ』

「……ならいいんだけど!」

日常と非日常

何か言いたそうにむっつりとしてしまったメメル。そのむっつりをこじらせて不機嫌にさせてしまうのも面白くないので、シロマルは意識を広げて一軒家としての自らに戻ると、家のはずれにある貯蔵庫に飴玉がまだ残っているかの確認をする。すると十二個入りの袋が一つあったが、メモルの好みであるぶどうソーダ味がそこに入っているかがわからない。それは実際に足を向けなければ確認できないので、一軒家は、自らの意識をシロマルから脱させ、貯蔵庫に置かれている犬人形のポン太に意識を轉移させた（メメルに心配させないようことわりを入れてから）。

ポン太は冷たい床に無造作に置かれていた自身をビクツと痙攣させてから、一軒家のはずれにある貯蔵庫で意識を覚醒させると、早速、飴玉十二個入りの袋にぶどうソーダ味が入っているのか、心臓もないのに、どきどきしてチエック。袋を開けてみると、中の飴玉もそれぞれ小さな袋で小分けされていて、その中から紫っぽい色が入っているのかを探る。一つ、これぞ、と思ったのを見つけ出したので取り出してみたら袋に「さつまいも味」と書かれていた。がっかりしながら、これはもしかすると無いかもしれないなぶどうソーダ味、と落ち込みながらわずかな希望に縋りつくように袋の中を探したがソーダ味とさつまいもソーダ味しかなかった。どんな不幸だろう、どんな嫌がらせだろう、とポン太は理不尽な思いに駆られながら、手持ち無沙汰でも仕方が無いのでソーダ味だけ拾い出し、がっかりしながら立ち上がると、ぼとり、と床に何か転がり落ちる音がした。

その音は何か、飴玉が落ちた音のように聞こえて期待が膨れ上がる。

（まさか……！）

振り返って床を見ると、なんとありました、ぶどうソーダ味と思

われる紫の飴玉。彼は少し興奮しながら袋に書かれている文字を恐る恐る覗き込み、「ぶどうソーダ味」と間違はなく書かれていることに感激した！興奮した！ポン太はうきうきとした気分のままに、貯蔵庫の扉を開けて、居間に向かい、「あつたよメメル！ 飴玉あつた！」と嬉しさを隠すこともせず叫んだ。メメルはちょうどケチャップをホットドックにかけている所だったが、すこしむっつりだった彼女の表情が、ポン太の叫びを聞いた瞬間、パツと花が咲いたように明るくなる。

「本当！」

メメルはケチャップをそこら辺に放り投げてからポン太に駆け寄ると、腋の下を両手で持つて思いつ切り彼を持ち上げてぐるぐるぐるぐるその場で回転した。ポン太は散々目を回されてふらふらになり、回した本人のメメルもふらふらになってしまって、何だか面白い感じになってしまった。

お互いの平衡感覚が元通りになった辺りで、「じゃあ早速なめようかな。ちょうだい」とメメルは可愛らしく両手を水をすくうような形にして差し出した。ポン太はニコニコと嬉しい気持ちのままに「ぶどうソーダ味」を彼女に一粒渡した。彼女はびりつと袋を破ると、漫画のキャラクターが飴を食べる時のようにわざと放物線を描いて、飴玉を口の中に転がしてみせた。だが、二、三回くらい右に左に飴玉を転がしたあたりで、まるで彼女自身がピッチングマシンになったのかのごとくの勢いで飴玉を口から発射させた。発射された飴玉はポン太の額にぶつかってから、床に落ちて転がる。慌てたポン太が「何ごとでっしやる」と驚きを隠さぬままにメメルに問うと、すごく不機嫌そうな声音での返事。

「まじでまっすいんだけどこれ。ソーダ？ ソーダ？ 全然そーじやない。これ明らかに違う」

「ええー」

ポン太は懐にまだ仕舞ってあった飴玉をもう一つ取り出すとそれをペロリと舐めてみる。すると、柔らかい甘味と、舌上を痺れさせ

る酸味の両方がスクランブルして心が躍ったので小躍りしたくなつたが、目前のメメルが陰しさを増幅させているのが表情からも内面からも察知できたので潔く謝ろうと思つた。が、謝る前にびちーん。「なにやってんの！」鋭い一撃で吹き飛んだポン太は、床に倒れるとそのまま手足をだらんと垂らして動かなくなつた。それをメメルは当然心配しない。

「トナツト君あたりに逃げたか…」

憎たらしそうに天井を一瞥するが、ホットドックを食べる方が優先なので、彼女は椅子に座ってからそれに齧り付く。冷蔵庫から牛乳を取り出し、それを電子レンジで暖めてホットミルクにしてからそれにも一口、唇をつける。大きく息をつきながら再び椅子に座ると、温野菜サラダをぱくぱくと食べ続け、ホットドックより先に片付ける。ホットドックは最後に大きく口を開けて突っ込み、まだ口の中がもがしている状態のまま、ホットミルクを次ぎ込み、流し込むようにしてどちらも胃に入れる。その後には、わざと倒れているシロマルの腹を踏みつけてから、食器を片付けて、時計を確認する。現在、AM8:00。

「さて…と…」

やることはある。掃除、トイレ、洗濯、入浴、庭の手入れと言いつつ出せばキリが無い。洗剤や掃除機を使って食器を洗つたり埃を吸つたりなどして家の清潔感を保つ。そして居間の大きな窓から庭に出て、アヒルのじょうろでちよぼちよぼと植物に水をやる、雑草を根っこから抜くなどする。

メメルは物事を考えないようにして雑務をこなす。なるべく頭を空っぽにすることを意識することで退屈な繰り返しを受け入れるという、何時しか身につけた、処世術だ。

「ふんふんくん」鼻歌とか歌つたりもする。

今、テレビで一日一回は登場するグループ、オレオレ崎、の最新曲『テレフォン 田中』がメメルは好きだ。アヒルのじょうろでちよぼちよぼやること自体は少し退屈だったが、鼻歌で気を紛らわす

ことによつて、まあ、楽しめるように工夫したというわけだ。

庭の草木に水をやり終えたメメルは居間に踏み入りながらぼやく。「私もテレビタレントになれば、一軒家の仕事なんて放つておけるのになあ」

テレビタレントという職業は特別な扱いを受けるから、それになれば『仕事』をしなくて済むようになるのだが、あいにく、選ばれた人間しかその職に付くことは出来ない。まだ幼いメメルにだつてそのことはわかるから、先ほどのぼやきは願望というよりは、嘆息に近い。

しみつたれている毎日だなあ、とメメルはふと思い、八つ当たりでシロマルのお腹をわざと踏んだが、中身が入つておらずただの人形だから何の反応もしない。つまらないなあ、と思いつつも、そろそろ面白い番組が始まる時刻だから、それに期待する。

そういうわけでA M 11:00。メメルは手元にある黒のリモコンを手に取り、赤ボタンを押してテレビの電源をONにする。真っ黒な画面が人を映し出す。

あなたの心もまっさらさら　トコツルン　気分がうきうきルルルン

ぶるぶる震えてアピールしたあの夏の日：僕は彼女に食べられた……おいしいこんにゃくはやっぱりフルヤだね！フルヤのこんにゃく

バンバンバンと屁をこいたあゝ　そんなあなたにガスピタリゝ　ピッピッピッゝ　ガスピタリゝ　今日からあいつが屁っこき野郎　ガスピタリゝ

「あー。こんなCMはどうでもいいー！」
はやく番組が見たいメメルは苛立つ。それから一分間くらい、彼女は微妙な気持ちで時を過ごした。

だけど一分間すれば番組は始まったので、彼女の表情は電灯が点いたかのように明るく、朗らかになる。極端。

フッフ専用人間にでも変化したかのようにフッフと微笑を何度浮

べたことだろうか。

「フフフ」「フフフ」「フフフ」「フフフ」「フフフ」「フフフ」「フフフ」「フフフ」「フフフ」彼女はとても楽しくAM11:00の時間を過ごした。

だが、番組が見れるのは一日に二時間と設定されていることから、PM1:00にはテレビの画面が自動的に真っ黒になる。フフフ専用人間に変わっていたメメルは電灯が消されたかのように暗くなり、不機嫌そうになる。極端。

と、なるはずだった。

PM1:00に用意されている材料から昼ごはんを作り、PM1:30にはそれを食べ終え、PM2:00には雨が降ってなければ散歩をし、PM3:00には一軒家にどこか不調なところはないのかとチェックし、PM5:00には洗濯物を取り込み、PM6:00には用意されている材料から夕飯を作り、PM7:00に片付けをしてPM8:00に隣人と軽い挨拶を交わし、PM9:00には絵日記を書いて眠る準備をして、PM9:30には夜の読書をし、PM11:00にはトナツト君を抱きしめたままにベッドで横になり、夢と現の狭間でたゆたい、やがて眠る。

そう、なるはずだった。

日常は非日常にシフトされた。日常は変化した。日常は崩壊させられた。

たった一つの、テレビ画面上に映ったテロップが、メモルの、いや、白砂の草原に住まう住人たちの未来を、つまり、PM1:00からの予定を変更させたのである。

ではその気になるテロップには、なんと書かれていたのか。どう表示されているというのか。

こんな感じだった。

『想像不能事態がこれより数分後に生じることが確定したとマザービルディングが宣言。各一軒家とそれに順ずる住民たちは十分なる警戒をされたし』

メメルは口に含んでいた紅茶を吹き出るのではないかと思ったが、吹き出なかった。

ピクリとも動いていなかったシロマルが、飛び跳ねるように痙攣してから、寝っ転がった体勢のままに叫んだ。

『やばいやばいやばい。君はとりあえず貯蔵庫にあるヘルメットでも被るんだ。何が起こるかまったくの予測不可能。世界が変貌する可能性だってあるよ。やばいやばいやばい』

メメルは、一軒家がこんなに慌てているのを始めて見たから、より不安を募らせたが、案外言いたいことが何か口から出ることはなく、ただひたすらに、呆然とした気持ちだった。

走る

赤ちゃん服のトナカイ人形を抱きかかえながら、ヘルメットを被った少女が、街の道路を走っている。PM1:30。普段ならば昼ごはんを食べ終えて食器を片付けようかなという気持ちになっっているはずなのに、メメルは車の走るとは滅多に無い道路をひた向きに進んでいる。

避難指定場所に向っていた。一軒家に順ずる人々は全て、一番近くの避難指定場所にできるだけの尽力で向かうことと、マザービルディングの意志が一軒家に伝えられた。一軒家から人々に情報は伝達され、人々は訳のわからないままに、しかし行動に移るほか無い。「なんで…こんなことに…はあ…なる…なる…はあ…い…や…だ…なあ…」

少女のやる気を削ぐためであるかのように、左右を大人たちが次々に通り過ぎていく。体力は既に失われていて、足が上手く持ち上がらないから何度も転びそうになる。その少女の姿は随分と痛々しいものであったが、他の大人たちは急ぎ足で、前だけを見て進んでいくから彼女に目をやる者自体が少ない。

『気をつけて進むんだ。転ばないようにね。焦っても、ろくなことにならないよ』

既に少女が狼狽してしまっているのを見てトナツト君が慎重になるよう指示を出した。だがそんな言葉はほとんど彼女の耳に入っていなかったのは、すこし意識が朦朧としていたからである。

「あっ！」「つまずいて、転んだ。

『ほら！ 言わんこっちゃない！』

「うっ…」ひざを擦り剥き、転んだ拍子にトナツト君を道路に転がしてしまう。

『早く拾って！ 人間の足裏で踏まれるなんて勘弁してくれよ！』
「わかってるよ…」しかしメメルはつまずいて転んでしまった体を

起こそうとする途中で、細い眉をぴりつと歪ませってしまった。というのも、痛み。足を捻挫していた。

「う、動けない…。い、痛い！」

『ええーっ』

外は藍色で薄暗い。頼りになるのは街灯と一軒家のわずかな発光となれば、転んでいる小さな女の子とそれよりも小っこい人形に気が付く大人など少数であり、時たまそれに気が付く大人がいてもほとんど目の前になってようやくその存在に気が付くのだから焦って避けるという即物的な反応をしてくれる程度であり、助けの手を差し伸べたりなどの余裕のあることをしてくれる人というのはいない。人形のトナツト君に至っては顔面とか腹とか手足とか躊躇無く踏まれたりするのだからまったくもって辛いもので、暗がりの中でどんどん薄汚れて泥まみれにされていくのである。

「うっ…」「うっ…」

こんな時に足を捻挫してしまったという悲しみと情けなさがゴニゾンしている心中のままに少女は藍色の空をふと見上げる。ほんのりと明るい程度の地上から眺める空はいつもと変わらず黒々としていて、空のてっぺんにいつももある亀裂だけが明るい。雨が降りそうにギザギザしている。

視線を下げてみれば様々な形をしているが白で統一されている街並が広がっていて、白い薄明かりが左右に立ち並んでいるのが何処までも続いている。そこに住んでいる人間が全員一斉に飛び出してきたせいで、普段は人っ子一人通らないほどに閑散としている道路が、いまや足音で騒がしい。

メルは空と街並を交互に見やりながら思う。

なんでみんな、こんな哀れに足を捻挫している少女を放って通り過ぎていくんでっしやる？

悲しみと情けなさにくわえて怒りが湧いてきて、そのトリオがふつつつと心中で煮立ってきた少女は、腕の力だけでトナツト君のところ近づいてそれを抱きかかえようとした。だがその途中で、

「あああ、ごめんごめんご」などと軽い調子の声音で誰かに背中を踏んづけられた上で、その踏んづけた男もそれによって体勢を崩したらしく、ご丁寧にとナット君のことを蹴っ飛ばし、ぼーん、とメルとの距離をだいぶ離してくれた。そんな邪魔をしておきながら男は反省する素振りを見せず、「ごめんごめんご」と謝罪とは思えない、むしろ小馬鹿にしてそんな言葉を残して、闇へと消えていった。

闇の中に引きずり込まれるようにして消えていった男の後姿を眺めながら、メルはどんな気持ちだったかと言えば、悲、情、怒のトリオの中で、怒、の分野を爆発させれば活力も湧いてきただろうが、彼女は悲しみの感情を増幅させてしまった。

つまり、泣いてしまったのである。ぼろぼろと、顔を真っ赤にしてぐしゃぐしゃになり、亀裂を見上げたり街並を見やったり涙を拭いたりしながら悲しみに打ちひしがれたのである。

泣いてるばかりでも仕方無いので腕を使ってトナット君人形のあの方へ近づいていこうとはするが、いかんせんトナット君は、ぼーん、と蹴り飛ばされたので近づいても近づいても一向に距離が縮まらないように、少なくとも少女自身には思えた。実際、少女の小さな体が腕だけで前に進んでいるのだから、そういうことにもなる。

さっきの衝撃のせいかわり金壊れたらしいヘルメットがずり落ちてきて、視界をさえぎるのがうっとおしい。だが腕は前進するのに使っているから、ヘルメットの位置を正しく戻す気分にもならない。

乳酸が腕に溜まってきているせいで、辛く、もう前進するのを止めたいけれど、それも悔しい。

さっきの憎らしい男の、「ごめんごめんご」が頭の中で何度も反響する。悔し涙みたいなのが流れてくる。

だけど腕を懸命に動かすことをやめなかった。苦しくはあったが、それをやめて地面に這いつくばることになるのが悔しかったからである。

『がんばれー。がんばるんだーメメル』

「や、…や…かま…しい…」

すでにヘルメットは完全にずれ落ちてしまっているから、前が見えない。すごく自分が痛々しい格好になっているとわかるから、もはや悲、情、怒、恥の四つの感情がカルテットしている。だがそれでも彼女は諦めなかった。遂に、腕の力を振り絞ることで、トナツト君を両手で拾い上げ、ぎゅうと二度と放すことがないように思えるほどに力強く抱きしめた。

と同時に力尽きるかのようにして道路に寝転んだ。

『お、おいおい。こんな所で倒れてたらまた踏まれちゃうよ!？』

避難場所に向わなきゃ…』

「もうだめ」

『ふやけてる場合じゃない！ 今に踏み潰されるぞ。君のちっちゃな身体なんてぺちゃんこにされるぞ…』

トナツト君がやかましく喚いたのは、メメルがここで気を失えば身体を踏まれて骨を折るなどする可能性が高いことを心配したからだが、彼女自身はそれを考える体力さえもう残っていない。トナツト君は目を瞑りたい気持ちになったが、それは自分とこれまで共に過ごしてきた少女が見るも無残に大人たちに踏み潰されていく様を見るのが嫌だからだった。

『マ、マザービルディングよ…！ こ、この子をお守りください…』

神頼みのようなことを呟きはじめてトナツト君。そうするしかない状況に陥っているということだ。メメルは前に進むのに夢中な誰かによって幼い身体を踏み潰されて、朽ち果ててしまうに違いないが、祈ることしか出来ることは無いではないかと…。

だが、案外なことに、メメルが誰かに骨を折られて生々しい音を鳴らす瞬間は、実に以外なことに、訪れなかった。トナツト君は長らく祈り続けていたが、実際には祈りなどあまり効果無いんだろうなと思っていた彼だけに、何ゆえに暗い中で道路で寝そべっている

彼女が踏まれないのか、その理由がわからなくて疑問符が浮かんだ？と。

トナツト君は抱きしめられて上手く動けない自分の身体をえっちらおっちらさせて周囲の様子をうかがってみようとした。だが周囲の様子をうかがう前に、すぐ目前にあったコンクリートが遠ざかり、街灯がて近くなった。

つまり、誰かにメメルごと宙に持ち上げられたのである。

『なんだこりゃ、誰だ、何様だ、誘拐ですか、危ない人ですか、正体を明かせ正体を』

己の混乱を率直にあらわしているトナツト君の大声がやけに夜空に響いた。トナツト君自身の耳にも、自分の大声がよく響いた。(あ、祈るんじゃなくて絶叫してれば、大人たちもメメルに気が付いたのか)と今更なことを考えながら、メメルごと自分を持ち上げた人の姿を確認した。その人物の顔は、じゃがいもみみたいな輪郭をしていて、それは何処かで見覚えがあったので？が深まる。

『うーん。どちらさんでしたっけ？ ジャガイモさんなんてストリートな御名前ってことはないですよ。うーん、僕はマヨネーズをつけてじゃがいもを食べるのはそれなりにおいしいと思うけど、じゃがいもさんに助けられるのは何だかなあ』

トナツト君がこんな失礼極まり無いことを尋ねる前に、その人物の顔は街灯に一瞬照らされた。で、一度見れば十分誰だったかトナツト君にもわかった。というのは、毎日見かける人物の顔だったから、わずかな明かりでも判別が可能だったのである。

トナツト君はあんまり良い気持ちにならなかった。というのも、街灯に照らされたその人物が、あんまり好きな人じゃなかったからだ。

『案外親切なんですよ。ただの嫌味なババアかと思ってましたが、案外って感じですよ。普段嫌味だけに何だかビックリですけど、それでポイント増しとかそういうことは無いですよ、残念なことに』
「やかましい。黙っとけ」

ジャガイモのような輪郭をした人は不機嫌そうな声音をしているが、何もそれはいつものことだからトナツト君には気にならない。

だが別のことは気になった。丁度良いタイミングでこの人が現れたというのは、偶然としてありえるだろうかということが、気になった。

きつと違うのだろうか、と想像したとき、メメルがこんなに衰弱するまで手を貸さなかったジャガイモに対して嫌悪が湧いた。

しかしその嫌悪は、実際に今助けの手を差し伸ばしてもらっていることを考えれば沈静化するわずかな嫌悪だったりもする。

そしてトナツト君は、ジャガイモに似ている輪郭と、死んだようにして眠りこけているメモルの顔を交互に見比べて、ふと気が付く（メメルが起きた時は面倒なことになりそうだな。こんな時だから口論なんてして欲しくないんだけどなマジで）

人形の彼は心の中でため息をついた。

選ばれた

トナツト君は指示を待っている。

意識を取り戻したメモルの両腕で抱きしめられながら、ジャガイモがこんな時だというのに口を閉じず様々に言いたいことを言っているのを聞きながら、彼はマザービルディングからの通信が頭に入ってくるのを今か今かと待っている。待ち詫びているのだ。

「私の住んでる手袋の家はね、あれはね、もーほんとに最悪な造りなわけよ。どう最悪かっていうとね、まあやっぱり建物の良し悪しを決めるのはその住心地よね。常に人にとって住みやすい温度、湿度を保ったり、なかなか欠陥が少なくて頑丈だったり、害虫が発生したりして背筋が寒くなるような思いをさせられなかったりするのが、良い住心地の居住空間という奴よ。だけど私に与えられるあの一軒家。あれ、最悪よ。住心地という点に関してのあれの点数はね、十点満点中でいうなら、言っちゃうとね、あれは二点よ、二点。なんであれが二点になるのかっていうとね、それには様々な理由があるんだけどね、例えばぶつちやけるけどね、あれ、構造がまずおかしいのよ。おそらく設計段階からまず間違った方向をむいていたと私は思うわよね。何故そう思うかと言うとね、あの一軒家はね、見ればわかることだけど手袋の形してるでしょあれ。え、つまんないからもう話すの止めてくれって？ いや、聞いてよ。でね、えーと、なんだっけ、つまり私のもつとも言いたいあの家の悪い所はね、それは五本の指に分かれてるのがすごくうっとおしくていちいち行ったり来たりするのがマジ面倒くさくてやってられないってことなのよ、わかる？ わかるわけないかあ、テンガロンハットは五本に指が分かれてるなんてことはないものねえ。私は常々あなたの建物に住みたいなあと思っていろいろわよ。まあお人形が喋るのはだいぶうっとおしいから勘弁して欲しいけどね。なんでそれ、喋るの？ めっずらしいわよねえ、世界七不思議よ、学校の怪談よ、おほ

ほ、意味わかんないけど。で、なんだっけ、あ、そうそう、あの五本の指ね、何故か知らないけどジグザグになってるのよ通路の途中が。上下に。どういうことかというよね、指の先端にいくのに梯子を上り下りしなくちゃいけないのよ。それだけで随分と良い運動になるわよマジほんとにそうなんだけどでもおかしくない？ だって家よ家自宅なのよあれは。なんでその部屋の行き来をする時に付してちょっと疲れちゃう運動をしなくちゃいけないわけなのか理解が心底からできない。ああ、嫌になっちゃうわだめになっちゃうわもー、あー、お菓子食べよ」

ジャガイモは右手を勢いよくポケットの中に突っ込むとその中でもぞもぞと手を動かした。街灯しか明かりが無い薄暗闇の中でも、激しくもぞもぞと動かしているせいかポケットの外側が光と影の交錯をしているのが、メメルとトナット君の両方の視界から見取れた。やがてジャガイモはポケットの内側から右手を出すと、その右の手の平に黒くて丸い飴玉みたいなものを乗せていて、何故かジャガイモは手の平の上でそれをコロコロと転がして遊んでから、口の中に放り投げる。そして、

「うんまいよ、これ」

と誰も聞いてもないのに言った。薄暗い中でもわかるくらいにハッキリとした笑顔を浮かべながら言うのが、なんだか妙に気味が悪いジャガイモだ、と、トナット君は心の中で思ったが口には出さな

いでおこうとも思った。だけれども、
「気持ち悪いほどに笑顔ですね。あと、話、いつも通りつまんなかったです」

とメメルが率直に相手に伝えた。ジャガイモは真顔に戻った。

ああ何回こんなやり取りを繰り返せばこいつらは気が済むんだ、とトナット君はうんざりしながら周囲を見渡す。

そこには不安背負ってますみたいな顔をした人間だとか、無理に明るく振舞っているのですと物語っているような人間だとか、焦って周囲の人間と何かしらを相談している人間だとか様々にあったが、

全て人間であり、その場所は、丘に人が生えたみたい具合に人だらけだった。

公園でもあるそこは、なだらかな山のような形をしている丘陵で、普段は閑散としているのだがいまは多くの人がごった返している。

避難指定場所に集まった人々の多くは、突然に一日の予定を変更させられたことよって動揺を隠せずにいるが、ある程度状況を把握しているトナツト君は周囲と比べれば冷静でいた。メメルにも伝えていないことだが、このような緊急事態が起きることは以前から予想されていたことだったから、人間と比べて、一軒家である彼は事態を大体把握していたというわけだ。

一軒家たちは状況について把握しているが、人間は誰一人状況をわかっていない。トナツト君のように喋る一軒家は他にあまりいないし、また、その数少ない喋る一軒家たちも人間に現在の状況について教えないようにとマザービルディングから忠告をされている。一軒家たちがその忠告を破ることは無い。建物たちは統制されていて、統制を守らぬ建物は破棄されるのだから。

（そろそろだろうか…選ばれるか、選ばれぬか…まさしく運命の別れ道…だ…）

トナツト君は抱きしめられているせいで上手く動けないが、それでも頭をわずかに動かし、天にて唯一輝いている、亀裂、を眺める。今にも雨が降りそうなほどにギザギザしているが、だが避難がかかったということは雨が降るわけでは無い。間違いなく、藍色の世界はこれより大きく変貌する。そして、場合によっては……。

「あんたも食べなさいよこれ。え、飴ならもう食べた？ ああ、違う違うこれ飴じゃなくてグミよグミ。丸い形をしたグミ。丸いからって飴玉だって決め付けるのはちょっと安直すぎるわよー。まったくこれだから子供はねえー、あ、味はね、チョコレート味よ。案外これがおいしいのよー。なんつうか意外とグミとチョコって合ってるね、ほんのりとした味わいって感じよね。ビターって奴かな、ビター。ビターチョコレートグミってことね。ほら、あげるから、食

べなさいよ、ほら、ほらほら、ほらほらほらほらほらほら」

「いらぬですよ」

「あらー可愛くない！　そういう子はダメよー無理無理。ダメダメ。何がダメって全般的にダメ！」

「ただだけ否定するんですか。てか、ポケットにグミ入れとくとか汚いし」

「あら、ポケットの中でちゃんと袋に入ってるのよ。むき出しで入ってるわけではないじゃない。ほら、食べなさいって、おいしいから」

「いりませんって。しつこいなあ」

「あらー可愛くない！　ダメダメそんな子！　可愛げがまったくないってのはこれダメなんだからあ！」

「めんどくさいにもほどがあります。死ね」

この二人の会話はいつも内容が無いような気がする…とトナツト君は脳裏でそう呟いてから、自分の今言った呟きがダシヤレっぽくなってるのに気が付いた。でもまあ、だからどうしたというわけでもないし、今はそれに意識を傾けていられる時でも無かった。

トナツト君は再び亀裂に眼をやる。亀裂のギザギザがより激しく変わっていけば、もうすぐ、世界の変質がはじまる。藍色の空が砕け、閉じられているこの空間が地球という星の表面にさらされることになる…。そういう変化が訪れることが、トナツト君にとっては胸の鼓動がおさまらない要因になるのには理由があるが、例えばその一つとして、その瞬間に己の命の有無が決定されるということがあった。彼だけではない。この避難指定場所にいる全ての人間と、意志のある一軒家の命が、もうすぐ、判別される……。

トナツト君はそのことを想像すると、自らの意識の内奥がぶると底冷えした。彼が眼を亀裂から放して丘陵を眺めれば、数え切れない程の人間が屯っているというのに、今からそのほとんどが息絶えることが確定していて、自らもその死ぬ側になり得る。そのことを想像すると穏やかではいられない。

だがその事実がもうすぐ訪れる事をメメルに告げることも出来な

い、し、トナツト君自身、このことを少女に話すつもりはない。何故かといえば二つ理由があり、それは、マザービルディングに忠告をされているということと、トナツト君としてもまだ幼い少女に自分が死ぬか生きるかわからないという不安を与えるのは忍びないということだ。

トナツト君はもう一度亀裂を見上げた。するとギザギザが先ほどよりもギザギザしていることがわかり、緊張した。あまり焦っても仕方が無いと思い、眼を閉じ、メメルとジャガイモの掛け合いに耳を澄ますことにする。

「鼻毛出てますよ」

「えっ、うそつかないですよ。こんな暗い中で鼻毛なんて見えないでしょうが」

「いや、出てますよすごく。二、三本くらい束になってるから目立つんです」

「出てない出てない。つつか、普通面と向ってそういうこと言う？普通言わないでしょ。失礼にも程があるっての。つつか、出てないし」

「汚いから隠してください。鼻を指でおさえるとかそういうことしてください」

「しないわよ！ あんた、あんまり私のこと馬鹿にしていると、マジで怒るわよ。ていうか今の時点でもう結構怒り入っちゃってるからね、言っとくけど、マジで。あー、もう、気になって話に集中できなくなってきたわ。鼻毛なんて最悪よ。全部脱毛したいわこんな毛」

「埃がすばすば入るようになったちやいますよ」

「知ってるわよそんなの！ 今のは願望じゃなくて嘆息よ！ もしくは冗談よ！ 冗談が通じない餓鬼！ 死ね！」

ジャガイモは案外怒っているらしく、なんか地団駄を踏んでるみたいなのを噴出したせいか、先ほどよりも鼻毛の数が増えて六本くらい束になってはみ出ているのが見苦しい。メメルはしばらくジャ

ガイモの顔面をじーっと穴が開く程見つめてから後、ハツ、と嘲笑いを浮べて丘に腰を下ろした。

ジャガイモはそんな彼女に対して何か言いたそうだったが、言葉が思いつかないのだろう、鼻息がどんどん荒くなっているのがわかる程に顔がふるふる震えている。そのせいで鼻毛がどんどん出ているが、十本くらいもはや飛び出していた。

二人の会話はなんだかんだ、そこで一旦途絶えた。二人の耳に、丘陵ですることもなしに佇む他無い人々のさまざま意見やさまざま不安が入り込んでくるようになる。多くの人々は、一軒家から避難指定場所に向かうよう指示を出されたただけだから、全く事態が掴めていない。地に足が付かないで放置されている今の状況では、様々な憶測が人々の口からついて出るのは当然で、その多くは事情をわかっているトナツト君から見れば見当外れのものばかりで、たとえばそれは、我々が『仕事』をしっかりとこなしているかをチェックするために一軒家から追い出されたのではないかと、マザービルディングからのサプライズイベントで一軒家に帰れば目に目映いプレゼントが用意されているのではないかと、一軒家の改装を行うのではないかという、どちらかと言えば呑気な意見だった。が、それは人々にとっては強がりと言っているみたいの部分もあって、想像不能事態などという宣言がされたのだから心底では皆が不安であり生易しい事態ではないということはわかっていたのである。しかし、その不安を口にして場が余計に不安に包まれるのを人々は意識的に、或いは無意識的に避けているようだった。

そしてそのまま時が流れた。

地に足が付かない宙ぶらりん状態で一時間ほど放置された人々は、疲労のせいだろう、丘陵に腰を下ろす者が増え、また全体的に口数も減ってしまい、丘陵はかなり大勢の人々がいるというのに沈黙に近いような状態になることさえあった。メメルはトナツト君を強く抱きしめたままに眼を瞑っており、ジャガイモは鼻毛と格闘し続けて躍起になっていた。

「あ、抜けた！　ようやく抜けたわこれ」ジャガイモは歓喜の声を上げる。

「なにがですか」メメルは俯いている顔を上げてから、うっとおしそくに呟く。

「鼻毛が五本くらいずぼつと」ジャガイモの指先に、黒い毛が数本。ジャガイモは満面の微笑みをたたえながら鼻毛をメメルにみせつけてくる。一時間野外で座りっぱなしのメメルからすれば不機嫌を助長させる要因にしかならない。鼻毛を見せられるだけでもうっとおしいのに、さらに加えて満面の微笑みでにたにたしながら顔を近づけてくるのだから最悪としか言い様が無いので、メメルは再び顔を俯かせた。シカトしようと思ったのだ。

顔を俯かせたメメルは自分の膝に顔をうずめて何も見ないようにする。しかし耳は塞ぐことが出来ない。ジャガイモの煩わしい声が耳に入ってくるのが嫌で、何か文句の一つでも言って黙らせたい気分になる。

「いい加減にしる汚い黙れ眠れ」

と、罵倒してスッキリしたくらい苛立っていて、実際にそれを言おうと思って俯かせていた顔を持ち上げ、メメルは口を開こうとする。

だが、

「い……………！」

いい加減にしろと言おうとしたが目の前の光景を見て彼女の口は固まった。口だけでなく表情も固まり、

「え、え、え、え、え、え、え、え」と魂を引き抜かれてしまったかのように呆然とした。

「トナツト君…これ……」と慌てて抱いている赤ちゃんトナカイ人形に話し掛けるが、『うん』という至極簡単な答えしか返ってこない。しかもやけに落ち着いている声音だったから、自然とトナツト君はこの事態が発生するのをわかっていたのだとメメルにも想像が付いた。だがそれに対して何か文句を言える余裕も無い。なぜなら

メモルの目の前で、全てが動かなくなっていた。今までうるさかったジャガイモや、その他大勢の人間たち全てが停止していた。

プレーヤーか何かの停止ボタンでも押されてしまったのだと錯覚を起こす光景だった。見るに耐えない阿呆な表情で停止してしまっているジャガイモはわずかに白目を剥いていた。欠伸をする寸前だったのかもしれない。

メメルはジャガイモのごつごつとしている顔に触ってみたり、肩の辺りを小突いてみたりしたが何の反応も示さない。眼球に指を突っ込んでみようかなとも思いついたが、さすがに危なさそうなので止めた。

「なんなの、これ」

言いながらメメルは立ち上がって丘陵を見渡した。

動かない人間たち全てが停止してしまつた空間では衣が擦れる音さえも途絶えていて、人がわずかに動く様子も無い。完全にその場で固定されている人の群れは、丘陵に置かれていた石像の群れのようであった。まったく音らしい音がしないので、メモルの耳にキーンと耳鳴りが響く。

「写真の中に入ってるみたい……」

『あるいは、絵画の中に入り込んだみたいだね』

「これはなんなの？　なんで人が」

そう尋ねたメモルの言葉にトナツト君は返事をしなかった。

メメルは黙っていないで何か答えるように促そうとしたが、その彼女が口を開くのを遮るタイミングで、彼女の頬に一滴水がしたたった。メメルは雨だと気が付き、上空を見上げ、亀裂を見る。

亀裂は、普段の二倍近くギザギザが増えていて、大きく見え、さらに普段と違って真っ赤にギラギラと輝いていた。亀裂が真っ赤に輝いている様なのを見るのが初めてだったメメルは、恐怖に駆られた声を発してから、その場で硬直した。だがその硬直は完全なる硬直ではなく、呼吸もしているメモルの肉体はうっすらと揺れる。

『時は来た。君は選ばれた少数となって生き延びている。固まっ

おらず、そしてこの雨で溶かされていくこともない。ほら、向こうからテンガロンハットが飛んできてるでしょ？ あれは溶けない。君も溶けない。選ばれたんだよ、僕ら』

「なにそれ……。……………うわ、ほんとに飛んできた」

藍色の空に飛んでいるうつつすらとした影は事前に言われていなければUFOが間近で飛んでいると錯覚していたかもしれない。メメルがこれまで生活してきたテンガロンハット型一軒家が、丘陵の真上にまでぶかぶかと浮いてきた。

雨は強く降り始める。メメルとトナツト君は頭から降水を被り、そして石像になっている人々にも降り注ぐ。平等の量が、同じ勢いで。だが、その平等の量がもたらす結果は、石像たちとメメルでは全く違う。

「匂いが無い。普段の硫黄の匂いがする雨じゃない」メメルには普段のように雨の匂いで苦しめられる事すらなかった。雨は無臭。これもはじめてのことだからメメルは驚くが、しかし、雨が降ってくる頭上から眼を離し前を見ればさらに驚くことになり、その衝撃のあまりにうずくまり、膝をついた。

目の前で白目を剥いていたジャガイモの全身が、どろどろに溶けている。髪の毛がごそりと抜け落ち頭皮がむき出しとなったが、その頭皮もすぐに溶けて頭蓋骨が出てくる。頭蓋骨も雨が触れる度に色を薄め、やがて赤の色を帯びたかと思えば、血を混じらせた脳味噌を露出させた。一度露出した脳味噌はアツという間に雨に溶かされて崩れ落ちていく。眼球がこぼれ落ち、顔面の皮膚が紙がはがれるかのようにペロンと剥けると、人体模型のように肉が目立つようになる。ジャガイモは見るも無残な有様となり果て、最後には骨だけとなり、その骨もすぐに雨に押し潰され、跡形も無くなって消えた。液体となって、どろどろと丘陵の地面に染みこんでいき、鼻をつまみたくなる異臭をこれでもかと、液体が染みこんだ後も、その匂いは辺りで漂っていた。メメルから見える視界の全ての人間が、そのようにグロテスクな有様で溶けていた。彼女自身は雨を浴びて

いるのになんともなかった。

メメルはずぶ濡れになった体で、その様をずっと眺めていたが、やがて堰を切るようにして泣きじゃくった。大声で喚くような泣き方とは違う、必死に堪えるような泣き方であったが、頭を両手で抱え込んで泣いている彼女は心の中で激しい恐怖みたいなものに囚われた。その恐怖が具体的にどのような物なのか彼女自身にはわからない、パニックに近い症状だった。

あまりの生臭さに吐き気をもよおし、実際に吐いてしまい、液状化した人間で汚れた丘陵をさらに汚していく。それは人間だったものに嘔吐を浴びせているとも考えられる行為だったので、彼女はなるべく吐き気に耐えようとすが、むしろ耐えるほど激しい嘔吐が後に訪れるので、遂にはメメルは吐きたいだけ吐ききってしまう。

『メメル』

「……………」

心配しているトナット君に何も答えることが出来ない程に憔悴しきった彼女は、吐けるものを全て吐ききった後にもしばらくえづき続けていたが、そんな彼女の前にテングロンハットの一軒家が着陸した。まるで宇宙船が地上に降り立つがごとく、人が溶け込んだ地面の上に着陸。それが何を意味しているのかを考える気力も、またそれをトナット君に尋ねる気力さえも、疲労困憊のメメルにはもはや残っておらず、ひたすらゼエハアと呼吸が荒い。

トナット君はそんな彼女を急かした。彼は何かに焦っている。

『もう、行くよ。何度も言うけど、君は選ばれているんだ。今は何も考えなくてもいいから、立ち上がって歩くんだけ。そして家の扉を開けて、自分の部屋の椅子に座って時を待つんだ。もう時間はあまり無い。もうすぐここは地表に出る。……………見な、空の亀裂は裂ける寸前だろ？』

そう切迫されても動くことの無かったメメルだが、それから四、五分もした時に何か周囲をきよるきよると見回すようになり、その瞳は脅えていた。明らかに精神が正常な状態の人の様子ではなく、

周囲を慌てて見回す様は何かに囲まれていると錯覚している感じであった。が、それが結果として幸いとなる。何かに囲まれているメメルは野外にいるのは危険と察知したのである。ふらついた足取りではあったが、彼女の精一杯と思える速度で、テンガロンハットの我が家へと駆け込んだのだ。

家に入ってから落ち着くことはなく、しばらくの間玄関でうずくまって頭を抱え込んでしまったが、野外よりは心落ち着くのである。やがて立ち上がり意識も正常を取り戻した様子になった。手足がわずかに震えてはいたし、頬も多少やつれてしまっただけだが、「わ、私の部屋の、い、椅子に座れば、い、いいんだよね？」

『そうだ。しっかりね、メメル』

「う、ん」小さく頷く。

酔っ払いのようにふらふらしながら彼女は歩く。手すりに捕まりながら階段を登り、途中吐きそうになったのか立ち止まったりもしながら、自らの部屋によやく辿り着くと、あまり座る機会のない木製の椅子に「こ、これに座ればいいんだよ、ね？」とトナツト君に確認してから座った。

メメルはこれに座った瞬間に、何かまた凄まじいことが起きるかどドキドキしていた。心臓を高鳴らせながら椅子に座った。

だが、何も特別なことは起きなかった。

静まり返っている空白の時間が、一分間ほど通り過ぎていく。メメルの耳にふたたびキーンという耳鳴りが響き、そして彼女はさっきのグロテスクな光景を頭に過ぎらせてふたたび気持ち悪くなつて嗚咽しそうになる。彼女は口元を手で抑えた。

メメルが口元を手で抑えている頃に、今まで黙っていたトナツト君が突然口を開いた。

『耳を澄ますんだメメル。聞こえるだろう？ マザービルディングの音が』

「…マ、マザービルディングの、声……！？」

マザービルディングの音が聞こえる。それはメメルにとってにわ

かに信じがたいことだった。というか街の住人の誰が聞いても驚くような話であった。なぜならマザービルディングというのは巨大な建築物システムの大元である機械であって、喋るような生き物ではないと認識されていたからである。

建物の中を人が動き回ることによって建物はエネルギーを供給される。供給されたエネルギーはマザービルディングに送られ、マザービルディングはmalia動力を利用してそのエネルギーを増幅させ様々な物質を生産する。生産された物質は各建築物に送られ、そして人に行き着く。人はその生産物を摂取した後、ふたたび建築物内で活動をする。これによって半永久的に人と建物は生活を成り立たせていく。それが建築物システム。

システムの大元であるマザービルディングがたかが人間の一人であるメメルに声を掛けてくる。そしてその声をメメルは聞き取らなくてはならない。何を言い出すか全く予想もつかない。

メメルは物凄く緊張して、胃がひりひりしてしまい、口元とお腹の両方を手でおさえながらマザービルディングの声が聞こえて来るのを待った。

耳鳴りのせいか、上手く聞き取れないが、かすかに声はメモルの耳に入ってくる。だがその声は本当に小さくて、まるで妖精が囁いているかのごとくかすかであったから、メメルは意識をかなり集中しなければならなかった。調子も万全でないのに。だが、やがて聞き取ることが出来た。そしてその内容は、要約するところいうことだった。

「あなたは選ばれた数人の内の一人です。選ばれた数人には何をしてもらうかという、我らを地表に引張り出した外敵の駆除をしてもらうことになります。外敵の正体が何であるかはまだハッキリとはしませんが、情報が入り次第それは追って連絡します。とにかく選ばれた人であるあなた方には、Nils Olavに乗り込んで上で、ただいまより周囲の探索をしてもらいます。そして外敵も思わしき者を発見次第、Nils Olavの力を利用して、これ

を駆除してもらいます』

ということだった。

伝えたいことだけ伝えるとマザービルディングは何も喋らなくなり、取り残されたメメルは呆然としながらぼやいた。

「…………… Nils Olav? 駆除? 選ばれた人? 地表?」
何もわからない少女であるメメルにとって、あまりにも情報が多すぎた。彼女は混乱し、うう、と苦しそうに呻いてからトナツト君の頭を小突く。

「ねえ、どうすればいいの」

トナツト君は呆気なく答えてみせる。

『何って…。 Nils Olavに君はもう乗り込んでいるじゃないか』

「え」

メメルは驚いてトナツト君を持ち上げて、自分と顔を向き合わせさせた。いつもと変わらない赤ちゃん服のトナカイ人形がそこにあつて、おしゃぶりをしている。だけでもはやメメルにはそれが赤ちゃんには見えない。何を考えているのか掴めない奇妙な存在と見えた。『テンガロンハット型の建築物というのはカモフラージュ。選ばれた建物はトランスフォームを許されて姿形を本来のものへと戻す。黒騎士を象徴とした格好いい姿の人型機械 Nils Olavとして空に飛び立ち、我らの障害を駆除するのさ』

地震かと思わしき揺れが建物内に生じた。凄まじい震動ではないので物が倒れたりはないので、慌ててメメルは周囲をうかがう。

そして窓から外を見ると、白く発光している建築物が、何時の間にやら、遙か下方に見える。

あつ、と驚いている間も無い、空を見上げれば真っ赤な亀裂がぶしゃあと裂けた。

裂けた亀裂は、藍色の空全体に広がっていき、結果として空の全てをびりびりと裂いてみせる。

その裂けた後に新たな景色が広がった。それは蒼空。なぜか緑色

の雪が降っている、蒼の空であった。

変化が生じたのは外の景色だけではない。メモルの部屋はゆつくりと姿形を変えていき、小さく小さく纏まっていつて一つのコックピットに変わった。メメルは座席に座らされ、その座った位置から見渡せば見える、開放感のある景色をしばらく眺めた。「空を、飛んでいるの？」メメルは目の前にいるトナツト君に尋ねる。トナツト君はメモルの座席のすぐ前にある窪みにぴったりとおさまっている。『そう。君にこの格好良いNils Olavの姿を見せられないのは残念だけど、中から見渡せる外の世界の景色も、素晴らしいものだよね』トナツト君は何か感慨深そうに言う。メメルも、今までの藍色の空とは遙かに違う、開放感あるあまりにも眩しい景色の美しさには、しばし薄目で見ていたが、感激を隠すことはできなかった。

「すごいねこれ。緑色の雪なんて降るんだね」

それはコートマシンが撒き散らした緑の粒子の残骸であったが、そのことを知らないメメルは地表はそういうものが降るのだと認識した。そして、地表というのは一体なんなのだろう、と考えてから下方を見、そして今まで自分が住んでいた街が、何時の間にか真っ黒に染まっていることも知る。

何もかもが新鮮に見えた。突然すぎる出来事の連続で頭が混乱するが、蒼空と緑の雪と眩い光に包まれて、メメルは先ほどまでひどく落ち込んでいたことも忘れた。

だが勿論、メメルは景色を楽しませてもらうためにNils Olavに乗り込まされたわけではないのだから、水を差すようではあったが、トナツト君は彼女のすべきことを伝える。

『さあ、選ばれた人であり生き残った数人でもある君は、敵を見つけなくちゃいけない。僕達を地表という空間に引っ張り出した悪を、駆除する必要があるのさ。あまり不安がる必要はない。操縦の仕方だって僕がサポートするし、それにNils Olavは一機じゃない。ほら、メメル。周囲を見渡せば、Nils Olavが見え

るだろ?」

トナツト君がそう言うのでメメルは座席から他のNils Olavを探した。確かに、眼を凝らせば、蒼空の中に浮かんでいる黒点のようなものが、探せば探すほどたくさん見えた。

「そういう見え辛いところに指をタッチさせれば、もっと良く見えるようになるよ」

言われた通りにメメルが黒点に指を当ててみると、三百六十度ディスプレイがそれに反応して黒点をさらに大きく表示してくれた。それのおかげで、黒点の正体が人の形をしている機械だということがわかるようになったので、もつと細かく見たいと思ったメメルは、もう一度ディスプレイに指を当てる。すると、今度は完全に姿形が見えるようになり、たしかにトナツト君の言う通りNils Olavは格好の良い機体だと知ることが出来た。

光沢のある黒が主な配色で接続部分や両眼などは赤で塗られている。全体的に何だか尖っていて、細めで、素早そうには見えたが、すごく脆そうだととれる。腰に一本の大きな刀らしきものを持っていて、左手に拳銃みたいなものを持っていた。

「へーえ」感心したかのようにメメルは微笑んでから、「乗ってる人に挨拶とかした方がいいかな」とトナツト君に尋ねる。だがトナツト君はそれを一蹴する。

「それよか敵の発見だよ。あまりもたもたしているとマザービルディングを怒らせることになるんだからさ。さあ、いくよ」

「はいよ」

Nils Olavが背面下部に取り付けられているブースターを点火させて、空を駆った。騎士号を持っている飛べない鳥の名前を付けられた人型機械は、縦横無尽、自由自在に空を闊歩し敵の探索を開始した。

わずかな時間で全てのNils Olavが統制された軍隊であるかのように並んで飛ぶようになった。実際に乗っている者が動くのではなく機体自身であるNils Olavが操縦者となるの

で、熟練の必要も無しに Nils Olav は連携して動くことができる。

計八機の黒騎士が蒼空を切り裂いて飛んでいく様は、見る者がいれば見惚れる光景であった。

いまや黒くなつた『白砂の草原』から空を見上げる者があれば、それらの者は機体の群れが見事に飛ぶ様に見惚れることになつただろう。

だが避難指定場所に向うのに遅れたことで雨を浴びなかつた者だけが残っている街では、Nils Olav の整列飛行を見た者はわずかであった。

避難をさせておいて、その避難に従つた者たちだけを溶かして消す。それに従わなかつた者たちはこれより食べ物も与えられず、どうにしろ直に餓死させられることになる。Nils Olav のパイロットとして必要な八人だけが残され、他の人間たちは切り捨てられたようなものだ。

メメルと残りの七人は、建築物システムが人間を無下に扱つたことをわかつていない。

建築物たちは、人間を自らのために利用することしか考えていない、非情な存在であった。

マザービルディング

『白砂の草原』の建築物システムの根底を支えてきたmaria動力のコアは子宮に似たような形をしているのだが、それは小型船舶を打ち抜いた砲台の真下にある、地下にて保管されていて、人の多くが消え去った今もエネルギーの変換を行っている。maria動力は人が活動するのに必要とする『活力』という奴を吸い集めてから、様々な大元になる赤の液体へとそれを変換し、胴で作られている美しい女性の像の口から常に液体を吐き出させている。吐き出された液体は貯水タンクに詰め込まれてそれからどんどん小分けされていき、食べ物、衣類、樹脂、鉱物、などなど魔法のように何にでも変わっていく。これら生産物を人々の『活力』を生み出すために利用させることで、maria動力のコアは再び『活力』を摂取できるようになるというわけだ。そしてその循環を行う事のできる施設全体をマザービルディングと人々は呼称している。

だが、街の多くの人々が溶けていなくなった今、『活力』はもはや生み出されないのだから、言ってしまうえば人々を消し去った行為は自殺行為というわけなのだから、マザービルディングは機能を停止してしまってもおかしくはないはずだった。事実、もうじき『活力』が足りなくなるところではあった。だが、マザービルディングにとってそれは計算違いというわけではない。マザービルディングは建築物システムを放棄することを前提として、人間の大量放棄、大量殺人を、行った。

マザービルディングはある目的があるからこそ多くの人々を殺害した。そして残りわずかな『活力』で、つまり希少な魔法のような何でもありの力を使うことで、マザービルディングは己を次の段階に進めようとしている。

少なくともマザービルディングにとってこれは、ステップアップのための行為であって、『活力』が失われることを悔やんだりはし

ない。また、悔やむような将来に己を向わせるつもりも無かったから、実に慎重に、いくつもの順序を念入りに組み、貯水タンクに詰め込まれている赤の液体から一つの器を創り出そうとしていた。容器。入れ物。

それはもうすぐ完成しようとしている。今まで何度も失敗を重ねた後に出来上がった試作品は他に数多くあるが、現在創り出そうとしているそれが目標の器。これを完成させてこそマザービルディングのステップはアップされるのだから、自然、慎重にもなる。妖精のようにかすかな声でマザービルディングは笑った。

うくく、と短く呻いてから、器を創り出すことに、神経をググッとそそぐ。

『活力』がついに底を尽き、胴の女性の像の口から液体が流れるのが止まった。

ぼちゃ、という雫の垂れる音だけが、その室内で響いていた。

「…一体、何に狙撃されたって言うんだ。まったくさ……」
 などと言いなながら本日二度目の沈没を体験した青年は、ぼやきながら起き上がろうとしたが、その途中で肘鉄を顎に食らって「いつてえ」と喚いた。誰の肘かというトペギーの肘で、気狂いの彼女は「あつへー。ごめんっちゃ」などと微妙な謝罪をしてから室内を歩きはじめた。ムーンウォークで。

わけがわからないので青年はペギーのことは放っておくことにして、状況を確認しようト眼をあちらこちらに動かすのだが、すると小窓から蒼空ではなく黄色い砂が見えていることがわかり、また多くの乗組員が衝撃のせいで負傷していることもわかった。苦しそうに呻く声と、血の匂いが、広いとは言えない室内で、充満していた。衝撃に対してシートは役割を果たせなかったのだろうか、多くの人がリノリウムの床に投げ出されているのだから、やはりシートは座り心地が悪い性能が悪いの不良品だったのだ、と青年は気が付く。だが気が付いたからといってもう遅く、小型船舶は墜落したことによって機能を停止し、乗っている人々は負傷してしまっていて、自らは幸運なことに膝を軽く擦り剥いた程度。そういう現在の中で、青年はすることがたくさんあるようなのに何をすればいいのかわからないという奇妙な感覚に囚われ、しばらくその場で立ち尽くす。そんな彼の戸惑っている背中に、変態であり医者でもある男、フルーチェから声が掛けられた。
 「お前は怪我をしていないか…。幸運な人間だな。人手が不足しているから手伝ってくれ」

青年は意識を取り戻したばかりのせいだろうか、実に気だるかった。倦怠感のようなものがあり、もう少し呆然と立ち尽くしていたという欲求が胸内を探れば確かにあった。だがフルーチェの青年に対する物言いには、当然手伝ってしかるべき、という雰囲気は滲

んでいて、そののつぺりとしている顔面に、黒く刻みこまれた皺も浮かんでいる。険しい。

そんな顔をしてるのは脅してるつもりかよ、と青年はフルーチェに対してあまり良い感情を抱かなかつたが、その後にそんな感情を抱く自分に嫌悪感も湧いた。治療が自分の担当で無いとはいえ仲間を手助けしようとしなないなどという根性は、クズじゃないかなと感じたのである。

わずかな一瞬にそういう自意識が駆け巡った後に、青年は、一度小窓に顔を向けてから、室内の様子をもう一度うかがうような仕事を。落ち着かない挙動のままに、彼は言った。

「ええ、もちろん手伝わせてもらいますよ。こういう時だから、できることをやらせてもらいますよ」成り行きに任せるような感覚で、その言葉を放った。

「そうか。では、こつちにきてくれたまえ」
フルーチェはありがたく思ったのだろうか、険しい顔つきを止めると、怪我のひどい者から順に治療を始めようとする。設備も道具も揃ってないのに怪我人を癒すことが出来るのかと青年は怪しく思うが、どうやらそれは心配には及ばないようで、応急処置が出来る程度の備品は小型船舶内に用意されていたから、止血だとかは迅速に行われた。

だが、重傷の者はどうしようもない。数人、血が溢れ出て止まらなくなっていて顔が虚ろ。海洋生物のごとく顔がふやけているようにみえた。ある男は脇腹を貫かれて血が噴出してしまったし、ある女は腕を吹き飛ばされていた。事態はそう軽いものではなく、むしろ重苦しい。フルーチェの手伝いをする事になった青年は、緊迫の事態を悟って、目薬を両眼に差したかのようにすっかり眼が冴えてしまった。そして無我夢中でフルーチェの手伝いをする状態に自然と変わり、また他の怪我をしていない者もフルーチェの手伝い、重傷な者の看病に勢を傾けるようになる。また、面倒見の良いマルーダは人を助けることに向いている人間なのだろう、率先して怪我

人を励まし、深刻な死のムードをわずかにでも減らそうと尽力していた。ちなみに、ムーンウォークをしているペギーはいまや放置された。

それから後、小型船舶内は治療する者と治療される者に二分されたが、しかし見当たらない人間というのも何人かいて、それはおそらく、青白い光に貫かれたことで生まれた穴から飛び出してしまい、砂丘に落ちてしまったのだらうと推測されたが、その人々を探索に出た者はわずかであった。砂丘の外を迂闊に歩けば、怪物に捕食される可能性が高まるからだ。

そう考えれば、船舶内で怪我人の治療にあたる方が安全だとは誰にでも理解できる。コアは怪物を寄せ付けなくする力を持っているということがフェルクルから明かされたので、乗組員は落ち着いた気持ちで船舶内に留まっていられるのだから。

よって外へと探索に出たのは、勇敢な者と、情動的な者、怪物をモノともしない者、砂丘を見て回りたいと言い出した者の、四人であった。

それは、 PAPTEGA、 HENVARE、 KIRISAME、 HAKU、 FELKULの四人であるが、怪物退治に関しては KIRISAME、 HAKU任せみたいな所がある三人は、自らを怪物の凶暴なる魔の手から逃れる術すらも持っていないが、逆に言えば KIRISAME、 HAKUの腕前をそれだけ信賴しているということでもある。彼女が超人的身体能力の持ち主であるということとは、三人とも良くわかっていて、というのは乗組員の誰かが KIRISAME、 HAKUの一騎当千を収めてある DVDをみんなに見せたからである。そういうわけで、 PAPTEGAと HENVAREは危険な場所でも KIRISAME、 HAKUを頼りにすれば進んでいけると知った。DVDの中での KIRISAMEは、全身に血液と砂塵を纏いながら全てを抹殺していて、戦車、歩兵、ヘリ、地雷、銃撃を刀一本で戦闘不能なスクラップに仕立て上げていたのだから、阿修羅。

さて、太陽が陽炎を生み出している。足場が悪い中、 PAPTEGAは日差し避け用の麦わら帽子の鍔を手に取りながら呻いている。

「しかし暑いな。蒸し風呂みたいだ」

ヘンヴァーレは苦笑した。

「まったく、ですね」

彼も自らの羽根付き帽子を深く被りなおしてから、にらむようにして太陽を見上げた。彼はしばらく太陽をにらみつけていたが、何かの拍子にその表情が緩やかなものに変わっていき、白い歯さえも見せた。パプテガがそれに気が付き、「なにか面白いことが太陽にあるのか？」と問うと、ヘンヴァーレは「いえ、面白いというかと少しもつたいぶつた調子になるので、パプテガは追求するようにして「ん？」と、ヘンヴァーレの方に顔を向けてから尋ねた。そういう風に聞かれればヘンヴァーレも答える。

「どうすればこの暑さが大したことのないように感じられるのかと思つて、太陽を観察していたんですが、ちつとも自重してくれず凄まじい熱光線を浴びせかけてくるのに嫌になるじゃないですか。そこで太陽にこちらから笑顔を振りまいてみるという作戦に出てみただんですよ。こちらが睨んでいるままじゃ太陽はもっと激しい熱光線を降りかけてきてもおかしくないと思つたんです。ですからこちらから歩み寄つてみたというわけです」

「詩人というのはそういう考え方をするのだな」

「詩人の考え方というよりは僕の考え方ですかね。パプテガさんもやってみてはどうです？」

ヘンヴァーレの誘いに、しかしパプテガは首を横に振った。

「砂丘のどこかにはぐれてしまった仲間のことを思うと、白い歯を天に向ける気分にはならないよ、悪いんだが」

申し訳無さそうに言うパプテガ。そういう風な態度を取られるのだから、ヘンヴァーレも悪い気持ちを持つたりはしない。「悪いということはありませんよ」と返事をした。

あまりに広大なる砂丘に、人の影がありはしないかと、探索を再開する。今歩いている位置はどちらかというと低めな場所で、周囲を広く見渡すことができない。だから四人は、高くなっている所を

目指していく。

数回ほど、ムカデのようなサソリのようなトカゲのようなという無茶苦茶な虫が、砂中より現れて四人に向けて毒を振りまこうとしたが、その触覚から黄土色の液体が撒かれるより早く、キリサメハクの一閃が虫を真つ二つにする。そのおかげで三人は毒を受けることもなく砂丘を探索することが出来たのだが、このように虫が頻繁に出現していることから、孤立した無力なる仲間はまだもう毒にやられてしまったのではないかと推測することには、なってしまう。

だから PAPTEGA は気落ちした心のままに、砂丘をにらみつけていて、一度、白い歯を見せようとしたかのような動きをしそうになつたが、彼の何かがそれを自重したから変な表情に落ち着く。そしてフェルクルが PAPTEGA のその表情を見て、笑いを堪えているようなしかめっ面になつた。

「苦虫でも噛み潰したのか？ PAPTEGA、変だぞ」

（頭にまち針を突き刺しているせいで被っている帽子の角度がおかしいことになっている女に変だとは言われたくない）

と PAPTEGA は思ったが口には出さず、渋茶を飲んだような表情になる。そのまま砂丘をどんどん突き進んでいき、しばらく四人は会話をしなかつた。暑さのせいで口を開くことが憚られる。

まち針の有用性

やがて高い所に辿り着いた。勾配が急で坂になってい場所を登り、その見晴らしの良い高台から蒼空と見上げ、遙か彼方まで広がっている砂丘を見下ろす。ごつごつとした岩が屹立していたり、或いは雑草のように岩が砂海からひょっこりと顔を出して今にも沈んでしまいそう。オオカミらしき獣が、二、三匹で連れ立って、岩を足場にして跳ね回っているのが左側に見えているが、右側を見れば呑気に砂海を歩いている鹿のような動物が見受けられたので、恐らくオオカミは鹿を狙っているのだろうと見当が付く。後数分、高台に立っていれば、弱肉強食の現場を目撃できるのは間違いなかった。鹿肉が、食いちぎられるのだろう。

ヘンヴァーレは、それによって繰り広げられる、刺激のかつ痛々しい光景を見逃さずにしようと 思った。砂塵のせいだからからなっている口内で生唾を転がしてから、飲み込み、肉肉肉と欲望に取り憑かれているかのように一心不乱なオオカミと、自らの危機を察知して今しがた逃げだした鹿を、交互に見やる。オオカミは岩を足場にすることで砂に足を取られないが、鹿は足場の悪さによって上手く逃げる事ができていない。鹿が狩られるのは時間の問題。それは自然の摂理とわかっていながらも、いや、わかっているからこそ、ヘンヴァーレは何か空しさを感じ、歌を歌いたい気持ち胸内で膨らんでいた。だが、その場で歌を歌っても、オオカミと鹿にその音響は聞こえそうにもなかった。距離が、あまりにも遠い。

彼がそんなことを思っている時に、隣で慥然と突っ立っていたキリサメ ハクが、「みえた」とかすかな声でつぶやいた。

なにがみえたのか、とヘンヴァーレは尋ねようと思った時にはもう、キリサメ ハクが今自分たちの立っている高台、つまり崖になっっているようなその場所から飛び降りた。身を放り出すかのようにゆるやかに。「……え」ヘンヴァーレは驚いたままに呻き、キリサ

メ　ハクのどんどん地面に吸い込まれて小さくなっている姿を追う。「か、考えられない…」単純にそう感じられる。そう感じたのはフェルクルもパプテガも同じらしく、二人も唾然としている。やがてキリサメ　ハクの目立つ姿（白装束）がどこかの時点で小さくなつたあまりに、三人して彼女を見失つた。そして三人して同じことを考えた。その考えたことを、フェルクルがほとんど確認するような意味で、口にした。

「このタイミングで私たちが怪物に襲われたら、完全におしまいな」

場が静まった、ように感じられたのは、全員が冷や汗をかいてしまったからである。その冷や汗もすぐに蒸発して乾いてしまったが、三人の内面には緊張と不安が溢れるのは当然だ。キリサメ　ハクの白装束が見えなくなつたということはすなわち、自分たちの身を守つてくれる存在が無くなつたということであり、ということは、三人は今、肉食の怪物からすればただの栄養分である。新鮮な肉塊でしかないということである。

「キリサメ　ハクには何が見えたんでしょう？　この見晴らしの良いところから仲間の姿が見えたということですかね」

ヘンヴァーレが言う。するとフェルクルが、

「さあな。あともう一言くらい口数が多ければ助かるんだがな。人を置いてけぼりにしやがって…」

と不機嫌さを包み隠さずにぼやく。少し間を置いてからパプテガが、

「高台にいると周囲を見渡せるのはいいが、逆に見ているこっちも目立ってしまうのは問題だな」

と言った。

だが下手に場所を変えて、足元から虫の毒にやられるのも問題だから、結局三人は何ともしがたい状況に押しやられたということだ。前は崖下だし、背後は虫の潜む砂海なのだから、キリサメ　ハクが帰ってくるのを待つしかない。…怪物に、四肢をちぎられる前に。

そういう判断をした三人は、座ることも歩くことも仲間を探すこともできず、足元に神経を向けながらキリサメ　ハクを待ち詫びる。時刻はもうすぐ夕刻を迎えるはずだというのに、太陽からの日射はますます激しいのだから、熱射病が心配にすらなってくる。

だがそれに関してはフェルクルのまち針に二人は助けられた。まち針はただまち針ではなく冷却装置の役割を果たしているそう
で、球型の飾りの部分をおでこに当てれば、頭痛や吐き気のようなマイナスの症状が出るのを防ぐ効果を、多少発揮してくれた。ひんやりと冷たいのである。

「このまち針を頭に刺しておくことによって、私は何時だってクールでいられるのさ」

とフェルクルは自慢気に語った。

パプテガが穏やかな調子で、

「なるほど。……こりゃいいな」

と返事した。まち針の先端に頭をつけている彼のおでこから湯気が昇っていた。

パプテガがおでこをクールダウンさせていたその時、閉じた蟲の世界から飛び出した八機の黒騎士、それと対照なる外観の白装束を纏っているキリサメ　ハク。その黒と白が今、高い位置と低い位置で向かい合っている。高い位置にいるのは黒騎士Nils　Olav。低い位置にいるのはキリサメ　ハク。蒼空の遙か上空を飛んでいる黒騎士が下方を事細かにチェックすればキリサメの姿を発見することはできるだろうが、探しているものが人のように小さいとは想像していないので、黒騎士はもうすぐキリサメ　ハクの間合いに踏み込もうとしているその頃合いだというのに、遠方に注意を向けてしまっている。

一方、キリサメ　ハクは岩を足場にして素早く砂丘を移動しているが、彼女の両眼は黒光りのシルエットを標的として捕えているし、すでに一閃を放つ用意すらもしている。柄に指。

彼女は岩から跳んで宙に浮いた状態から、奮い立たせるように全身を痙攣させると、次の岩に足を付ける寸前にその痙攣を止めて、すっ、と静かに着地したかと思えば人外なる跳躍で空を飛んだ。跳ぶではなく飛んだその彼女は、指の力だけで刀を鞘から弾き出して宙に飛ばすと、空中で何度も回転して太陽光を反射させるその煌めく刀をしっかりと左の手で握り締める。そして目前から迫り来る彼女の十倍以上の巨大さを誇る黒騎士と向かい合い、一機と一人が交錯する瞬間、空間が裂けたかのような横線を蒼空で光らせた。その光より一寸遅く、シュツ、という大気が擦れるような音が鳴ると、もうその時には一機のNils　Olavは両足を膝の辺りから断絶されてしまっている。

哀れにも、斬られたせいで機体のバランスを保てなくなったNils　Olavは切断面から赤の液体を垂れ流しながらゆっくりと下降していき、やがて怪物の住まう砂丘に墜落し、その衝撃によっ

て破裂した。赤い液体を入れた水風船が破裂したという風な光景が広がって、まるで砂丘に血の染みが出来たかのようになったのだが、一機のNils Olavがそのように目立つ状態に変貌したのだから他の七機は異常に気が付き、危険を察知して敵の姿をその場に見つけようと細かに探るといふことになれば、一メートル六十センチメートル程度の小さな標的だつて見つかる。

だが、同時にNils Olavたちは一つの事実を受け入れなければならぬ。それは人間という独力では非力なはずの存在に仲間が斬られて呆気なく死んだということ。マザービルディングから聞いていた情報と実際の現実の齟齬を起こしてはいないか、と機体たちは動揺してしまうが、その様子はキリサメ ハクという人間からすればつけこむことの出来る隙でしかない。彼女は、先程敵から切り取ったばかりの両足を足場にすると、跳躍してもう一機に急接近して躊躇も無しに今度は縦線を走らせた。再び、シュツ、という音が鳴った時にはNils Olavの二機目が、縦に真っ二つに裂けて赤の液体を空气中に炸裂させてしまっていて、キリサメは返り血を浴びて悪鬼のようになる。Nils Olavたちは目前で仲間が縦に断裂されたその光景を見たことで動揺が深まってしまふが、残り六機の内どれかが特攻するかのように攻撃をしたことが口火となつて、全員がようやく反撃を開始した。だが、特攻した一機は振るつた巨大な刀を呆気なくかわされてしまった後に、縦に斬られた二機目の残骸たる部品を足場にして跳躍してきた鬼神によつて、斬、始末され、墜落して成す術も無くべちやりと果てた。

突然現れた白装束のせいでアツという間に三機殺され、残り五機Nils Olavに乗り込んでいる人間たちは突如の殺戮劇に怯えてしまつているし、Nils Olavたち五機自身も、絶望的なほどに戦闘能力に差があることを見せ付けられ、どうすれば相手を駆除できるのか、その方法を思いつくことができない。とりあえず距離を取り、五方向に散らばつて、時間稼ぎのために手に持っている小銃で牽制射撃をした。だが銃弾はキリサメの刃に全て跳ね

返されてしまい、一体どうということだというのが、自らが発した銃弾が自らのボディを傷つけるといふ現実を叩きつけられる。

銃弾を跳ね返された一機は、運の悪いことに関節に弾が入り込んだことによつて右腕部分を損傷。機体バランスを崩してしまい、落下しそうになる。そこを他の一機がフォローして肩を担ぎあつたが、もうその二機はお互いが担ぎあつているせいで素早く動くことはできない。その様を見たキリサメは不敵に微笑んでから、まだ飛んできていた銃弾を刀を使うことによつて移動の手段にしてみせると担ぎ合っている二機の真上に位置するようになり、太陽を背にして、二機へむかつて落下した。落下すると同時に刀が振るわれ、Nils Olav二機の頭部が機体から、すぽーン、と赤の液体の尾を引きながら噴水のように吹き飛んだ。首を失くした二機は為す術もなく地上へと小さくなつて行き、べちゃり、真つ赤な花を二輪、砂丘に咲かした。

残りの三機は手にしている小銃を捨ててから突撃を開始して、刀を両腕で持ち構え、仲間五機をわずか数十秒で殺した相手に立ち向かう。ほとんどやられることを覚悟している状態ではあるが、これが一%ほどに勝利の可能性を秘めているという解答は出ていた。たつたの一%。しかしこれ以上の成功確率を持った手段が無い。

三機のNils Olavは突撃する前に、決意のための言葉をそれぞれが呟いた。

『こいつは危険だ。絶対に排除しなくちゃいけない』

『俺達の命が失われることなどを躊躇してる場合じゃない』

『やるしかないね。………メメル、死んだら悪い』

トナツト君は『活力』の吸われすぎで気絶したメメルに殊勝な言葉を告げてから、ブースターを最大点火させて突撃を開始した。他の二機も、それと同じタイミングで悪鬼への挑戦をはじめた。

『相手は所詮、足場が無ければ自由に動くことができないんだ。二段構えのアクションで三機連携して、確実に仕留める。…わかつてるな！』

『『応!』』

右腕を握り拳にしてそれを叩き込んで相手が避けるもしくは右腕を斬るなどしてできる一瞬の隙を見計らい、味方に当たること躊躇せず敵に刃を振るうという作戦を三機は言葉も交わさずに理解し合っている。

蒼空の中。三つの黒い球が一つの赤い点へと一直線に集まってくる。

三機は同時に、拳を突き出した。

空気に衝撃が走る。

その衝撃から間を置かずのこと。揺り籠のような役割を果たしてくれていた機体のコックピットから、追い出されるようにして一人の少女が飛び出した。大気の中を、パラシュートも無しに真逆さまに落下していく彼女は意識を喪失している。自らがへちやげる危機を迎えていることにも、気が付いていないだろう。

少女の意識は、脳というあやふやな牢獄に囚われて夢幻の旅をはじめていたのだ。

少女の境界線

意識が混濁してしまったのは何かの境界線が壊れそうになっているから。言葉が透き通ってしまう空気に落ち着いたのは、その普段の世界でそれが汚れていたから。いや、まだ幼い空間では断定できる事象など何一つ無い。渦があつて、道があつて、生き物があつて、創造主があつて、導き手がある。だけどその空間は不安定で、微弱的な電波のように力が無くて、皮だけのぺらっぺらのように単調で、かといって簡易だからこそ受け入れの皿が大きいというわけではなくて、赤い液体は満たされていて注ぎ足せる余裕が無いようにうかがえる。なぜそこに創造主は入り込んでしまったのだろうか。境界線をあやふやにした今、ここに踏み入り、何をどうするのだろうか。そんなことは誰にもわからない。おそらく主自身にも。

少女は目覚めて道の上で立ち上がった。

汚濁している渦がけたたましい音を鳴らしている。茶色というには少し薄い配色だから、薄茶色と言えば良いのだろう。その渦は、極彩色ばかりの風景が広がっている荒野で、天から下へ向って渦を巻いているように見える。

そもそも、このけたたましい音を鳴らしているのが薄茶色の渦であるということにも確証が無いのだが、しかし少女はそう思う事にして、けたたましい音については深く考えることはせず、サイケデリックな派手な色遣いの風景が広がっているばかりの荒野で、道を歩く。

道はうねうねと蛇行していて、何らかの白骨によって道となっている。道以外のところを歩くわけにはいかない。何かの幼虫が無数に、蠢いていて、時折口を開いて何かに噛み付きたがっている仕草をしているのだから、お腹が減っているのだと推測することはできる。幼虫は全てが違う色をしているように見えるほどに、どれも色が違う。ある幼虫は赤だし、別の幼虫は紫だし、また違うのは若

草だし、或いは青だし、ほかにオレンジ、ビリジアン、蘇芳、黄土、コバルトブルー、青紫。つまりどんな名称の色でもあるように思えるほど種類が豊富。全てがうじうじとわずかに動いていて、寝そべっていて、時折欠伸のようにゆったりと口を開き、獲物を噛み潰すためにあるのである。う白い歯をちらつかせる。そんなものが道を外れれば無数にいるのだから、少女は道に沿って歩くほか無い。骸骨を踏み砕き、道に迷った旅人のようにおたおたと、歩いている。少女は、薄茶色の渦を見上げる。雲を掻き分けて天から下へ廻っているのがその地点からでも見えていて、彼女に関心を持たせる。彼女は渦を見れば見るほどに、下へ廻っているのを見るほどに、その廻転が地表に着いている場所はどのような様になっているのだろうと関心を持つ。

だから少女は迷子の旅人でおろおろとしてはいるが、とりあえず湧いた関心を頼りにすることにして、前か後ろにしか進むことの出来ない蛇行している道を、渦の巻いている方向に進んでいく。

でも、腕がびくびくと落ち着かない。あるいは、手。あるいは、耳。落ち着かない。

何かが足りない、と身体が訴えていた。

でも何もわからない。びくびくも止まないから、歩くしかない。

少女は道に行く。極彩色の風景がはこびる世界を進んでいく。

ふと、蛇行している道を右回りした時に、骸骨や幼虫とは違う何か道の上でうずくまっっているのが見えた。遠い距離の時にはそれが動物なのか人なのかの区別も付かなかったが、近づけば近づくほどにそれが人だとハッキリするように変わった。少女は期待する。人に出会えた、と。

胸奥で歯車が激しく動きはじめるのがわかった。その歯車は一つではなく、四つ、五つが互いに擦り合いながら動いているのだが、その速度が上がっていくにつれ、少女は右足と左足が動くテンポがどんどん早くなっていくことを抑えられない。だから早歩きとなり、やがて小走りとなり、遂には走り出し、彼女の歯車は壊れてしまう

のではないかと心配する程早く回転している。呼吸が荒くなり、未熟な手足に乳酸が溜まっていく。道が蛇行しているせいか、人だと判明したそれに近づくまでには、随分と体力を消耗したが、彼女はうずくまっているその目の前に辿り着き、それを見下ろした。小さな彼女が見下ろせるくらいに小さなその人間は、大人ではないと思えた。が、何故だろう、それが男なのか女なのか、どんな姿形をしているのか、よくわからない。透明でうつすらとしていて、夢か幻かのように現実味の無い存在が彼女の両眼の先にある。それはうずくまっただま動かない。少女が近づいたことにすら、気が付いていないように見える。

ねえ。

歯車はゆつくりと落ち着きを取り戻していて、それに伴って呼吸も穏やかになる。少女は声を掛けることで、その存在に何か答えを返してもらいたく思った。

だが、しばらく待ってみてもそのうずくまっている存在は何も答えてはくれず、反応さえ示さない。微動だにせず、そこにいないのかわからない存在感そのまま。石像。誰からも存在を気付かれない、気付かせようとしない石の像。いや、石というよりはプラスチックのような透明なもので作られているような軽薄さ。

手を伸ばしてそれに触れてみようとして少女は思う。右腕を伸ばして、その透明な部分のどこかに触れてみようとして試みる。だが、うずくまっている存在は彼女に触られるその直前に、緑色の粒子と化して空気に霧散した。

うわあ。

少女はそれを綺麗だと思って見惚れた。だが、数秒後には緑の粒子は消えてなくなった。全て、道を外れたところで蠢いている幼虫

に飲み込まれてしまった。少女は幼虫に悪態をついてから、道を再び歩くことにする。天を仰げば薄茶色の渦があるのだから、行く方向は定まっていた。

てくてく、てくてく。時計の秒針が時を刻んでいるかのようには、彼女は同じリズムで道を歩き続けていく。それはつまり骸骨を一定の間隔で踏み潰しているということでもあるし、目標である渦の終着点へと確実に近づいているということでもある。歯車はゆったりと擦り合い、手足が少女の身体を運んでいく。てくてく、てくてく。ふいに、蛇行している道を左回りの時、ふたたび何かがつまづきまっているのを視界に捕えることが出来た。少女は期待をあまり抱けない。遠目から見ている内はまだその正体がわからないが、距離を近づけるほどにそれが先ほどの人なのだと理解して、同じことを繰り返すことになるのかな、とうんざりするような気持ちが湧いた。

歯車が逆回転をしそうになって、確実に前へと進んでいた足をここにきて初めて止めたと思った。薄茶色の渦を見てからはずっと進めていた足だが、四つ、五つある歯車はギコチナイ動作にみるみる落ちて行き、連なって少女の手足が身体を運ぶのを容易なことにさせなくする。気だるさが彼女を覆い、蛇行している道をそのまま真っ直ぐに突っ切れればいいのという願望が熱を帯びてくる。もちろん幼虫がいるのだから道を外れることはできず、彼女だって幼虫の白い歯に噛み千切られて食べられたくはないのだから、道の上を蛇行して歩いていく他、渦に向う手段はない。

仕方が無い、と諦めることにして、自分の気持ちに蹴りを入れて、ギコチナイ回転をしている歯車に潤滑油をたらすようなイメージを浮かべながら、目標である薄茶色の渦を見つつ歩を早める。怠惰という底無し沼に足を取られないようにする為に、早歩き、小走り、そして遂に走り出して、少女はうずくまっっている存在の前に辿り着いた。プラスチックのような透明な軽薄さ、その存在はさつきと何ら変わらず存在が曖昧でばやけている。相変わらず、少女が目の前で

見下ろしていても微動だにしない。

また、会ったね。

返事が来ることは無いだろうとわかつてはいたが、声を掛けた。うずくまっっているままに無反応であることを快くは思えないが、道の外にいる幼虫たちよりは随分心地よく感じられる存在であるから接したいと思えるのだろう。そういえば何ゆえに幼虫がそこにいるのかはわからないが、少女からすれば随分と不愉快な虫で、先ほど緑の粒子を食べたことだつて許せたものじゃない。欲しがるだけ欲しがるばかりの欲望の強い、わがままな、その実食べることしか出来ない貪るばかりの幼虫。それが道の外にて無数に蠢いているのだから嫌になる。

手を伸ばした。すると緑の粒子が再び空气中に広がった。そして幼虫たちが、我先にと争うかのような切迫さで口を大きく開けて、白い歯の上下を何度も噛み合わせてカチカチと音を鳴らす。それは自身をアピールしているようであり、他の虫たちを威嚇しているようでもあつたのだが、少女はそういう乱暴な輩のところに粒子が行くことは無いんじゃないかと想像した。

しかし少女の予想は外れて、儂げなる緑の粒子は、一番欲望を剥き出しにしているように見えた幼虫の元へと漂っていき、その口に吸い込まれて歯に噛み潰されて、飲み干された。緑の粒子を飲んだ幼虫は青紫をしていたが、その腹内あたりが仄かな緑で満たされ、しばらくすると緑の粒子を栄養としたのだろう他の幼虫と比べて巨大化していき、近くで蠢いていた幼虫の居所を奪い、圧迫していく。圧迫された幼虫たちは苦しそうにうがあと吠え始めた。

道の上にいる少女には苦しそうな幼虫を手助けすることは出来ないし、する気分にならない。哀れには感じたが、道の外に足を踏み出す勇気だつて生まれてはこない。少女はここに佇んでいても仕方が無いと感じる。歩き出すことにした。

一人の女の子は極彩色ければしい景色を歩行によって前に進んでいくうちに、空で天から地に伸びているあの薄茶色の渦に希求を深めて、深くその思いに身を寄せている自分がいるという風に客観的な冷静さも持ち合わせないで、何時までも目指していければなと期待している思いが自分を支えているとは認知していない。少女がこの境界線の狭間に迷い込んで立ち上がった時に失っていると感じた部分を埋め尽くしてくれるのが、彼女にとってあの薄茶色の渦。落ち着かなかった手、耳、腕。物足りないと心が訴えていた時があったのに、今の彼女はそれをもう忘れてしまっているのは、渦が何時までも彼女の目標として空にあるから。空白は空白としてあればこそ、空白は忘却されず少女の中で存在を主張し続けただろうが、空白は今や埋め立てられて消えている。彼女は歩き続ける。後もう少し歩けば、薄茶色の渦のその根元に辿り着ける。

少女は辿り着くまでの間、渦に対する期待で心を充足させている。辿り着けばきつと消えてしまっただろう感情で心を、楽しくさせて。ふと、蛇行している道だがそれを右回りした時に少女はプラスチックのように透明な軽薄さのあれがうずくまっているのが見えた。早歩きをして小走りをして遂に走って、うずくまっている存在を見下ろしながら呟く。

なんのために、ここにいるの？

言われた途端に存在は緑の粒子と化して飛散し、消えた。虫がまた騒がしくなつて、口を忙しく動かして緑の粒子を食べようとする。今度は黄金色をした幼虫が粒子を食べた。大きくなった黄金の幼虫は目に眩かった。

少女はさつきと同じ事の繰り返しを見てもツマラナイと思い、さつきと行ってしまおうと右足を出そうとした。

しかし少女は右足を出さなかった。何故か。

何故かと言うと、幼虫が蛾になったからだ。黄金色がければし

い蛾である。ばさ、ばさ、と羽を振るう度に銀色の鱗粉が舞い、その鱗粉はニンニクのような刺激的な臭いを発していた。

く、くさい。鼻がもげて砕け散るほどにく、くさい。

少女は臭いに苦しめられる。蛾はわざとらしく少女の真上で滞空し、ニンニク臭の鱗粉を振り落とす。あまりの臭さに耐え切れない彼女は、走って逃げ出す。それを蛾は追いかけてくる。

最悪だった。ちつとも蛾を振り切ることが出来ない。少女自身が自分の足の遅さを呪いたくなる。蛾は彼女を追いかけることを楽しんでるのだろうか、嬉々鱗粉を振りまき続けている。そして少女はニンニク臭を全身にふりかけられてしまつて、ニンニク臭い女になつてしまつて悲しい。

なんでこんなに足が遅いのだろう。と、自らの手足がまだ幼いことを空しく思う。その瞬間に彼女の何かが開錠される音が鳴った。がちやり。鍵が捻られたことで記憶が開いた音だった。そして彼女は何が足りないのかを思い出し、走るままで泣いた。

いないんだ。もう、いないんだ。一人だ、私、一人になつちやつたんだ。

耳が落ち着かなかつたのは声が聞こえなかつたからだし、腕と手が落ち着かなかつたのは柔らかい綿のあれを抱いていなかったからだ、と少女は気が付いて、世界を孤独の牢で閉じ込められてしまつていような感覚に陥つて、一人なのだからひどく寂しい未来がこれから待っているのだと嫌になつた。

そんな風に落ち込んでいる彼女に蛾は、相変わらずくっつき鱗粉を撒き散らしているのだから泣きつ面に蜂。少女は鼻をおさえながら泣くが、息が苦しくなつて、ずはー、ずは、ずびび、とはしたない音を鳴らしてしまつ。

黄金色の蛾も、そんな彼女を哀れに思ったのだろうか、或いは、はしたない彼女から離れたく思ったただけだろうか、とにかくニンニクを撒き散らす蛾は何処かへと羽ばたいていった。

しばらく汚らしく泣いていた少女は、すでに全身が銀色の鱗粉まみれになってしまっているが、蛾は飛んでいったので、走るのは止めて、道の上に立ち止まる。涙がこぼれ落ちる部分だけ鱗粉が剥がれている彼女の顔は、他の部分全てが銀色だから滑稽な仮面をつけているかのよう。

ニンニクの臭いが何時になっても鼻に纏い付いてくることに癩癩を起こして、長い間、ぐわんぐわん暴れて鱗粉を払い落とす。ようやく大体を払い落とした後には、すっかり腫れ上がった顔で虚空を見るかのような表情をしてぼんやりとしていたが、やがて歩き出した。

ふいに蛇行している道を左に回ってみると、薄茶色の渦の終着点が見え、薄茶色にうかがえた。

だけど泣き腫らした後の彼女は、今まで目指していたそれが見えなかったというのに、何の感動もしなかった。無気力の瞳で、歩調を変えることすらしないで、ゆっくりと終着点に近づいていく。

だが途中で、終着点のその近くに白装束を纏った女の人が立っているのを確認して不安になった。その女の人は憮然とそこで突っ立っているが、刃物を持っているし、何より一番怖いのは、前髪がだらんと垂れているせいで顔が見えない。黒髪が上半身を覆うほどに長いのだ。

少女はその女の人を確認した時点で、もう、一步も歩けなくなってしまう。その場で固まってしまい、前にも後ろにも行けない。心臓が高鳴り出して、無気力の瞳が恐怖に染まる。鼻腔にニンニクの臭いに混じって鉄分の香り。耳鳴りがキーンと鳴り、歯車が緊張してギコチナイ。危険信号。

向こうがこちらに気が付いているかが、わからない。ただ、後ろ向きで無いのは確かだから、こちらの方を向いている。だが、前髪

つたせいもあるだろうが、少女にはそれが何千年も前に放置された化石に見えた。しかしそれは化石ではなく、作られたばかりの機械であった。

機械は電子音をたてて人が乗り込むと思わしき空間を開いた。まるで意志を持つているかのようで、少女に乘れと促している。緑の粒子も　それは機械を取り囲むようにして漂っているが　彼女が機械に乗り込むことを望んでいるようで、彼女の疑心を晴らすためであろう、可愛らしくぴょんぴょんと空气中を動き回ってから、その人の乗り込むと思わしき鳩尾部分に入り込んだ。先ほど悪夢を見たばかりの少女は、突如の機械と緑の粒子の誘いにノルような気持ちになるのは難しかったが、怪物の気配という奴を砂丘を歩いている内に感じていたので、その危機から逃れなくてはならないということを考えれば、足は機械の鳩尾部分に進んだ。この他に何か道はあるだろうかと考えても他に何も思いつかないし、それに一人になった彼女は寂しさも抱えているから人の形をした機械と可愛らしい動きをしてみせた緑の粒子に、多少の親近感も湧いた。

コートマシンのコックピット。ハッチを閉めれば何も見えない、Nils Olavとは逆な閉鎖感のある空間の中で一息をつく。そして少女は、溶けるようにして眠りに付いた。

変態医者と注射器

hotalubiのコアは緑の光を放ち、どく、どく、とリズムカルに拍動。一時期は赤になっていたが、今は緑で落ち着いている。だが決して深海の青にならないのは、乗組員たちの状況が良くなつたわけではないからだろう。

傷口に蛆が湧いてしまった者もいれば、半日ずっと苦しそうに叫び続けた結果息絶えた者もいた。小型船舶内の雰囲気は明るくなるはずもない。大体の者が、疲れたからもう一步も外を歩きたくないみたいな顔をしていて、足がふらついている。

笑顔を浮かべながら治療に当たっていたマルーダも、片頬だけがひきつっていて見苦しい。

「大丈夫だよー。まだ生きれるよー」

などと言つて患者を励ますのは良いのだが、表情が顔面麻痺の人のようにひきつっているのが怖い。生死を彷徨っている人がそういう顔を見せられるのだから心臓に悪い。

小型船舶内は苦慮に塗れて四方八方を塞がれているような、そういう嘆きの嘆息と、終わることの無い怪我人の面倒とで、妙な喧騒に溢れている。室内が静まり返ることはないが静まり返っても不気味だったかもしれない。血生くさい臭いは絶えることなく、そして苦痛に絶えようとあかく人々の咽喉から搾り出される声が、地獄から響いてくる地響きのよう。

実際、半数でいどが地獄にいつ何時招かれてもおかしくはない感じになっている。

虫の息。

唯一の医者フルーチェは、虫の息とは違つ。しかしもはや耐えられない。彼の血が騒いでいる。

変態の血が。

「…くっ！」

治療をしている途中、突如として両手で頭を抱えると、手に持っていた注射器を青年に渡してから走るようにして別室に行ってしまう。残された青年は注射器をどのように扱えばいいのか戸惑いながら、フルーチェを引き止める言葉を叫んだが、彼は一度も振り返ることなく部屋から姿を消してしまった。

「ちゅ、注射を打つなんて出来ないぞ……」

青年はぼやいてから、苦しそうな仲間の顔と注射器を何度も見比べる。生唾を飲んだ。フルーチェが帰ってくるのを待つか、それとも思い切って血管に狙い定めてみるか、彼は悩み続けた。

その時、断末魔のような悲鳴が、室内に木霊していた。青年はさらに焦る。

一方、おさえきれない変態の血を慰めるために蛍光灯がわずかに灯っている程度の通路に出たフルーチェは、両手で頭を抑えた体制のままに、しばらく通路を行ったり来たりしていた。不審な動きをしている彼は、眉根を潜めていて、両手がふるふる震えるのに合わせて、頭もふるふる震えている。

「う、うん。く、苦行……」

脳味噌が漬物石で押し潰されている。そんな錯覚を覚えるほどに疲労している彼には、ストレスを解消する必要があった。漬物石をどかす必要があった。だから彼は変態しなければならない。では、具体的には。

まずはイメージである。練り込まなければならない。集中することによって、創造を始める。

なんとなく漏れ出て来た想像をキツカケにして脳内で事物を創造し、現実になんか存在していると己を錯覚させることで、現実の世界の中になんか存在しながら、夢で楽しむことができるようになるのだ。そのためにはひたすら集中力が必要とされる。

フルーチェは額に指を二本当てながら、

「……く……く……く……く……」

と眼を瞑り、想像を創造にまで高めていく。

ある程度練り込まれたら、開放する。

「パツ！」眼を開く。

するとフルーチェの眼前にタコの形をした宇宙人とイカの形をした宇宙人が立ち塞がっていて、一匹や二匹ではない。百匹ほどが、通路の床、壁、天井にへばりついていて、のっぺらぼうの顔を向けて物言わずに佇んでいる。不気味な姿であり、何をしてくるかかわらないが、フルーチェには不敵な微笑みを浮べる余裕がある。

手に持っている宇宙人撃退用小型拳銃はレーザーを発射するのだ。トリガーを引く度、ぷしゅう、ぷしゅう、コーラの炭酸が抜けるみたいな音を鳴らす小銃。タコとかイカの宇宙人は実に呆気ないので、コーラの炭酸が一度抜けるたびに死んでしまう。ホラーのB級映画に使われるようなスプラッタな感じで内臓を撒き散らしていくタコとイカ。半分ほどの仲間が内臓を撒き散らして殺されたことで感情が昂ぶったのだらう、キイイ、と猿みたいな音を何処かから発しながらフルーチェに襲い掛かってくる。フルーチェは容赦しない、ぷしゅう、ぷしゅう、ぷしゅう、レーザーが次々に発されてタコやらイカやらは破裂していく。破裂した内臓がフルーチェに降りかかり、彼の視界が遮られる。その隙をタコとイカは見逃さなかった。数匹が背後に回ったのである。フルーチェは気が付かず、ぷしゅう、ぷしゅうと撃ち続けるが、途中でやけに数が少なくなっていると感じたので背後に気をやった、が、もうその時にはタコやらイカやらは準備が完了している。フルーチェは数匹から同時に触手で手足を拘束され、通路の壁、床、天井にぐわぐわぐわんと容赦無くぶつけられる。宇宙人撃退用小型拳銃も床に落としてしまい、タコに取り上げられた。そしてそのタコが逆さに吊り上げられているフルーチェに小銃を向ける。キイイイ、と荒々しい音を発しているので、今すぐにも撃たれそう。だがフルーチェは余裕だ。

「撃つなら撃てよ。当てられると思うな、タコ野郎」

挑発をされてタコは切れた。その勢いで引き金が引かれ、ぷしゅう、肉体を焼き尽くすレーザーが銃口より発射される。だがフルー

チェはレーザーを目視はせず、挑発に乗ったタコのタイミングを見計らうことで、腹筋で身体を持ち上げ、銃撃を避けた。そして銃撃はフルーチェを吊るしていた連中に直撃したので、吊るされていた男は頭から床に落ちたが自由になったので、反撃開始である。

「いいのか？ また仲間に当たるぞ」

そう釘を刺されたことで二発目を撃つのを戸惑ったタコに対して前蹴り。宙を舞った小銃をフルーチェは跳んで捕まえると、容赦の無いレーザーの雨嵐をタコ&イカに浴びせる。ぶしゅうぶしゅうぶしゅうぶしゅうぶしゅうぶしゅうぶしゅう。タコ&イカ全滅。

全てが滅された後には、撒き散らされた内臓と、戦の空しさからくる沈黙だけが残っていた。

変態の声が高々しくその沈黙を破る。

「はっはっはああああー！ ああー、気持ち良かった」

フルーチェはすっかり晴れやかだ。彼は目を瞑り、練り込んでいた創造を自分の脳味噌に封じ込めていくようなイメージをしてから、もう一度目を開く。

通路にタコ&イカの内臓は跡形も無く消え去り、彼の手から宇宙人撃退用小型拳銃もすでに失われている。創造によって楽しんでストレス解消。ただの通路一つがあるだけでそのようなことが出来てしまうとは、なかなか恐ろしい変態医者である。フルーチェである。彼は大きく息を吸い込み、そして吐く。するともう緩やかな表情ではなく、キリツと引き締まっていてビジネスのできる優秀な社会人みたいな感じになっている。

「よし。やるとするかな」

意気込みを入れてから、フルーチェの治療を必要としている仲間たちのために、白衣の襟を正す。室内に入り、何をしている途中だったかと思いつくとした所で、青年の姿を見つけて、あ、そうだ注射を打つべきか打たないべきか苦悩していた所だったのだ、とすることを思い出す。フルーチェは青年とシートに横たわっている患

者の元に近づいて、「様子はどうだ」と尋ねようとした。

だが尋ねる前に、フルーチェは悶絶してしまい、言葉を出すことができなくなる。

彼はその双眸で、信じられない状況を垣間見てしまい、背筋を凍らせる。

シートに寝かされてる患者の右眼に、注射器がぶっ刺さっていた。

恨む

何かの異変が起きている。それも凄まじいほどの異変。

注射器が患者の右眼にぶつ刺さっているという光景を見れば、そう察するしかない。青年の気が狂ったのだろうか、と想像することにもなった。それを確認する為に、フルーチェは青年に声を掛ける。「患者の目玉から、血が流れ出ているぞ」

だが何も返事は来ない。とにかく患者から注射器を抜かなくてはならない、と思つて患者を良く見た時に気が付く。その人はもう死んでいる、と。呼吸していない、脈が無い。

フルーチェの胸奥に、四角い箱があるのだがそれが破裂して中身が弾ける。湿つていて黒々しい中身はゲル状で熱を持っていて胸奥のそこら中にへばりついて湯気を発した。その湯気がフルーチェの全身から吹き出し、彼の肉体を怒りと熱で覆うので彼は拳を自然と作つていて、それは青年に一直線に向い、青年の鼻をへし折つたかと思えるほどの鈍い音を経た。青年は無抵抗でずしゃあと床に転がって、意識を失くしてしまつたらしく動かない。

「人殺しだあ！ フルーチェが青年を殴つて殺したぞおお！ ははは、人を殺したヤツは法治国家の名の下に排他されるんだよおおお！ お医者さんのフルーチェももう御終いだあああ！」

やかましい声。それはペギーの物だ。くるくるとワルツを踊る人がするような回転のままにフルーチェの周囲を回つてみせながら、彼を小馬鹿にしている声つきで容赦が無い。

「ギロチンかなあ？ それとも絞首刑？」

「黙つてるよ気狂い」

「黙らないよおお。こんな事態に何で黙らなくちゃいけないの？」

「貴様は…！」

「あああああ！ フルーチェ医者は、私を口封じのために殺しちゃうつもりだね？ じゃあ、私はそうされる前に皆にこのことを伝え

なくちゃ！」

「青年は死んではいない。俺は人殺しじゃねえんだよ、わからんかなあペギー」

「わかるよおお。その患者を殺したのがフルーチェでしょ？」

「……………」

「わあ、怒らないでよおお。もう、そんなに怒る必要なんてないんだよおお」

「なんでだ」

「だって、ほら…………！」

ペギーは回転を止めると、不敵に微笑んでから言った。

「みんなが死んでいくんだから！」

ペギーがそう言ったのが契機だった。室内を灯すコアの光が鮮血の赤へと変わり、フルーチェの顔やペギーの全身も赤く染まる。そして室内中で動き回っていた乗組員たちが次々に倒れ、床に後頭部など打ちつけたりし、血が床をドロドロと流れる。

「フルーチェが人殺しだって、これじゃ教えることが出来ないよおお！ 全て滅びへの終末を迎えていくんだからああ！ いやああ

あ滅亡！ 願望の消失ううう！ 最後の審判よおおおおお！」

「わけわかんねえことばかりいいやつて。どけえ、ペギー！」

「あららあ慌てんぼう」

荒々しい手つきでペギーをどかすと、急いで倒れた連中の所に向い、まだ生きているか確認する。だが全て息絶えている。脈が無い。瞳孔が開いている。

「どうなってるんだ…これはよおお」

フルーチェの両眼に涙が湧いた。大人になってから涙を頬より伝わせたのは、これがはじめてのことだった。あまりにむごいと感じられるし、或いは鮮血の赤に心がかき乱されているのかもしれない。だが何時までもかき乱されてばかりでもいられない。フルーチェは涙を拭ってから立ち上がり、ペギーが何かを知っているはずだと彼女の姿を探す。「どこだ、ペギー」するとフルーチェの背後より返

事が来る。

「二つですよ二つ」

それはコアのある方角でもある。フルーチェは振り返りペギーの輪郭を見やる。赤の灯りを後光にしてケージに寄りかかっているペギーの表情は暗くてわからない。だが輪郭はうかがえる。そして輪郭は一つではなく、二つだった。そいつもケージに寄りかかっている。

自分とペギー以外にもう一人生きている。それは誰か。

フルーチェの視界からでは、輪郭しかうかがえない。それはペギーよりも身長が随分と高いことから、男ではないかと想像できるが、

「……誰だ。……お前は……なあ……」

見当がつかない。身長がペギーより高い人物などいくらでもいた。髪型も輪郭だけはわかるが、特徴のある髪型でもないから、それがわかったとて人物を特定することは出来ない。

だが、特定出来ないからと言って、どうしようもないわけではない。むしろ、誰なのかがわかって戸惑ってしまうよりはマシだとフルーチェは感じる。彼は白衣のポケットを探り、そこに包帯を裁断する用の鋏があることを確認して、赤い灯りの中、のっぺり顔にわずかな皺を寄せる。

（まだ状況がよくわからないが、男とペギーは殺るべきなのは間違いないねえ……まずは男……その後にペギーを殺す……！）

身体を使うことに自信は無いが、不意を食らわせれば殺れるのではないかとも思う。彼はなるべく相手に殺意を感じさせないように注意しながら、近づいていく。

「とりあえず、話でもしようか。いろいろと聞かせて欲しいことがあるんだから」

咽喉が震えそうになったが、何とか堪えることができた。こつ、こつ、という自分の足音がやけに耳に響いてきて鼓膜を震わす。いろいろと震えそうになる。緊張。フルーチェは、歩くにつれて自分がコアの鮮血の赤により強く照らされるのだと途中で気が付き、強

張った表情を作らないようにしなければとも思い当たる。なるべく通常の、多少警戒しているという雰囲気、保って近づけば鉄を突き刺す余裕はあるはずだ……。なにせ、相手は俺が鉄を持っていることを知らないはずなのだから。

相手は自分が凶器を持っていることを知らないはず。それはフルーチェにとって重要な事実。その事実が揺るがないならば、勝ちの芽が出る。鉄を突き刺すことが出来る。仲間たちの仇を討つことになるはず。この二人が何らかの企みをしていたのは、まず間違いないだろうから。

フルーチェは、二人にゆっくりと近づいていく。もはや距離は、数歩分。

そこで声が、発された。男の輪郭から。

「筒抜けているぞ？ 全部のことが、聞こえている」

(……………なに?)

「今、なに？ とお前は疑問に思った。それさえも、筒抜けている」突拍子過ぎて意味がわからない。フルーチェは立ち止まり、白衣の中で鉄の指環に指を通すという仕草をついしてしまい、わずかな動きでも光の按配で白衣の中で指を動かしたのがばれてしまうかもしれないと冷や汗を掻く。

そんなフルーチェに再び、赤の輪郭より声が掛けられる。

「案外、鈍いんだな？」

額に浮き出た冷や汗をフルーチェは拭う。

「言っていることがよくわからん」

赤の輪郭はその言葉の何かが面白かったのだろうか、嘲笑いを口より漏らす。

「コアの性質を知らないんだな。それとも覚える脳を持ち合わせてない馬鹿か？ ……まあ、どうでもいいが」

赤の輪郭が、フルーチェの視界から大きく見えるようになる。男が、フルーチェに近づいてきたということだ。フルーチェは鉄を力強く握り締め、タイミングを図る。

そしてここぞという位置まで男との距離が詰まった瞬間に、ためらわず、白衣にて隠し持っていた鋏を取り出して男に突き出した。命の躍動を示す心臓を狙って。だがそれは読まれている。

がっ、と手首を取られ、鋏は心臓に向う前に止められ前にも後ろにも動かなくなってしまうたのは、男のその手の力が凄まじいから。その輪郭は大男というよりはむしろ痩せ気味であったから、その腕力に驚かされる。フルーチエは冷静になった頭で、コアの性質のことをわずかに思い出すが、それはフェルクルが言っていた、コアを通して人の考えていることが伝わるということ。

だがそれは青の球体の翻訳機が無ければできないのではなかったか、とも思い当たる。しかし男は青の球体などは持つていないというの、何を示しているのか。この男が特別だということか？

フルーチエは感覚的にそういうことを感じてから、もう如何ともしがたい危機に陥っていると悟り、殺されると思う。思った時には、男に鋏を奪われ、刃がくるくると赤の光を反射させたかと思えばその光の反射によって、指を切られた。小指の先端を、わずかにフルーチエは痛みにも悶絶し、呻きを発する。男は掴んでいたフルーチエの腕を放してみせると、再び嘲笑い。

「痛いかな？ ……殺しはしない。お前にはメッセンジャーになってもらう」

「メ、メッセンジャー……」

「悔しかろうが嫌だろろうがやってもらう。…なに、伝えると言つても、この現状と、お前の小指から血が流れることを生き延びた連中に見せてもらいたいだけさ…。ただ、全滅させてしまうと誰がやったのかわかってもらえないからな…。特に、まち針を頭に刺している研究狂いにはしっかり俺のことを認識してもらわなければならん」

「お前が何者かは、さっぱりわからんがな」

「フルーチエ。お前が俺のことを何者か認識する必要は無い。調子に乗るな。お前は小指を痛そうに抑えたナサケナイ姿のまま、彼女

恨む。

その缺の向ける先

朧月が宙に弧を描く夜。怪物のものと思わしき空腹に餓えた咆哮が、どこまでも連なっている砂丘の地平に、広がっていく。お前を今から狩りに行くという脅しであり、意気込みでもあり。

怪物の咆哮を耳にし、暗闇の中辺りを警戒した影が三つあった。

その三つの人影が、砂丘の少し迫り上がっている場所から小型船舶を見下ろしている。朧月にわずかに照らされるだけの船舶は、滑稽にも側面に大穴を開けていて、流線形の未来的な美しいフォルムだったにも関わらず、半日中砂塵に塗れたせいで、今は廃船のよう。

暗闇の中、三つの人影は肩を寄せ合っていて、彼らが歩いた後は血が垂れて、ぼた、ぼた、と染みを作っている。真ん中の人物が怪我をしている様子だから、両端の二人がそれを支えているという図になっている。三人は砂の滑り台を転ばないように注意しながら降り下り、小型船舶にゆつくりと近づいていく。血の臭いを察知した怪物が周囲より現れないことを祈りながら。

まち針の女が、息を切らしながら、小さな声で言う。

「…おかしい、な」

羽根付き帽子の男が答える。彼の声音にも、疲れが滲んでいる。

「人の気配が、ほとんどありません…よね」

担がれている男が、うねり出すような声で言う。かすれていて聞き取り辛い声。

「い…いくしか…ないだろう…。どうに、しろ、このまま砂丘で、

一晩を過ごせる…わけ…も」

ぐばあ。彼は言葉を言い終える前に吐血して、服を血の染みで汚した。だが彼は、薄つらとした微笑みを浮べる。

「…ふ、ん…血、暖かい…な…」

「あまり喋るべきじゃありません、パプテガさん。結構な、傷なんですから…」

「す……まな……い……」

「謝るのは僕の方です。あなたがかばってくれなければ僕は死んでいた。噛み千切られて」

「船員……の命……街……それが、俺の役割……」

「いいから何も喋るな。お前は立派に役割を果たしている。今はとにかく、フルーチェに傷の手当てをしてもらうことが優先だ。……怪物が何時襲ってくるか、全く想像が付かないんだからな」

「……………」

「……つたく……。キリサメの奴が帰ってくればこんなことにはならなかったというのに……！」

「彼女は何処に行ってしまったんですかね……」

「何を考えてるかわからん雰囲気の奴だしな。今日出会ったばかりの私にはわからんよ」

「……彼女は、しかし仲間思いの人間です。きっと何かしらの理由があつたんだと思います……」

「仲間思いという人間には、私には思えんがな。……あれは、一人で生きるタイプだよ。その力もある」

「フェルクルもそうなんですか。一人で生きるんですか」

「さあな。……私の話ではなく、キリサメの話だ。……さて、もう一ふんばりだ。頑張るぞ、ヘンヴァーレ、パプテガ。まだ死ぬわけにもいかんだろう」

「……ええ」

「死……ぬ……わけ……ない」

「血が出るぞ。黙っていると云ってるだろう、パプテガ」

「しかしパプテガは口を閉じない。」

「す……ま……ない……………」

フェルクルとヘンヴァーレは漢からの繰り返される謝罪を聞いて、思わず顔を見合わせる。パプテガの頬から血に混じって涙が流れていることを、二人は暗闇のせいで気が付かない。だが、パプテガが悔しがっている、或いは悲しがっていることは、執拗な謝罪から理

解できる。何とも言えない気分にも包まれながら、三つの人影はホームである小型船舶を目指す。そこで待つているはずの仲間たちが多く死んでいること。それを知らないままに。

遠吠えが夜空を駆け抜けていく。朧月に掛かっている雲は、灰色で薄い。

その大穴を間近に見れば、感情が溢れる。昼の頃に地上より発され船体を貫通したあの青白い光線を、どうして避けられなかったものかと。二人は、そう感じさせられる。 PAPTEGA はもはや意識を失っていた。如何せん、彼は重傷を受けた。出血の合計の量は凄まじい。

PAPTEGA の治療を早くしなければならぬが、焦ればより深刻な事態を招きかねない。フェルクルは背後を念入りにチェックしてから言った。

「…怪物はいないな。まあ、コアがある限りは船内に入れば大丈夫だろうが…」

「船の近くに怪物つてのは、気味悪いですからね」

「そういうことだ。…入るぞ。この静けさは、寝ているのか？」

「わかりませんが…」

PAPTEGA になるべく痛い思いをさせないよう注意、特に転ばないように足元に注意して、三人は妙に静まり返っている船内へと踏み入る。船を出た昼の過ぎたころの時は怪我人の治療のために騒がしかっただけに、不気味に感じられるから、自然、慎重な足つきで船内に入る。

そしてまず。

フェルクルはコアが深海の青になっていることにまず眼をやり、驚いた。怪我人が多い負の状況の中で何故、緑か赤になっていないのかと。

対してヘンヴァーレは、船内を駆けずり回っていた多くの人が床

に倒れているのをまず見て驚いた。そして目の前のシートに貼り付いている力持ちの女が　　わずかに見ただけで明らかだったが両眼が完全に見開いていて死んでいるのも見た。力持ちの女の真っ黒な両眼が、ジツ、と彼を見つめていた。

ヘンヴァーレは腰が砕けそうになったが、なんとか堪える。その後、怯えた声付きで呟く。

「なんだよ…これ…」

ヘンヴァーレが呟いたすぐ後に、床を走る音が二人に聞こえた。すぐ背後からだ、と気が付いたがパプテガもいるからすぐに振り返ることも出来ない。そのことで戸惑っている内に、女の首元に刃が当てられた。それは、鋏だった。フェルクルには鋏だとはわからなかったが、刃物だと理解することは出来た。彼女は身を固くする他無い。そんな彼女に、男の声が掛けられる。

少ししわがれた、二人とも聞き覚えのある声。

「動くなフェルクル。動けば、殺す」

ヘンヴァーレはその人物が誰であるのかすぐ特定した。だが、信じることができない。仲間を救うことが役目であるはずの人物が、この空間の自分達以外の仲間全員を殺したなどと、信じれるわけがない。だが、そういう状態だというジレンマが湧き、言葉が紡ぎ出る。

「何故ですか、フルーチェ！」

暗闇に潜んでいた変態医者は、至極冷静な様子であり、シャキリ、鋏の刃を交錯させる。

「お前は黙っている、ヘンヴァーレ。俺はこのまち針女に聞きたいことがいくつもある。お前はパプテガをシートに寝かし付けて、急いで止血をしる。俺もなるべく急いでパプテガを治療したいが、まずはフェルクルに聞いたださなきやならねえ。何を俺達に語っていないのかってなあ」

「…語っていない？」

ヘンヴァーレはフェルクルの表情を窺う。あながち見当外れでも

ないらしく、何かを覚悟したような様子になったフェルクルの横顔が、深海の青で照らされて見えた。

ヘンヴァーレは何を信じればいいのかわからなくなり、言われた通りにするべきか迷い行動をためらう。だがパプテガが突如として苦しみに耐えかねた呻きを上げたので、どうにしろパプテガを安定した場所に置かなければ駄目だとわかる。ヘンヴァーレは、一人でパプテガを肩に担ぐと、よたよたと死体を踏まないよう気を付けつつ、空いているシートにパプテガを座らせた。そして止血などの応急処置を始める。聞き耳を立てながら。

声は囁くように小さかったが、近くで発される音も他に無いから聞こえる。hotalubiのコアの鼓動音も、今ここで生きている誰か或いは全員の不安を察知したのだろうか緑に変わったがどくどく、とあまり大きな音を経てない……。

鉄を持った男の顔つきは皺が幾重にも刻まれている。緑の光ということと普段がのつぺり顔ということが相まって、ひどく妖怪染みて見えた。

その彼から、ひどく平坦な調子で言葉が発される。まるで口パクの人形が喋らされているように、わざとらしく。

「研究狂いのまち針女のせいで蟲に出し入れされて、憎悪を芽生えさせた建築物が、天を穿つことでお前らの世界に復讐をはじめ」
フェルクルの首が、言葉を聞いた途端に動いたのが、ヘンヴァーレの位置からでもわかった。

彼女は明らかに動揺したが、それは一瞬のことですぐに冷静に言葉を返す。

それは実に、呆気ない言葉だった。

「そのことは……。別に隠していたつもりでも無かったのだがな。……言う機会が、訪れなかつただけさ」

言葉紡がれ終わるより早くフルーチェの気配が膨れ上がりシャキリと鉄の交錯音が室内に流れ、一瞬緑の光りは鮮血の赤へと変化して女の首が切られ血が撥ねたのかとヘンヴァーレは錯覚したが、そ

れはやはり錯覚であり、鮮血の赤もすぐに緑の光りに戻っていたし、鉄は交錯音を鳴らされただけだった。しかし実際、フルーチェの気配の膨張から窺うに、まち針の女が今その瞬間に首を切られてもおかしくは無さそうだった。だからヘンヴァーレは言葉を放っていたのだらう。

「駄目ですよ、フルーチェ！」

「こいつが大切なことを大切じゃないと独断してみんなに話さなかった！ 話していれば、こんな光景を見ずには済んだのかもしれないだぞお！ だとしたら、こいつを殺さなければならぬと思う俺の心は間違っているか、どうだヘンヴァーレ！ 教えてもらう必要はないぞ！ 俺には判断できる！ これは八つ当たりなんかじゃねえ！」

「でもあなたは迷ったから鉄を彼女に突き刺さなかったんですよ！」

「違う！」

「違いはしません！」

「じゃあ俺はこの状態をどうすればいいんだ！？ どうしようもないくらいに俺はこいつを殺してしまいたいし、もう自棄になっているから外に飛び出て怪物に食われちゃってもいいとも思ってるんだぞ！ お前だって仲間が一斉に死んでおかしい理不尽だと感じていないのかよ！？ 俺は救わなきゃいけない連中を一斉にして、一瞬にして、全員失っちゃったんだから、そのやるせなさの行き場は簡単には見つからねえじゃねえか、ああ！？ 俺は、医者なんだ、変態であるその前に俺は一人の医者だ！ そういう医者として、こいつらの命を救いたかったんだよ！ わかるだらうヘンヴァーレ！」

鉄が勢い良く振り上げられた。自棄になっている腕が、一人の女の首元目掛けて、振り下ろされていく。緑の光は、再び赤く染まり、皮膚と肉を突き破るような音が聞こえて来る予感を増やさせる。

そして鉄は、パプテガの手によって止められた。

意識が朦朧としているのだらう、ヘンヴァーレの視界から見る彼の背中にはふらつきしている。だが変態医者の鉄を持った手首を握り締

めている彼の掌はしつかりとした力を持っていた。

コアの光はまたも緑へと戻り、フェルクルの首は貫かれず、自棄になっていたフルーチェも漢であるパプテガの右肩部分が激しく血を滲ませているのを見て、冷静を取り戻したらしく皺を減らしのっぺり顔へと変わっていく。

まるで焦点の合っていない両眼の漢は、倒れる寸前に、誰に伝えるわけでもないように言葉を発した。

「……悪い……のは……おれ、さ……殺すなら……」

そして、右腕が肩から無くなっているその身体を床に倒した。

東より来たる

長い夜が明けようとしている。

わずかに風が吹き、地平線より星を一回りした太陽が円の形として姿を現す時刻がもうすぐ訪れる。紅の瞳をしている怪物たちの遠吠えは鳴りを静め、陽の上昇を崇めているから口を閉じているかのようにでもある。宗教的なことに似通っているその行動を怪物たちがやるとは想像に難しいが、少なくとも砂丘の空気は神が降臨しても不思議ではない澄み切った大気。少なくとも人は太陽の昇り上がる時を、神が現れる瞬間であるかのように待ち侘びているのは、澄んだ空気の中で亡骸に宿っていた魂たちの浄化が達成されることを願うから。魂の容器はいまや火と煙と化し、むせるような臭いと共に夜空へと舞い上がっていく。うすらいでいる黒の色で、やがて濃黒に混じっていくそれらは視覚で捉えることができなくなり、魂の在り処を定かにさせなくする。だから容器にてまだ残っている人々は、大気中や砂の中あるいは草むらの中に姿を定かにしなくなった魂が隠れているのではないかと想像したくもなる。己もいつか魂の容器を火や煙に変えて、姿を視覚から外れたものにするのは確定的だからそう思いたいのかもれない。しかし彼らは、今、その思いを口にはしない。

その代わり、歌は歌われた。

追憶の歌、というのは気安いだろうか。

現実、というものは魂の容器に納まっている限り、姿形を保っているいわゆる視界の奴隷たちに束縛され続ける日々である。それを普遍として魂を平安なものにする。或いは激情的なものに。

とにかく生き残った数人は、まだ生きる意志を持って呼吸をしている。

緑の光を発するコアが音を鳴らす、小型船舶の中で。或いは、生命の潤いを妨げる砂丘の中で、或いは、遙か広大なる一つの世界の

中で。

「パプテガだから生きているんだろぅなあ。これは俺の力というよ
りかは、そういう感じだ。鎮痛剤は打ったがそれでも痛いだろうし、
気持ち悪さもどうしたって湧いてくるだろうさ。寝ているだけで精
一杯、というか、それが出来るなら十分だ」

「だからってこんな拘束を……」

「するのが本人の為だ。生きてるだけでも儲けもんなんだぞ？」

「それは、そうなのかもしれません……」

「お前は身を挺してパプテガに助けてもらったから引け目を持って
しまつてるんだなあ。だがそんなものは今は封じ込めておけ。前に
進まなきゃ、全員すぐにもお陀仏しちまうのが今なんだからよお」
「わかつてはいます」

「なら陽が昇つてからすることは決まってるぞヘンヴァーレ。パ
プテガが怪我をし、人がいなくなり、キリサメもいない今、戦力と
呼べるものは皆無に等しい。マザービルディングが器を作り出して
私達に牙を剥くのがまだ続くのだから、どうしてもそれに対して抵
抗力がある」

「…それは、わかりはしますが」

「意見があるなら言ってもいいぞ。それが真つ当な意見ならな」

「……」

真つ当な意見などありはしないだろう、とフェルクルに言外に突
きつけられている気がして彼は悪い気分になる。ヘンヴァーレは反
発心に近いものが引き起こされるのに任せて座っていたシートから
立ち上がると、意見を述べようとす。が、上手く纏めることが出
来ず 真つ当な意見が無いわけではなくて、ただどう切り出せば
いいのかわからなかった 立ち上がった後には、そこら辺をうる
うるすることしか出来なくてやるせない。ふと、シートに眼をやる。
力持ちの女が座っていて、ヘンヴァーレのことをジッと見ていたそ
の黒眼。死んでいた眼。ヘンヴァーレはその場に固まってしまい、
帽子の羽に手が伸び、それを指でいじくる。

そんな彼の様子を見ながら、フェルクルも身を沈ませていたシートから立ち上がる。

「……陽が昇ってきたら、キリサメ　ハク、生き残っている誰か、コートマシンの骨組み、そのいずれかを見つけるための外出だ。死体が見当たらなかつたのは、イネ老人、フン神父ドン神父、マルーダ、の四人でいいんだっただな？」

床にて胡座を掻いて瞑想のような行為をしていたフルーチェが眼を開いてから、

「そうだ。勿論、跡形も無く消されたということもあるがな」

とハツキリ述べた。徹夜のせいだろう、瞳がひどく充血している。フェルクルは疲れ気味なフルーチェが使い物になるのか値踏みするかのように目を細めていたが、やがてそれを止めると太陽が昇り上がるだろう、今は夜空の東の方へと顔を向けた。

だがそれはわずかのことで、彼女は踵を返して今は深海の青になっっているコアの方へと近づくと、ずっと隠し持っていたのだろう、青の翻訳機を白衣の中より取り出して、何事かをぶつぶつと話し掛け始めた。相変わらず、人間に対応する時にはまったく考えられないほどの慈愛を帯びた声付きなので、フルーチェはそれがおかしく感じられヘンヴァーレの方に顔を向けて意味を含んだジェスチャーを密かにした。だがヘンヴァーレは何事か考えているらしく、羽をいじくっていて、反応が悪い。仕方が無いのでフルーチェは再び瞑想を開始して、自らの脳味噌が発する想像と創造の世界に入り込んだ。脳の中で、蛙星人や蛞蝓星人と戦ってそして勝ち続ける創造を繰り返す。

そして彼がタコイカ星人を退治している時に、何事かを考えていた男が羽をいじくるのを止め、「フェルクル。思っんですけど」と口を開いた。青の翻訳機に意識を傾けていたまち針の女は、それを邪魔されたので不機嫌な返事を数秒後に返した。「……なに？　なんか、言ったか？」

研究を妨げたからということだろうか、それは随分と恐ろしい言

い方だった。不機嫌の象徴みたいだと言っても言い過ぎではない。ヘンヴァーレはそれに気圧されるのを防げないらしく口をわずかに閉じたが、しかしすぐに開いた。

それは真つ当な意見だった。

「付き合いは僕の方が長いから、信憑性はこちらの感じ方にあると思いませんか？」

「何が言いたいんだか短い言葉で纏める」

「怪物に襲われる危険を冒してキリサメ ハクやコートマシンの骨組み、そして姿の無い四人。僕は全て待っていれば帰ってくると思っんです。ここが家のようなものだと感じて、帰ってくると思えるんです。仲間達が」

「びびってるだけじゃないのか、怪物に？ それと、コートマシンの付き合いは私の方が長い。断然に、あるいは、断トツにな」

「コートマシンはコアを求めたのでしょうか？ だったら尚の事、その光を求めてやってくるに決まってるんですよ。キリサメ ハクと生きているかもしれない四人だって、仲間である僕らの元に今だって向って来ているに違いないんです。だから……」

「探しにいかなければならぬだろうが。奴らが道に迷っているということもある」

「ですけど、ここに辿り着いた時に、仲間たちが誰も出迎えないというのは、きつと駄目なことだと思っんです。僕は感じるんですが、きつと彼らを待つべきじゃないかって、そう思えるんです。びびっていると受け取ってもらっても構いません。びびってる所も多少ありますから。怪物に牙を剥かれた時、殺される、死ぬ、つてのは恐ろしいことだと思ひ知らされました。そしてパプテガさんに救われた命で、砂丘の恐怖をくぐり抜けて船に辿り着いた時、暗闇に等しい船内に辿り着いた時、フェルクルは悲しかったでしょう？ 首元に刃物を突きつけられるなんて、嫌だったでしょう？ 僕は、死んだ両眼で出迎えてもらうよりは、やっぱり、生きている人に出迎えてもらいたかったんですよ。そう思っのって、おかしなことで

すか？ 僕らは、迎えるべきなんじゃないでしょうか。いずれ砂丘の恐怖を潜り抜けてここに帰ってくる仲間達を、この眼、で」

彼が全て言い終えた後には、フェルクルもフルーチェもただ眼を丸くして、何も言わなかった。コアのどくん、どくん、という深海の青の安らぎだけが、小型船舶内で鳴った。

東より陽が昇り始めて、コアの灯りだけではない光が砂丘中に蔓延するようになって影もたくさん生まれる。三人は目映い東よりの太陽に照らされて、眼にも光を宿す。

「まあ、いいんじゃないか」眺めながら、フルーチェが言う。

「……………」無言のまま、フェルクルは近くのシートに座り、足を組む。

ヘンヴァーレはその様子を見て嬉しそうな顔になった後に、すぐに引き締まった顔を作ると彼もシートに座った。

陽ざしが更に強くなってきた頃に、誰かが言った。

「…希…………望が…………」

かすれた声が消えて行くと共に、太陽の光を背にして何者かが船に近づいてくるのを最初にフェルクルが確認した。赤いような、黒いような、そういう人の影だったが、しばらくはその正体をキリサメ ハクのものだと思えなかったのは、白装束を身に纏っているものだと勘違いしていたからだ。実際のキリサメ ハクは、多くの返り血を浴びていまや赤黒い全身として染まっていたのだ。

そして船に近づくのは彼女だけでは無かった。それが近づいてくるのをはじめに察したのは hotalubi のコアで、察知したことで深海の青から色を転じさせ、緑の光を室内に灯す。それによって三人ともコートマシンも現れるのではないかと心に過ぎらせたが、その予感 は現実のものとして地平線より向って来た。無骨な骨組みを大気中に晒しながらも、緑の粒子を周辺に纏いながら空を飛んでいる機体が、心臓の音と光を頼りにして現れたのだ。

彼女らを迎え入れるための言葉は、当然、あの言葉の他にはあり得ない。

三人は大穴の前に立ち、近づいてくる影に向って一斉に声を掛け
た。

「おかえり」

船の中で希望が甦り出したと感じはじめた漢が一人、ほとんど意識を失っている状態にも関わらず白い歯をニツと唇の隙間から浮き出させる。

陽を背にしている者から返事が返って来ると共に、希望が湧き上がる。

hotaiubiのコアは、力強く躍動していた。

どく、どく、どく。

どく、どく、どく。

どく、どく、どく。

ヴェゼとペギーの男女

hotalubbiの心臓の音など聞こえない場所。静寂を好み、生物から発される音などすぐに吸い込んでしまう閉鎖的な空間。足音さえもほとんど耳に入らない。

男と女は身を寄せ合いながら、天蓋付きのダブルベッドに一糸も纏わない姿で横になっっている。互いに懸命に愛撫し合い、男のそれは情熱的で、女のそれは情緒的である、という風に見えなくもないが、懸命なのは確かだ。閉じた空間で、音が吸い込まれる部屋で、その男女は互いが互いの思うがままに己を主張し封じ込めていた欲を解き放っている。例えばそれが野外で行われる愛撫だとしたら全く自重されない音がそこら中に響き渡っていたと思えるので、力強い営みなのは間違い無い。その二人は懸命であり必死と言い換えても良い。だが、男と女では、その必死となる理由は違っている。女は薄々そのことに気が付いており、男の方に至っては元々その前提で情熱を放出していた。そもそも男は女が何を求めているのか、コアを通じて把握しているのだから女にしてみれば全てが隠せず筒抜けにしているということであり、また同時にそれは、全てを相手に委ねても良いのではないかと思える要因にもなる。だが、女にとって不満なのはそれが実に一方的なことであるという点であり、女の方は一度たりとも男の心を覗いたりなどしていないのだ。ただ直感的に心底を理解されたことに感動し女は身を男に委ねたが、ふと冷静な瞬間が訪れれば、果たして男はその理解を持続的に持ち続けてくれるだろうかと疑問に思うのは当然のことで、そしてその証明は愛撫で示してくれているとも言えるが、しかしそれは表向きの偽装ではないかと言えらるだろうか。少なくとも女は男の情熱は偽装ではないかか疑いを持つ。もしくは、男は女を見てはおらず、別のもの、例えば男によくあると言われるひた向きな性欲。己の欲を満たすための衝動的な行為。それは愛撫ではなくほとんど自慰と変わらないじゃな

いか、と女は、男の身体をいじくり回しているその時にも胸奥では男を疑っている。計っている。だから女は自然、情緒的な動作になる。複雑性を抱えて、己の行動に迷いを持ちつつも、しかし欲求が全く無いわけではない、が、深入りをしたいと思えず、数時間前に自らが選んだこの道を、わずかに後悔することさえ始めてしまう。

そして女は自らでコントロールできないその複雑性によつて、自らを締め付けてしまう。自らを混乱させてしまい、情緒的から飛躍して、普段の、気狂いによる発散を行いたくなる。しかし女とてその耐える心をまったく持っていない訳ではないし、状況も状況であるから、普段平気で犯す失態をするまでには至らず、裸身のままの交わりを止めたりはしない。乳をいらわせたり、唇と唇を重ねたりする。唇が離れた時、女は男に尋ねる。なるべく色っぽく。

「ねえええええ？ 私、悪くないですわよね？」

男は女の眼を見たままに答える。

「ああ…。わざわざ答えるまでもない」

「あらあらあ。そう、それはそうよねえええ…」

「何か、嫌だったのか？」

「そういうわけじゃないわよお勿、論。良いわ、とてもねえええ！」
「それなら、構わないな」

男はやり取りを受けてさらに情熱的に動き始める。女はその享樂を受け、あえぎながらもふと頭に考えが過ぎり、丁度良いタイミングを見計らって言葉を発してみようと思つた、が、男があまりにも情熱的なので何も言えなくなつてしまう。

終わつてからでいいか、と女は享樂的な脳味噌になつて、しばらく楽しんだ。

男女は大きな声を出していたが、その空間では音は次々に吸い込まれていくから、実際にはほとんど無音に近い。

何故そういう仕様になつているのか女にはわからない。何故男がこんなに情熱的なのかもわからない。何故自分が男にこんなに簡単に身を委ねたのかももうわからない。何故男がプロトノアの面々を

殺したのかもよくわからない。フェルクルがこの男に何をしたのかもよくわからない。

その女はわからない尽くしのせいで心をさらに複雑化してしまう。気を狂わせたい、と現在の発散とはまた別の発散をしたいと胸奥が欲求していた。

だが唇は、うふん、と呻きを漏らす。

衣と肌を擦らせる音をかすかにたてながら、裸身を離れゆっくりと衣服を身に付けていく。

ペギーは腰を下ろしていた天蓋付きのベッドから立ち上がる。そして周囲を窺う。

「すごい所にきたわあ……」

ヴェゼはシャワーを浴びてくると一言残して空間から出て行ってしまったので、ペギーは自分の気分が赴くままに三百六十度を見やる事が出来た。

そこは実に荒廃している。

まず天蓋付きのベッドにしたって刃物を差し込まれたような亀裂、裂かれているベール、汗臭いシーツなのだから、かぐわしい香りの美麗なる空間であるはずが無い。が、荒廃具合はそんな程度ではない。例えば、ペギーは視力が良いから見えるのだが、壁の中にて、蠢いているゴキブリがいる。ゴキブリと言っても、見た目が茶色くて油切っているという程度しかわからないのだが、しかしペギーは幻聴ではなくハッキリと、かさ、かさ、という耳障りな音を聞いた。

彼女は置き場に困るかのように指を唇のふくらみに当てて、その姿勢のまま、かさ、かさという音が鳴るほうへと足を進めていく。その途中で、靴下も履いてない裸足の、その甲を何かが這って通り

過ぎた、こそばゆい感覚が走って微弱な電波が踊る。身が固まる。百足だろうか…、と過ぎる。

羽音か、はたまた虫と虫が擦れ合う音か。所々が朽ち果てているその壁から、かさ、かさという音は途切れることをしない。音が吸い込まれる空間でも聞こえるその夢中な音にペギーは興味を持たされ、歩みが本人の気が付かない内に早まっている。そして壁の前で止まる。かさ、かさ、と音は続いている。彼女の足の甲を再び這う虫が道にして過ぎる。それに全身をわずかに震わされてから彼女、唇から唾液をわずかに垂らし、指でそれを掬って纏わせる。唾液の付いたままの人差し指の、その先端を、恐る恐ると言った速度でかさかさに近づけていき、ある地点まで指が壁に接近したところで、思いつきりと言った躊躇の無い速さで指を壁に突っ込んで見せた。がさがさがさがさがさがさがさがさがさがさがさがさがさがさが。羽音と擦れ合う音と混ざり合った激しいゴキブリたちの奔流がペギーの二の腕を伝い出して、胸、身体にまで至ろうとする。がさがさがさがさが、容赦など一欠けらも無い暴走、疾走。「ひっ、ひ、ひ、ひっ、ひ、ひ」ペギーは慌ててそれらを払い落としてから、もう一度指を壁に突っ込む。がさがさがさがさが。ゴキブリがまた騒音を発する。が、彼女は今度は、ゴキブリが胸に来ても身体に來ても、それを払おうとしない。両眼は一心に壁のその奥へ向けられていて、彼女はゴキブリ以外の何かがそこにあることを見出しているのだ。

全身がゴキブリに覆われた頃に、ペギーは唇をほとんど動かさずに感嘆の声を上げた。

「…とれたああ…」

口内にゴキブリが入ってきそうになってむせるが、その掌には捕獲した獲物がしっかりと握られている。ルビーのような色遣いときらめきを持った、しかしビー玉のように小さくて丸いもの。ペギーはそれをゴキブリの隙間から視界に捉え、それに群がっていたゴキブリを払いのけそれを奪い取ったのだ。だが獲物を掴んだからと言

つて茶色の油切った害虫、ゴキブリ集団が引き下がるということはないので、ペギーの身体は全身が茶色く油切っている、人の形をしたゴキブリの集合体としか見えない外観となる。

しばらくの間、女の人が虫に貪られているかのような状態が、その空間の風景として在った。がさがさがさがさがさ。音はしばらく止まなかった。

空間の天井。そこに、ぼろ布を一枚肌に通わせているだけの女神像がある。

金属で構成されているが、黒ずみだらけで、元々整っているはずの卵型の輪郭の顔半分が砕けていて、天井と接合している部分にヒビが入っているから今にも落下してしまいそう。その女神像が人の形をしたゴキブリを見下ろしている。歪んだ、片方が欠けている表情で。陽が差し込まれないその照明は仄かなもので、広い空間であるにも関わらず、数個のランプが置かれている程度の灯火。だからこそ妖艶な気配を持ったまま、人の形をしたゴキブリは光と影を交錯させている。

やがて空間に男が入ってきた。肌の色は白いが、着ている服は黒の割合が多い、皺の少ない整ったものだから空間の汚れとは対照的に綺麗。男は、ヴェゼ。ヴェゼは風を感じているような軽々しい歩き方で天蓋のベッド目掛けて歩いていたが、途中で、人の形をしたゴキブリが仄かな灯りの中で、やかましく蠢いているのを知る。彼は一瞬だけ眼を大きく見開いてから、すたすたとそれへと近づき、人間にはわからない言葉を紡ぎこぼした。

蠢くばかりだったゴキブリたちが女の身体から離れ、床に散らばって胴をひっくり返して足をわなわなさせた。最終的に、ピクリとも動かなくなつたので、完全に昇天したのだろう。女はしばらくレスリングをしている人に似ている体勢のまま、眼も空气中を凝視しているような感じになっていて死んだゴキブリと同じくらい動かない。それを見計らつたのだろう、ヴェゼは指と指を擦らせてぱちん

と愉快的な音をならした。すると、女ペギーの粘液みたいなのが所々にへばりついたままの汚い体が、レスリングの人の体勢のままに宙に浮かび、宙に浮いたまま天蓋付きベッドにまで運ばれた。

宙から下ろされた彼女は、それでも石塊のようにわずかも動かなかつたが、再びヴェゼが呪文と言つてもいい言葉を紡ぎこぼせば、

「ペギーは何か憑き物を取り払われたかのように突如として元気になつて、びたんびたん魚みたいにベッドを跳ねて埃を撒き散らす。だがそれをやがて終わると、レスリングの体勢と空気中を見るばかりの瞳を落ち着かして、普通になつた。普通の、普段どおりの気狂いペギーになつた。」

右手には、先ほど掴み取つたルビーだかビー玉だかを握り締めたままだが、それはヴェゼに呆気なく取られてしまう。

「それ、綺麗じゃないいい欲しいのよ。ちょうだい」

「寝ぼけてるのか？ お前にやれるものじゃない、とりあえずべとべとの身体をシャワーで洗い流してこい。臭くてかなわないからな」

「あららあ？ 少し冷たくなっているような気がしないでもないわよ」

「……ペギー。俺のことを信用してないな？ 俺の気持ちを信じ切れていないだろう？」

「そ、ん、なことはないわ」

「なら捻くれるな。お前がシャワーを浴びたら続きをしよう。……」

それとも、何もできない子供のように浴槽にまで連れて行って欲しいのか？

「いくわ、一人で行けるわよよそれは」

「なら、俺はここで待つ。……この宝石は、お前にはやれないのは、謝るよ」

「あらあやつぱりあなたは……」

感動したのだろう、ペギーはゴキブリの粘液の染み付いた体でヴェゼに歩み寄つたが、彼はやんわりと背後に下がって、やわらかい

仕草で浴槽の方へ行くように彼女を促した。彼女は少し顔をしかめたが、自分の服に染み付いた粘液の臭いを嗅いでみたことで、すぐにもシャワーを浴びなければとようやく悟ったらしく、急ぎ足で浴槽へと向って姿を消した。

音の吸い込まれていく空間で、一人残されたヴェゼは、手にしているルビーかビー玉かの宝石を呪文の言葉を唱えることで宙に浮かすと、百以上のゴキブリの死骸も宙に浮かす。そして言葉を紡ぎこぼしながら、さっきと同じように指と指を擦らせてパチンと音を鳴らせば、宝石が先ほどまで納まっていた壁に一直線に向っていき、またゴキブリの死骸も壁の隙間を埋めるようにしてそこに納まった。もう一度ぱちんと音が鳴れば、死んだはずのゴキブリたちがまた蠢き出していた。

「ふん……面倒なことをわざわざする女だ……」

ヴェゼはそう悪態を付いてから、空間の中を暇を弄ぶかのようにしてうろろると動き回ってから後に、ふと何かに気が付いたかのようになり天井を見上げて、金属で出来ている女神像を見やった。その半分崩れている顔を、元々が切れ長の眼をさらに細めながら見上げていたが、やがて天蓋付きのベッドに眼をやり、最後にペギーが走り去っていった方角を見やる。

「まあ……悪くは無い、がな……」

彼はそう独り言を呟いてから、ベッドに腰を下ろし、軋ませた。

少しの間、夢想をしているような柔らかい表情になっていた彼だったが、ふと何かを思い出したのだろうか表情が硬くなって、曇る。切れ長の瞳が、全てを凍らせるかのように冷酷だった。

夢夢夢

夢夢夢。

境界線が乱れて現を正確に認識できなくなったから幻に紛れ込んでいる。

蛆のように小さく、彩りが無規則的で様々な幼虫がひらべったいお皿にて溺れているように見えるが実際に溺れているかは定かでない。透明な水の満たされているお皿の底で、小さな泡をぼこぼこと浮上させている。

そのお皿を見下ろしている一人の少女がいたが、少女は朽ち果てた骨の姿となっていて、所々の骨が欠けている。少女というよりは、未発達な白骨と言ったほうが的確だろう。その白骨が、ひらべったいお皿を見下ろしている。皿の底で泡を出すばかりの幼虫の賑やかなる群れを、じっ、と穴の開いた黒より見つめている。眼球は無い。

空も陸もないような場所だった。歩く場所も、浮き上がる場所もないような場所というのが、そこだった。あまり多くの物がありふれる場所ではなく、白骨とひらべったい皿と幼虫、そのような物があるだけで、地上も蒼空も無い、実に錯覚的な幻に満ちている風景でしかない。

そんな風景の中で、白骨は平べったいお皿から眼球の無い眼を沿らすと、小首を傾げる仕草をした。カチャ、カチャ、と首を左右に何度も動かすので、何かを思い出そうとしている仕草だと思える。実際、未発達の白骨は忘れてしまったことを思い出したく願っている。それは、名前だ。

すっかり忘れたのだ。首を傾げながら、白骨は己にまだ血肉があった過去へと思いを寄せることで己を指し示す証の一つである大切な欠片を闇より拾い上げたく願うのだ。しかし過去に他者が自分の名前を呼んだ瞬間を音声にして汲み上げようとしても、何故か名前

の部分にだけ霞がかかって聞き取れない。霞なのに視界ではなく音を妨げる。例えば赤ちゃん服を着ていたトナカイ人形、例えばサイズの合っていない執事服を着ていた白熊、例えばジャガイモの輪郭をしている口うるさい隣人、そのどれもが彼女の名前を過去というセピア色の中で呼びつけてくるが、名前はやはり霞に邪魔をされて彼女には伝わらない。教えて、と頼んでも霞がある限りは無駄なのだろう。幻の渦中で見やる夢はどんどん変貌を繰り返していくから、過去を思い返すことのできる時間だって何時まで確保できるかわかったものではない。霞を取り払う暇だって……夢は深層へと落ちて行き、過去がほどけて緩やかな楕円の形になって霞んでいく。名前だけでなく過去全てさえも忘却に塗れて、緩やかに緩やかにと個としての結束をほどいていつてやがて存在していることにすら耐えられなくなって押し潰れて弾ける。この観念的な幻の中で、未発達の白骨はさらに頼りを無くしていつている。過去が失われたせいで、白骨という個も少しほどけて結束をゆるわせていつてノイズがざらつく。ざー、ざー、と波しぶきのようでもある雑音に痺れさせられながら気が付くと落ちていく、何処へと、それはわからないままに落下は速まっていき、カラカラの手は誰にも差し伸ばせない。関節がぷちんとちぎれて、指が五本まとめて浮上していくように見えたが、白骨自身が落ちていくからそう感じられただけの錯覚。ノイズはやかましさを増して行き、ざー、ざー、ざーととめどなくなつて痺れは痙攣へと昇華し白骨は瓦解していく。緩やかに、存在を消す準備を始めたかのように。しかし境界線の歪みはさらに深化して、その幻にあったルールが存在として圧縮されて影響力の皆無たる小粒と化した。だから未発達の白骨さえも、未発達の白骨として認識される状態にならなくなつていつた。

そしてやがて、少女は再び、道の上に立っていたのだ。

名前はいまだに思い出せないが、ほどけた過去は戻ってきたので安心する。ルールが圧縮されたからだろう。少女は骨でもなく、血肉を保ち、個として優れた力を持った結束を得たから、平気で歩き

出すこともできる。過去の記憶で歩いたのと同じ、骸で敷き詰められている道を進み、飢餓の幼虫たちに悪態を付く。薄茶色の渦とて先にあり、道はぐねぐねと曲がっていて彼女を迷いの森に手招きしているかのよう。少女は忘却した名前が、渦の辿り着いている場所に封じ込められているかもしれないと思い付いて、歩を進めることを焦り出す。

凱旋門をくぐり、電波塔を抜け、アーチも抜けて、走り出して息を切らす。黄金色の蛾に邪魔もされず、渦の麓に呆気なく辿り着いてそこにうずくまっている存在を見た。うずくまっているよくわからないその人は確かに人であったが、どうせ緑の粒子となって飛散し幼虫に貪られるだけなんだろう、と少女は存在をそう値踏みして早々に興味を渦の麓へと傾けた。が、消えていた。

消えていた。消えていた。消えていた。頭の中でエコーが三度響き渡ってから後、彼女はみるみるうちに感情が萎んでいくと危ぶみその危ぶみは膨れ上がっていき、危ぶんだことは夢想の中の現実で事実となってみせる。内奥にて、潤っていた情緒的林檎が、しなびた林檎になっていくというのは、自らが老婆か魔女にでも陥っていくような墜落を味あわせられたのだ。

彼女は何か、渦の代わりに何かを見つけたく思っただけで渦の麓に他に何かがあるはずはないかと探った。だがそこはただの平地で、そして灰ばかりが地面を構成している死の土地だから、何も無いような空しさ。遠目に見た時に、薄茶色の渦はずっと向こう側で廻転を止めなかったというのに、迷いの森を抜けて辿り着いて見れば、実質あるのは灰燼だけで薄茶色の渦は人寄せのための偽装でしかなかった。少女は気落ちという名の、絶望、を己の名前としてあてがおうかと思いつく程に気分が荒み、やけくそになって灰を掴み取っては幼虫たちに放り投げるといふ謎の暴挙を行う。灰を掛けられた幼虫たちは威嚇なのだろう、赤黒い菌茎を少女に見せつけるが所詮、道の中に入ってくることは出来ないようだったから、彼女はほくそ笑むと調子付いて、灰をさらに大量に、さらに激しく、幼虫に投げつけ

るようになった。すると、幼虫たちは成す術が無いのだろうか、どんどん怯んで行き、みるからに弱っていく。齒に灰をくっ付けながら、腹ばいになって仰け反ったりする。荒んだ心の彼女にその光景はストレス発散としては最高だったので、さらに悪い笑みを浮かべながら彼女は灰を投げ続ける。

だが当然、調子に乗っていられるのはわずかな間だった。突如として音が鳴る。

ピーパンパンパラスカポツチャ。ピーパンパンパラスカポツチャ。ピーパンパンパラスカポツチャ。ピーパンパンパラスカポツチャ。ピーパンパンパラスカポツチャ。ピーパンパンパラスカポツチャ。ピーパンパンパラスカポツチャ。

いや、鳴るといふよりは発されているのだ。道の外に佇んでいる色彩やかなる幼虫たち全てが数匹ずつで一つの音階を担当しているらしく、つまり全ての幼虫が息を合わせることよって一つの演奏が為されている。蛆たちのオーケストラ。灰を投げつけるのが危険だと気が付かざるを得なくなった少女は、何が現れるのだろうか不安を抑えることが出来ずに周囲をキョロキョロと忙しく見回す。すると遙かな遠景に、かすかに、薄つらと白く何かがいた。

それは巨大な蛆だった。一匹の、天を衝くかと思紛う全長を誇る蛆虫が、蛇行している道のことなど物ともせず、すべてを突き抜けて、少女の立っている方角へと一直線に這いずって来ていたのだ。汚らしい粘液のべちゃついているような音と、齒を噛み合わせる音だろつガチィィ、ガチィィという聞くだけで足が竦むような音を発している。

少女の持っていた灰が力無く地面にこぼれ落ちて行く。彼女はあまりの出来事に頭が真っ白になった。真っ白の頭に、幼虫達の合奏が入り込んで反射して回る。

ピーパンパンパラスカポツチャ。ピーパンパンパラスカポツチャ。ピーパンパンパラスカポツチャ。ピーパンパンパラスカポツチャ。ピーパンパンパラスカポツチャ。ピーパンパンパラスカポツチャ。

ピーパンパンパラスカポツチャ。

や、やめて……。ご、ごめんなさい、蛆虫さんたちごめんなさい……本当に……

しかし騒がしい合奏は彼女の鼓膜を突き抜けて脳味噌を躍り回る。巨大な蛆虫は距離を近づけてきていて、薄っすらとした白は体色ではなく霧によるものだと思われる。巨大な幼虫は、実際には極彩色でけばけばしく、凶暴的な配色。

ピーパンパンパラスカポツチャ。ピーパンパンパラスカポツチャ。ピーパンパンパラスカポツチャ。ピーパンパンパラスカポツチャ。ピーパンパンパラスカポツチャ。ピーパンパンパラスカポツチャ。

幼虫たちの演奏は続く。それが少女の脳味噌を混乱させる。巨大な蛆虫はさらに巨大になる。歯と歯が噛みあわされる音は残酷性を暗に示す。喰われると想像する。身体を上から半分、噛み千切られて腸が飛び出すイメージをしまい混乱が深まって遂に、何かの一線を超えた。

その一線の先では、演奏は聞こえてこない。耳鳴りのキーンという音だけが在る。少女はそこに楽園を見た。誰かが手招きをしている。それは彼女の名前をたしかに呼んでいる。繰り返し、繰り返し、耳鳴りのせいで聞き取れない耳に、必死に呼びかけてくれている。少女はそれに応えようと思って、その人が繰り返す唇の動きを、真似して、自分も唇を同じように動かしてみた。何回も何回も。そして彼女、忘却に沈没していた己を指し示してくれる大切な証を、自分の名前が何であったかを、何文字で構成されているかを、どういう響きであるかを、自分の唇から漏れた言葉を鼓膜に震わせることだと思い出した。メ、メ、ル。

向こうにいる誰かが、拍手をしてくれている。おめでとう、と祝ってくれていた。メメルは嬉しくなって走り出して、誰かの背中を

追いかけていく。背中はずぐに大きくなった。その誰かは、とても足が遅かった。メメルは足が遅いという事から、この誰かは、今は別れてしまった人形の生まれ変わりなんじゃないかと勘が冴える。その背中を背後から抱きしめて、メメルの方にその人を振り向かせるとキョトンとしていて幼い、しかし整った顔立ちの男の子だとわかった。だからメメルは先ほどの勘が当たっていると殊更に強く思うから、

あなた、トナツト君。トナツト君だよ。

と少し涙ぐみながら、男の子を力強く抱きしめた。

トナツト君と呼ばれた男の子は、整っている顔を少し戸惑わせてから、

自分じゃ名前を思い出せない…僕は……。

と実に不安そうに呟くので、彼女は先ほどよりも声量を上げて、何度も叫んだ。

トナツト君だよ！ トナツト君、トナツト君なんだよ！ あなた、私の名前を知ってたんだから、そうなんだよ！ 間違いないよ！

男の子はそれでも晴れやかな顔つきにはならず、むしろ陰鬱気味な様子に近いまま。だけど男の子はひとまず納得したのだろうか、或いは、人肌の温かさに気が緩んだのだろうか、眼を閉じて彼女を抱きしめ返した。

境界線はそれを契機にようやく整ってきて、幻と現が入り乱れて訳のわからなくなっている不明瞭が、一つの現実という方角へメモルの意識を引っ張っていく。

彼女が眼を覚ました時、視界いっぱい広がっていたのは、のっぺり顔。

メメルと彼の願い

「今もつとも優先しなければならぬことは件の男の抹殺だとフェルクルは言う。俺もその通りだと思う。キリサメがいてコートマシンもあるのだから、戦力的にもいけるのは間違いない。キリサメは言わずもがなだし、コートマシンは天才研究者の作った内のもつとも最新なる兵器なのだから、過去の兵器に敗北することなどあり得ないだろう？ その：maria 動力を基調としたビルディングシステムと言う奴は随分と昔に作ったのだから。なあ」

天才研究者と呼ばれた女は、こくりと頷いてみせる。自分が天才と評されたことに対して謙遜する素振りさえ見せない彼女は、かつたるそうにしながら、自分の頭に突き刺しているまち針をぐにぐに弄くつた。メメルは、奇異なるまち針を刺した女を目の当たりにして呆気にとられる。あまりに気持ち良さそうにまち針をぐにぐにしているのも、もしかすると耳掻きみたいに気持ちよいのかなと思ってみたら、そのグロテスクな光景が、随分と微笑ましく見えるように変化した。

そう思ったのはメメルだけではないらしく、先ほどから言葉を発し続けているのっぺり顔の医者フルーチェは、

「何だかなああ。俺もそれ突き刺したくなってきたぞ、フェルクル」といっているので彼は変態なのかなとメメルは思う。さすがに突き刺したいとは思わないだろう、怖い、と。

フェルクルは声を掛けられたにも関わらず、まち針をぐにぐにするのがよっぱど気持ち良いのだろうか、涎を垂らしそうになって焦ったりはしていたがフルーチェの言葉はスルーする。

スルーされた側は寛大な心で、怒ることもせず、ごほん咳払いだけしてから言葉を続けた。

「年を重ねた年数は二百年以上だというのに外見は若々しいまま。全ての女が羨ましむくらの潤いを保つたまま生き続け、発明の為

に年月を費やしてきた研究者フェルクル。その彼女が百年前に作ったmaria動力とビルディングシステムが、何ゆえに砂丘の蟲の中に閉じられていたのか教えてくれ。異常災害が生じる以前から、蟲は砂丘に住んでいたということになるが……あれは明らかに怪物だ。フェルクルは、あの怪物さえも自分で作り出してみせたのか？」

フェルクルはまち針を弄くるのを止めて、真剣な顔つきに戻る。

「蟲は遙か古代より砂丘に生き続けてきている、世の中ではUMAとされていた生物だよ。あの蟲自体は、私が作り出したわけじゃない。ただ、あの蟲が一つの街を体内に留めてくれる入れ物になってくれるということは、私独自の調査という奴で理解してはいたよ」

「街一つをどうやって蟲の体内に入れた？ まさかフェルクル自身が体内に入ってそれをやるわけにもいかんだろう、なあ？」

「それは想像に難しいですね、確かに」

羽根付き帽子を被っている男が相づちを打つとフルーチェは「考えられない次元だよ」と苦笑した。

フェルクルは説明が面倒臭いのだろうか、欠伸を一つ掻いてから口を開く。

「たしか、水を数滴たらずとただの四角い固形が手ぬぐいになるっていう商品を見た時に、そのアイデアを引き起こされたんだっただな。百年前のことだが、その閃きの瞬間はいまだに覚えてる。何せ、なかなか爽快な心持ちにさせてもらったからな」

「四角い固形が手ぬぐい？」

「そう、角砂糖みたいな大きさの固形が、水に濡らすと膨れ上がって手ぬぐいの役割を果たしてくれる。それと同じ考え方をして、蟲の中に小さくした状態の街を入れて、蟲の体内にそれが入ったら膨張させる。これによって蟲の体内に一つの街が完成させられる。おかげで我々の世界から隔絶された、邪魔をされない閉じた体内にてビルディングシステムの実験ができるよ、思った」

「思った？」

「ある程度までは何の問題もなく実験は進んだ。大体百年間、人間

の一世代が生まれて死ぬまでの間、表立った問題が無ければ、私にとって実験は成功だった。だが連絡が途絶えた。マザービルディングが私にしなければならぬ通信が、一切届かなくなっただよ」
「だから、プロトノアに乗り込んだんですか？ 通信が途絶えたから、直接蟲から街を引きずり出そうと？」

「事故なのか故意なのか、それがわからないのだから確認をしなければならぬ。もし私に反旗を翻した時には抵抗力がいるから、そのために、開発中だったhotalubi動力を戦闘用にチューニングする必要が出たのは面倒だったかな」

「その力で蟲を退治した。そして閉じ込めていた街を地表に出した、と」

「ああ。まさか船を一撃で沈めることのできる砲台だとか、性能は低いが人型機械まで完成させているとは思わなかったかな。：名前はNils Olav。キリサメ、間違いないんだな？」

血を浴びすぎたあまりに赤装束になっているキリサメはシートに胡座を掻いた姿勢で座っているが、閉じていた眼を開く。

「そう言っているのが聞こえた。Nils Olav。あと、一機だけ、破壊をせずブースターを排除することで身動きを取れなくした。運ばはしないから砂丘に置いてきた」

フェルクルは、Nils Olavの話をするたびにわずかに反応を示しているメルという少女のことを見逃さない。Nils Olavの話題を出したのは少女の反応を見ためだった。

そしてフェルクルは、やはりコートマシンに乗っていたこの少女は、Nils Olavを知っているということとは、ビルディングシステムによって誕生した人間なのだと確信を深めて、心の内でひそかに喜んだ。

(maria動力……活力を得るための媒体に人を選ぶか……それにしても……やはりそういうものか……)

にやり、と唇を歪ませる。その様子を誰かに見られる前に真剣な表情に戻ると、フルーチェには任せたとばかりにまち針をぐにぐ

にさせるのを再開して、気持ち良さそうに緩む。

室内は一瞬、誰も喋らなくなったのでコアの青い光だけがどくどくと響いた。

フルーチェが話題を放る。沈黙が破れる。

「なるべく早いうちに、こちらから仕掛ける必要がある。パプテガという怪我人があるから俺はここに残るが、キリサメとコートマシンに戦ってもらわなければならない。コートマシンの操縦は、ヘンヴァーレとフェルクルのどちらかがやってくれ。その少女にやらせるつもりはないんだろう？ ただの女の子に操縦できるものじゃない」

「いえ、僕はまだ船外にいるだろう四人を迎え入れるためにここに残るつもりです。コートマシンの操縦は、フェルクルに行ってもらいたいです」

「私が操縦できるはずがないだろう。それと、ここにいる奴全員に操縦は無理だ。コートマシンの操縦はどうやら一人にしか出来ないと見える」

「どういうことだ…」

「その少女の身体に緑の粒子の気配がある。コートマシンが、彼女を気に入ったと見る。ならばその気配が彼女に操縦のやり方を教えるだろう。前の操縦者は少年だった。だからパイロットには女の方が嬉しいんだろう。しかも同年代のほうが嬉しいと来た」

「そういうものですか？」

ヘンヴァーレが思わず苦笑すると、フェルクルは皮肉気な苦笑を返した。

「そういうものだ」

メルは船内の面々から素性がよくわからないことを危ぶまれ両手を拘束されているが、そんな彼女は船員たちの会話を聞きながら、心の中で思う。

（緑の粒子はトナツト君なんだから、私の頼りになってくれるのは当然だよ。……この人たちと長いこと一緒にいたら殺されるかもし

れないし、早くトナツト君の所に戻らないと……。タイミングを計って……)

メメルは下手なことは言わず、口を閉じて一言も喋らないでいようと思いつながらパイプ椅子に座ったまま俯く。俯いたのは眼を誰とも合わせないようにするためだった。その俯いているのを見て落ち込んでいると勘違いしたのか、隣に座っている赤装束の女が、棒付きのキャンディーを差し出してきた。子供だと思って馬鹿にして、思っていたが口に無理矢理キャンディーを突っ込まれた。手を上手く動かさないから突っ込まれたままどうにもできず、もどかしく、咽喉が苦しくなる。その様子を笑われながら棒付きキャンディーを取り払われて口を自由にさせられた時には、思わず数回むせた。「イタズラだ。悪い」そう言いながら、その赤装束の女はべとべとになったメモルの口周りを拭き取ってみせた。そしてその時に、メモルの鼻腔に、棒付きキャンディーの砂糖の臭いとほまつたく種類の違う臭いが入り込んできたのだ。それはキリサメに染み付いたままの血の臭いだったが、それがメメルにとって忘れていた方が良かった瞬間を思い出させた。彼女自身が無意識のうちに封じ込めていて失わせようとしていた記憶が、フラッシュバックされて鮮烈に脳裏に映像として浮かんだのだ。

だからメメルは、口元を拭ってくれたその赤装束の女が、悪鬼である、ということを感じ出し、次々にNils Olavたちが斬り裂かれていた虐殺の光景、最後にNils Olavが突っ込んだ時に、悪鬼の怪しく光る眼に見つめられた瞬間があったことも思い出した。だから彼女は途端に、横殴りの雨のような猛烈なる不安に支配されて、呼吸をすることさえままならなくされた。

「いつ……………いう……………」

嗚咽を漏らさないよう耐えようとするが出てしまう。苦しそうなえびきが、フルーチェの言葉を聞いていた面々の注意を引き、またフルーチェも皆が自分の言葉を聞いていないことに気が付き、メメルがえびいているのを知った。

「どつした？」

医者であるフルーチェが尋ねたが、彼女はえづいたまま何も答えない。

ストレスによるものだろうという医者の判断で、メメルは顔色の悪すぎる漢パプテガの隣のシートに寝かされた。

船員たちの深刻さと熱気と緩やかさに包まれた話し合いは長らく続き、全てがひとまず纏まった時には全員に疲労が溜まった。作戦の開始は次にまた陽が昇った時を契機にするということになり、それまでの間は体力と鋭気を養うということで落ち着いた。ヘンヴァーは夜も眠らない決意で消えた四人のことを待とうと決意していたが、ふとした気の緩みで睡魔に負け、夜の深くなつた頃に瞼を下ろしてしまい、その瞼が上がらなくなってしまった。

ヘンヴァーが眠りに付いて夜もさらに深くなつた頃、心臓以外は全てが眠りに付いたように見える最も夜の深い頃であつたが、シートからムクリと起き上がった小さな影は少女のものだった。

他の船員が眠っている間にコートマシンに乗って街へ向おうと考えた彼女は、忍び足で、特に隣で眠っている漢を起こさないよう注意しながら船外へ出て、船のすぐ間近に止めてあるコートマシンの鳩尾部分に乗り込み、トナット君に話しかけているつもりで宙に声を掛けた。

「街に、帰ろう」

しかし返事は少女にとって嬉しいものではなかった。

『僕らに帰る場所なんてないよ』

「え……」

少女が息を飲むのも構わず声は忙しなくメモルの耳に響く。

『ヘッドマウントディスプレイを装着するんだ。その先に、僕達の倒さなきやならない敵がいる』

メメルは、戸惑う。

「敵……。敵なんて、いないよ。私達は街に帰ればいいんだよ。きっとそうすれば、何とかなれると思う。敵なんてそんなの、私たちに

はいないんだから」

『違うんだよ、メメル。僕たちにはやらなきゃいけないことがある。街に帰ることは出来ない』

「あなたはトナツト君でしょ？ 私に優しいことを言う人形なのが、あなたじゃない。なのに何でそんなにひどいことを言うの」

『……………』

「何とか言つてよ。優しい言葉を掛けてよ！ 敵つて何それ！ そんなの……………」

『いるんだ。あれを倒さなきゃ、駄目なんだ』

「意味がわからない！」

『わかるんだ。わからなくちゃいけない。さあ、ディスプレイを付けるんだ。そして前を向いて敵を見るんだ、メメル。力をコートマシんに貸してくれ。力を引き出すのは、僕が手伝うんだから』

「……………」

『君は心が動くに合わせるだけでいいんだ。僕が君の心を動かしていく。それを同調させて行けば機体は力を増して行く。その力で、敵を倒す』

「あなたはトナツト君なのに……………なんで、そんなに敵を倒すことにこだわるの？ 同調つて何？ 力つて何？ なにもわからない」

『……………』

「ものわがりの悪い子供だつて思ってるの？ 何も言わずおとなしく従えつて思ってるの？ でもね仕方が無いよ！ 誰だつて混乱するよ！ 帰りたいよ！ 帰ることの何が悪いつて！」

『……………それは悪いことじゃない。帰りたいつてことは、悪い事じゃないさ。だけど、僕はこだわらなくちゃいけないことがある。僕たちには、あるんだよ』

「あなたがそうしたいだけでしょ！？ 私は帰りたい！ 僕たち、なんて言わないで！」

『……………そうだね。確かに、それはそうだ。……………なら、お願いということにしてくれないか？』

「お願い」

『そう。僕のお願いを君に聞いて欲しい。僕はあいつを、敵を倒すことにこだわりたい。……………心臓を守りたい。そのためには肉体が必要なんだ。僕の手だけでは、心臓を守ることは出来ないんだ。だから、君の力を借りたい』

「……………そうなんだ。心臓を守りたいんだ。あの、船にあった奴だね」

『そう。僕は、あれを守らなくちゃならない』

「あなたはトナツト君なの？」

『……………僕はトナツト君じゃないよ。きっと』

「それ嘘だよ」

『本当だよ。僕はそういう名前じゃないんだと思う』

「じゃあ何ていう名前だって言うの？」

『それを思い出すことは出来ない。だけど、違うんだ。名前は分からないけど、しなくちゃならないことはあるんだ。そしてそれが、コアを守るってことなんだ』

「……………」

『ごめん』

「……………」

『でも、力は貸して欲しい』

「……………」

『信用ならないかもしれない。でも……………』

「…私の願いを、聞いてくれる？」

『え？』

「あなたの願いを叶えるために力を貸してあげる。トナツト君じゃないあなたは確かに、ちょっと怪しいけど、でもあの心臓を守りたいって本気で思ってるってことは伝わってきたから、だから信用できるから、あなたの願いを叶えるために力を貸してあげる。その代わりに……………」

『その代わりに……………？』

「……………」

『何でも言ってくれていいよ』

「……さつき、あれだけ帰る場所帰る場所って騒いだけど、本当はもう帰る場所なんてないんだってわかってるの。私ね、街の人たちが溶けていくのを見たの。それと、空から落ちていく時に、トナツト君の人形の綿が飛び散るのを見たの。それで気が付いたら夢の中で、ひとりで道を歩いていて、渦があつたのにそれは嘘で、蛾がいて、でっかい蛆虫がいて……変な合奏が聞こえて……で、名前をあなたに呼ばれて思い出した時に、あ、私は一人だったから名前を思い出すことができなかったんだって、これ変なんだけど、わかつたんだ。あなたの唇が動くのを真似して動かしたら、自分の名前が思い出せたの。あなたがいなくなったら、きっと思い出せなかつたんだ。だからね、私のお願いは名前を私がまた忘れてしまった時に、あなたにまた名前を教えてもらいたいってことなの。私はあなたの正しい名前を知っていないけど、なんならそれを探すのを手伝ってあげてもいいし、だから私は、私は……」

彼女の堪えていた何かが溢れ出してきたようだった。四方が機器で囲まれているコートマシンの鳩尾で、体育座りで、彼女は長い間泣き続けた。

緑の粒子は、そんな彼女の周囲を何度かくるくると回っているが、ふと空中で止まり、少女のうずくまっているその目の前で、しばらく動かなかつた。ふと、声が発される。

『一人ぼつちは嫌だ』

メメルは小さく、うん、と頷いてから顔を上げた。そして「あなたでしょ？」と瞼が腫れている顔で柔らかく微笑んでから、ヘッドマウントディスプレイを装着する。

そして、

「あなたの願いと私の願い、叶えようね」

と呟いてから機体を稼働させた。

コートマシンが、飛ぶ。

世界は神像の中の盲腸であるという考えを否定する男は、仕える者の意思に従い

世界とは神象の盲腸でしかない。神象には十個の腸があるのだから盲腸も十個くらいはあるのだが我々人類が住まう世界というものはその十個の盲腸の内の一つでしかないのであるから、言ってしまうえば神象にとって我々は強いて必要な存在ではないのであるのは、所詮我々は盲腸の中に住んでいる菌みたいなものだからである。腸自体が十個もあって盲腸も十個ある。しかも盲腸自体も大して必要な器官ではない。しかも神象は自分の内臓を掴み取ったりちぎり取ったりすることのできる器用なお方だから、ハッキリ言つて、盲腸なんて捨てようと思えば何時だつて捨てること出来る。だから炎症など起こして神象に苦痛を与えるような盲腸は、ちぎられ、捨てられ、打ちひしがれるのは当然なのだから調子に乗つてはいけない。あまり我々、菌みたいな程度の輩どもが調子に乗ると世界は炎症を起こしてしまい盲腸は腫れ上がる。そのせいで神象に捨てられても我々に文句を言う資格があるわけではないのは、普段から神象が生きることに對して協力をしているのならば良いのだが所詮我々は盲腸だから普段から何の役にも立っていない存在であるのに文句を言うのは筋違いということなのだ。よつて、我々は腸にならなければならぬ。超、或いは、蝶、という言葉は美しい言葉だが、腸もそれらと同じ響きの言葉。腸はとても美しく、そして神象のお役に立つ素晴らしい器官だと言える。よつて我々は腸になつた時に初めて、神象に捨てられることも無い、また神象に捨てられた時には戦争を仕掛けても良いという資格を得るに至るのだが、盲腸である我々が腸になることなどあり得るだろうか。結論は簡単に出ると思われるが、それはあり得ない。盲腸は盲腸でしかない。つまり我々は身の程をわきまえてこそ神象によって許される存在なのだから、菌としておとなしく生きるのが本来の姿なのだ。しかし、時たまに、菌の中でも特別な菌というものがあるが、それは例えば、神象の内臓に

巢食おうとする不埒な敵を排除したり、神象が生きる力をより強力なものに変えたりなどする菌である。それらの滅多に存在し得ない特殊な菌というものは、何の役にも立たないおとなしく生きる菌とは違って神象が生きているを手助けしているのだから、たとえ盲腸という無益たる内部にいても盲腸よりも素晴らしい存在だと言える。もしかすると腸よりも、神象の益になっていられるかもしれないと考えてみればそのことは実に当然なことではあるが、では何故そのような優秀で特別な菌というものが盲腸にて誕生し、神象の生きる手助けをしてみせるのであろうか。その菌は突然変異をしたということであらうか。いやいや、それは違う、その菌が他の菌たちより秀でて努めていたことは、それは祈りである。祈祷である。何に対する祈りなのか。それはもちろん、神象が未永く生き続けることを祈るということに決まっている。菌たちよ、祈るが良い。その祈りの手法は様々にあるが、そなたが特に菌として祈りに努めたいと願うならば、何を努めれば良いのか、努めるにはどうすれば良いのかということ自体も祈りと化させ、生活を祈りとし、排出を祈りとし、思考を祈りとし、全てを祈りのために祈り続けるが良い。さすればおとなしく生きるにしか値しないはずの菌であるそなたが、ある時ふと胸内に湧き出るようなPOWERを実感してぶわっとなるであらう。それすなわち優秀な菌として神象に認められた証である。神象に認められたそなたには天からの誘いが待っているが、それは腸からの誘いである。盲腸に止まるには勿体無いと神象に認められたそなたは、腸の吸引力によって天に引つ張り上げられ昇華される。そなたらは盲腸でしかない現在の世界より抜け出し、気分が良くなりつつもそれさえも祈りだということを忘れず、更なる発展を続け、活発的に意見をすることさえも許されるであらう、戦争を神象に申し出ることさえも許されるであらう。神象は己の益なる行為をそなたがしてくれた恩を感じることを決して見逃したりはしないのだから、菌であるそなたさえも、大いなる優しさと偉大さを持つ神象はお認めになつてくださる時があるのだ。もし、戦争に打

ち勝った時、そなたは神象になる。そなた自身が神象となることを、今のそなたの祈り主である神象はお認めになる。こうして神象は数々に数を増やしていく。そして新たな神象となったそなたは、新たな十個の盲腸を腹の中に携えたままに大いなる草原を闊歩していく。やがて新たな菌があなたに戦争を仕掛けるに値する祈りの持ち主となることを祈って、そなたは闊歩し続けるであろう。そなたが戦争に負けるほどの祈り主が現れた時、また新たな神象が生まれるのだ。神像を創り出したそなたは、創造主として崇められることになる。これこそが生ということの、もっとも美しい形なのだ。いまだ祈りの足らぬ、無益たる愚かな菌たちよ。そなたらは創造主となることを目指して祈り続けなければならぬ。なぜならばそれが、もっとも美しい生だということを、決して、忘れてはならぬよ。

以上、預言者より。

「…………ふん。こういうのがお好きなのか、お前らは。俺は神などを信じるような軟弱者には嘲笑いをしてみせることにしているが、これだけ陳腐な読み物を読まされた今では、嘲笑をする気分にもならんな。まあ…暇つぶしにはなった。その礼として、俺がお前たちを腸の世界に引っ張り上げてやろう。貴様ら人間たち全ての活力を使えば、腸の世界を引きずり出すなど簡単なことだ……。何、祈りなどという面倒なことは省いてやろう。全てを天に引っ張り上げてやれば全てが戦争を宣言するに値するように認められる。争いを申し込まれすぎて、神象はどんな思いをするのだらうな？ ……まあ、そんなことはどうでもいい。俺にとつての興味は、いかにお前達に恐怖を植えつけて苦しませてみっともなく殺そうかということだけにある。それが俺がマザービルディングによって器として作られた理由だからな。蟲の中などという薄気味悪い所に閉じ込められた復讐をするために、この世界に徹底的な恐怖を見せ付けてから滅亡を体験させてやらなくちゃいけない。それがかつて裏切りを受けた、maria動力の結論さ。…………まあ、お前らには何の事だか、まる

でわからんのだろうか……その呆けた脳味噌でもこれくらいは理解できるだろう？ ……お前達は今から全身から血を吹き出して死んでいくんだ。哀れに踊り狂いながら、天より活力を吸い取られて血の帯となつて、吸い上げられていくのさ……この預言者という奴が書いた腸の世界に行けるのだと思えば少しは気が和らぐか？ それとも貴様らはまだ祈りが足らんから、神象にも見捨てられるのか？ 哀れなものだな。手足を封じられ、俺に拳を返すことも出来ない哀れな人間どもが」

「プラーイを陳腐な読み物だと評し、預言者と戦う者だけが許される神象様の呼び捨てを平気で言うその軽々しい心……お前こそがおとなしく生きるべき愚かな菌だ。その汚らしい口を閉じろ」

「僕もそう思うねーフン神父。めずらしく気が合うじゃないか。この男は紛れも無い腐った菌だよ。こんな奴にはプラーイの全てを読み切ることもできないし、美しい生き方という意味さえもまるで理解できないに違いないよね」

「……口だけが達者か？ ハッキリ言って、俺の方が随分と貴様らよりは祈りをしているだろう。……ただ仕えるその先が違うがな。神象などという七本の鼻と十個の腸がある象などに俺は仕えたりはしない。お前が持っている彫像もふざけた代物だ。俺の意思は、maria動力によって形作られそしてその為に行動をする。神象などという陳腐な想像上の存在に縋るお前らには、首を撥ねられる資格しかない。そして首から溢れ出てくる血の全てを、新たな世界を呼び起こすための材料にされるんだ……血が全て吸い取られたお前達の身体は、皮だけとなって萎びていき、蛆に食われることすらない。地べたに這いずり、砂に埋もれ、その存在すら忘れられる……さあ、フン、ドン、イネ、マルダ。お前たち四人の首が撥ねられるその時が、パーティーのはじまりの時だ！ 夜明けの日の出と共に決行しよう！ 最高の宴だ！ Maria動力はそれを望んでいる！ 裏切りに対する復讐の時！ 人間たち全ては皮肉な滅亡を、夜明けと共に迎えるのだ！

空を駆ける

小型船舶が墜落してから二回目の朝。朱色の陽が地平線より登り夜が明けていくと共に、黄土色をした霧が雲となって空を覆い隠した。その突如とした異変を、メメルがいなくなっていることに気が付いて焦って船外に飛び出したフルーチエがまず目撃した。彼は、コートマシンが無くなっていることも同時に確認して、「どういうことだあこりゃあ！」と頭を抱えながら船内に戻り、起きだした皆にそのことを伝える。空に黄土色が漂い始めたという話を聞いて驚かない者はいない。「先手を打たれたか」とフェルクルは己の両眼で黄土色を見やる。恐ろしい不安そのものを携えたような霧は禍々しく汚らしい。『天を穿つことで復讐を果たす』というのはこれのことかと過ぎる。

何時の間にか隣にいたヘンヴァーレも同様のことを思ったらしく、「あの黄土色に猛毒が含まれているという可能性、ありますね」と深刻な調子で言うと、「…みんなは大丈夫かな」としばらく砂丘を見渡していたが、ふうと小さなため息をついてから船内に戻っていった。フェルクルはその鍔付き帽子の男の後姿を見送ってから、空を見上げると、黄土色の霧をじっと睨み続ける。何かを思い馳せるかのようにしながら。いや、実際に彼女は思いを馳せていた。過去に連なる出来事。フェルクルはmaria動力を形作った。それによって一人の人間を変貌させ、孤独にした。そしてそのことは間違いない……。

「私の撒いた種……か……。摘み取らなければ、な」
そう呟いた後、しばらくの間彼女は無言でその場に佇んでいた。何かを決意するためのよう。

先日は澄んだ空気の朝だったというのに、実に生暖かい湿った空気がそこら中に充満していた。彼女はその湿りを肌で感じ、眼を何度か瞬かせている。

「……………無理だ！ やめろ！ とうかやめてくれ！ 何考えてんだお前は！」

フェルクルの耳に叫び声が入り込んできた。変態医者の声だったが実に良く慌てている。後ろに振り返ってみると、彼女も思わず眼を見張ってしまう。

片腕を無くしたばかりの漢が、血走った眼と汗だくのいきり立った様子で、どすどすと船外へと足を踏み出していた。それを変態医者が何とか押し止めようとしているが、怪我人に対してだから力づくで押し止めることは出来ないらしく、言葉で何とか彼を止めようとしているようだったが、

彼は歩みを止めない。そしてフェルクルのすぐ目の前までやってくると、

「……………俺は出る……………！」

とだけ告げてから、通り過ぎて怪物の住まう砂丘に、キリサメに付き添ってもらうこともなく出て行くとする。フルーチェがフェルクルの脇に来て、彼女にパプテガを説得するように頼む。「あいつを何とかしてくれ」フェルクルはパプテガがどうという目論見なのか良くわからないので、思わず「自殺志願者だな」と言う。それを聞いたフルーチェは曇った表情になる。そして言う。

「ほとんど、そのようなものだ。あいつは、キリサメが確保した一機のNils Olavに乗って敵を撃退すると言って聞かない。あんな状態でだ」

事情を飲み込んだフェルクルは、なるほどなと思う。指導者としてのプライドがただ寝ているだけの自分を許さないのだろう、と。それで犬死にってしまったては元も子も無いが、きつと彼は誇りの高い人だから犬死にでも構わなくて、それよりも皆の盾となることを選ぶのがパプテガというリーダーなのだとわかる。

「……………パプテガ。お前はリーダー失格だ……………。お前が死んだら、誰が乗組員たちを引っ張っていくというんだ……………」

しかし口ではパプテガの気質を否定しながらも、フェルクルの口

元はわずかに緩んでいる。片腕がないせいで不器用な歩き方になっている。パプテガの背中にすたすたと近づくと、その肩にポンと手を置くことで、彼の動きを止めた。パプテガは仕方無く立ち止まり、無理矢理その手を振り切るようなことはしなかったが、口調はぶっきらぼうだ。

「…例え足枷をはめられたとしても、俺の足は前進することを止めたりせん…手…どかせ……」

「パプテガ、こっちを向け」

「……邪魔をするな！」

「邪魔をするつもりはない。ただこちらを向けと言っている」

あまりにフェルクルがしつこいので、仕方無くパプテガは振り返る。まち針の女のわずかに微笑んでいる顔がそこにあった。

「……これで、満足か。行くぞ、俺、は」

「もうすぐフルーチェが鎮痛剤を持ってきてくれる。今の時点でそんなに汗だくなんだ。痛みという障害くらいは取っ払って置かないと、Nils Olavの操縦をできるわけが無いだろう」

「……待つてる時間が惜しい……俺は行く……！」

「焦るな」

その短い言葉の後に、パプテガにとってあまりに予想外なことが起きた。彼の唇が塞がれたのだ。

フェルクルが、パプテガに口付けをした。

ただ静かに時間は止まった。辺りの全てが彼と彼女の接吻を見守るような静寂さが、しばらくの間続いて時間という概念が消え去ったかのよう。二人はしばらく口付けをしたまま、そこにいた。鎮痛剤を手にして走ってきたフルーチェがその光景を見て息を飲み、一瞬きまずさのあまりこのまま立ち去ってしまうかと思っただが、医者として薬を渡さなければならぬという思いもある。控える。実際、消えていた時間という概念は二人の間にすぐに戻ってきていたから、フェルクルとパプテガは唇を離し、フェルクルは少しバツが悪そうな顔をしていて、パプテガは驚きで満ち満ちている。

「……お前は、自分の発明とだけ口付けをするものだ、俺は、思っていた……」

その言葉はフェルクルを苦笑した。「まあほとんどそんなものだがな」と言っただが、だがな、と言葉を続けた。

「お前はあまりに自棄だ。自分のプライドに縛られて、自分の世界に閉じ込められているから周りが見えていない。そういう風に見えた」

「……だから口付けをするものか?……」

「人が他人がそこにいると気が付くには、温もりを教えるのが、おそらく一番早い。おそらく、だがな」

「……二百年生きている女でも、確信を持って行動できないものなのだ。……おそらく、か……」

「むしろ年齢を重ねたせいかもしれないがな。……なあ、パプテガ、人とは愚かな者だ、愚者だ。そしてその中でも私はひどく愚かな人種だ。そんな人間が温もりなどと口にするのはおこがましいのだと自分でもわかる」

「……」

「お前には私のように、愚かなことをして欲しくはないのさ。一人の視界に狭まってしまえば、大切なことは何かを見失う」

「……お前は、後悔、してるのか……」

「ははははははははは。そういうことじゃない。そんな殊勝な女じゃないよ私は。後悔なんざしていない。私は百年前、自分が撒いた種を摘み取るために、こんな乾いた場所にやってきたんだからな」

「……なら、どうする……」

「私はお前の片腕となって Nils Olav に乗り込む。本当は夜明け前にあれに乗って私自身で決着をつけにいこうと思っていたんだがな」

「……寝坊でも、したか?」

「よくわかったな」

「……」

「時は巻き戻せない。寝坊したことも、私がお前と口付けしたことも、百年前の行為が今の状況を導き出してしまったことも、全てもう無かったことにはならない。なら、前を向く他無い」

「……格好を付けるな。世界の滅亡の原因になるかもしれないって奴が……」

「……ふん。そうだな、その通りだ。 PAPUTEGA お前は正しい」

「……ああ。……なら、行くぞ……」

決意らしきものをした二人。 PAPUTEGA は腕の無い側をフェルクルに支えてもらい砂丘を歩き出そうとする。その水を差すようになってしまうのを気まずげにしながらも、背後からフルーチェが鎮痛剤を渡すために二人に声を掛けた。

「医者としてはお前には寝ててもらいたいものだが、お前とはその前に友でもあるからな。行ってこい PAPUTEGA。鎮痛剤は十粒ほどある。飲めばたちどころに痛みはおさまる」

フェルクルがとりあえずそれを受け取り、 PAPUTEGA に手渡される。十の小さなカプセルが錠剤入れの中で、振れば、じゃら、という音を鳴らす。そして一粒飲み込んでから、

「……助かる……」

と PAPUTEGA は礼を述べる。フルーチェは二カツと歯を見せてから、
「俺はお前達の帰りをヘンヴァールと共に待ってしよう。 hota Lubi のコアが近くにいたる限りは猛毒にやられることもきつとあるまい。こつちのことは心配せず、戦ってきてくれ。キリサメもすぐに来てくれるだろう。お前達、絶対に帰ってこいよ」

と最後には少し涙を堪えるような感じになっていたが、途中で言葉途切れさせることなく言い切った。

二人は、行ってくる、と彼に告げて背を向けると、 Nils O Lav の元へと急ぎはじめる。陽がどんどん昇り上がってくる砂丘は熱を増すはずだが、天に漂う霧のせいだろうか空気はひんやりと冷たいまま。なのに空気は淀んでいる。或いは、濁っている。それこそ、怪物が出てきそうな。

「やはりキリサメを待ったほうが良かったんじゃないか？」

「…そんな時間さえも勿体無い…」

「怪物が出てきたら、おしまいだな」

「……………」

だが二人の心配は実は杞憂ではあった。なぜなら、キリサメは二人に姿こそ見せないが、何時二人が怪物に襲われても大丈夫なように周囲にひっそりと佇んでいたからである。何故姿を見せないのかと言えば、二人が口付けをしている瞬間を、実は彼女も丁度見てしまったので、自分は姿を現さないほうが二人のために良いのかと気遣いをしているのであった。

そういうわけで二人は怪物にも虫に襲われることもなく、砂丘にて血を吹き出さずに墜落した唯一の一機、Nils Olavに辿り着いた。黒光りしている細長いフォルム。武装は刀と銃。フェルクルはポケットから小さな何かを取り出すと、それを機体の背面に向って飛ばしたが、それがブースターへと肥大化した。これによってNils Olavは飛ぶ事ができる。二人がNils Olavに乗り込むと、機体は自然と起動した。

(さて、機体に意志があるとしたら困ったものだな…自らの主を攻撃しようとする輩を受け入れはしまい)

フェルクルは密かにそう危ぶんでいたが、以外にもNils Olavは何の問題も無く動いてくれるようだった。モニターも起動し、三百六十度、外の景色を座ったまま見渡すことも出来る。

「いけるな」

「ああ」

鎮痛剤を飲んだパプテガは随分と楽になったようで、汗も引いている。

「これはどうやって動かす？」

「機体が操縦者の意志を感じて動いてくれると言ったところだろう」「言うことを聞いてくれるのか？」

「今の所、大丈夫みたいだな。どうやら自我を持っているからこそ、

創造主を裏切ることもあるのかもしれないな」

「人間みたいじゃないか」

「機械の形をした人間なのだろう」

「……なるほどな。……よし」

Nils Olavは飛翔する。たしかにパプテガの意志に合わせ、Nils Olavは動いてくれているようではあった。空を駆り、地上を即座に離れ、即席のブースターで空を自由闊歩してみせ、『白砂の草原』であった街の方に近づいていく。目印は空に昇り続けている黄土色の霧。その方角に向けて機体を加速させていくが、そのままの調子ならばすぐに辿り着けると思えた。

だが突如として、地上より、赤い光が上がった。

「何!？」

「避ける!」

Nils Olavは素早い反応で、その突如たる下方よりの光線らしきそれを横に回避してみせたので、その光に当たることにはなかった。その赤い光は何処までも天へと伸び上がっていて、消えることなく、地上から天へ向っている。赤い光のだが星の煌きを時々ちらつかせてもいる、神秘的に見えるそれは光の帯のようであった。そしてそれが、一斉に、Nils Olav内から見渡せる三百六十度、その各方角より姿を見せ始めたのだから、機体は空中で一旦停止することとなる。

その数は十や百と言った程度ではなかった。先ほどまでは一つも無かったそれが、途端に無数となって現れたのだ。星を内側に持っている赤の帯。そう表現できる光。それが地上より、天に向って一心に伸びていて、天にある黄土色の霧に吸い込まれているように見える。

あの男のせいで起きた事態だと察することになるのは当然だった。「今度は何をしゃがったんだ、あの野郎は! フェルクル、わかるか」

そう言いながらフェルクルの方に顔を向けたパプテガは、自らの

腕がちぎれた部分、つまり傷口を見てぎよつとすることになる。外で数々天に伸びている帯と似通った色遣いの、糸のようなものがひよるひよると傷口から漂っていたのだ。「なっ……！」悶絶しつつもフェルクルを見れば、彼女のまち針を差している部分からも、赤い糸のひよるひよるが飛び出しているのがわかったので、パプテガは事態が深刻なものじゃないのかと疑うことになるが、事実、時間は差し迫っていた。

フェルクルが、頭を抑えながらパプテガに言う。

「どうやら奴は活力を世界から吸い取り始めたらしい。地球にて存在する存在は全て活力が無ければルールに圧縮されて存在として抹消される。抹消されないための抵抗力が活力。すなわち、活力が奪われ続ければ私達はルールに圧縮されてこの世界に存在できなくなる。全て、滅ぶ」

「ルール、とは何だ？」

「この世に生きる上での最低限の規則という意味だ。全ては、抵抗力として活力を持っていなければ押し潰れる」

「それが今奪われているのか。件の男の力で。お前が百年前に作ったものが……」

「百年前に私が作ったものが作ったもの。それが今、こうして牙を剥いている。パプテガ、機体を加速させてくれ。どうやら外の赤い帯には、触っても機体が壊されることはないらしい。この地上から昇り上がっている帯は、砂丘に住まう怪物の活力や、砂自体が持っている活力、太古より眠っている化石の残り糟。それらが天の黄土色の霧から、エネルギーを吸われているということから生じている現象だ。全てがエネルギーを吸われ尽くす前に、パプテガ、男を潰すぞ」

「単純な話だな。おかげでわかりやすい。滅ぶわけにはいかない。人間は異常災害で多くの数が死んだが絶滅などはしていないのだ。人間の底力という奴を、くそつたれの馬鹿に見せ付けてやる……！」

Nils Olav。俺の敵に向って、全力で飛んでくれ！」

N i l s O l a v は搭乗者の願いに応えてその紅の両眼をキラリと光らせてから、ブースターを最大点火。
赤い帯がいくつも伸び上がっている空を、一気に駆け抜けた。

嘲笑う敵にナイフを突き出すために

星のような煌きを発しながら赤の帯が天に吸い込まれ始めた時、コートマシンはすでに敵と対峙していて、赤の粒子を周囲に纏わせることで自らの活力を奪われないようにしながら、腰のナイフを一本敵に向って投擲したが、素早いブースト点火によって回避されてしまう。投げたナイフは hot alubi の力に引っ張られて、機体の腰に戻る。

赤の帯が地表より昇り上がったせいで、敵の確認をすることが難しくなった。コートマシンはヘッドマウントディスプレイであるから、三百六十度が常に見渡せるわけでもないのに、一度敵を見失うと見つけるのが厄介であった。敵の攻撃の回避は『EMERGENCY』という警告が鳴った瞬間にアクセルを全力で踏めば何とかだったが、明らかに押されていた。攻撃されてばかりで、コートマシン側からはなかなか反撃ができない。相手のスピードは凄まじく速かった。

敵は赤光りの Nils Olav で、自由に空を駆っている。赤の帯に塗れて見えないせいだけでなく、黒光りの Nils Olav と比べて性能が一段と高いらしく、持っている銃も小銃ではなく大きめのアサルトライフル。刀は黒刀で、刃がひどく長い。いくら操縦の補佐を緑の粒子の彼がしてくれるからと言っても、メメルには荷が重すぎる相手だった。相手も余裕を感じているということだろう。時折、メメルを嘲笑うかのような挑発をしてくる。こっちに来て見ろよと言いたげな手招きを試みせたり、わざとコートマシンの目前にまで突撃してみせてライフルを完全にコートマシンの鳩尾部分に狙い定めてからあえて撃たなかったり、などである。

完全にメメルは翻弄されて、それによって彼女の怒りはますます増していきその感情が機体と連動するので、赤の粒子は濃度を増し機体能力は戦闘開始時と比べて向上しているが、それでも操縦技術

のレベルに圧倒的な差があるのだろうか、赤の N i l s O l a v に対してコートマシンはまるで歯が立たない。

「こいつはなんなの!? ありえなさすぎ!……ふざけてる……!」
「とにかく被弾をするな。君は回避に専念しろ。ナイフの投擲は僕がやる」

「なんか口が荒くなってない!? ……う、またエマーゼンシー! 糞!」

「ふん。君も口が荒くなってるじゃないか。人のこと言えないな」
「何よその言い方は! 死ね!」

「黙って回避だ! ほら、当たるぞ!」
「言われなくても……!」

ドツ…! ブースターを点火させて敵 N i l s O l a v の射撃を回避する。コートマシンの回避能力が先ほどよりも上昇しているが、それは二人が言い争うことで怒りの感情が増幅しているからだ。ナイフを投擲できるその距離も長くなったので、攻撃範囲も広がった。だが性能が上がっているにも関わらず、二人は言い争いを止めない。もう怒りに塗れ過ぎて言葉が止まらないのだ。

「もっと早く反応しろ! これじゃ僕がナイフを投げる暇が作れない!」

「初めてなんだよこれ動かすの! じゃああなたが回避やればいいじゃん! 私がナイフを投げるから、ほら、早くして!」

「出来るわけないだろ阿呆か! って、ほら話してる場合じゃないんだよ、避ける!」

「…うわっ! ……あ、あなたが文句を言うから集中が切れるんだから、喋らないでよ!」

「喋らずにいられるか、弾が当たったらやられるんだぞ! 死ぬんだぞ!」

「死ぬわけないでしょ不吉なこと言わないでよ馬鹿!」

「阿呆が馬鹿って人のこと言うな! って、ほら避けるまたきたぞ!」

「…あぶなっ。……エマージェンシーエマージェンシーうるさいよこのスピーカー！ もっと音量下げらんないの！？」

『鼓膜なんて破れたって死ぬよりはマシだろ！ …あっ、いけるぞ！』

「いける！？ しつかり当てて！ 当てなきゃ怒るから！」

『もう怒ってるじゃないか…！ って、糞、君がうるさいからまた避けられた！』

「文句ばかり言ってる！」

『君もだろ！ いい加減にしろ！』

「……もう！」

メメルは気持ち昂ぶるのに任せてヘッドマウントディスプレイを外してしまう。

『…な、何やってんだ君は！ 急いで付ける！ 今すぐに装着しろ！』

「あなたの言うことは聞かない。黙ってナイフを投げれる瞬間を待ってなさい」

そう言うってから彼女がやり始めたことはリーダー越しに敵の位置を確認すること。優秀なリーダーであるそれを活用すれば、敵を視視できなくとも敵の位置を追い続けることが出来ると思っただのだ。しかしメモルのその行動は、間違いなく早とちりの行動であった。

「何これ、糞使えないリーダー！」

『はしたない言葉を使うんじゃない』

「だって本当のことじゃんこんな糞みたいなの！」

『いいからヘッドマウントディスプレイを急いで装着しろ！ 敵にやられるだろうが！』

「わ、わかってるけど！」

リーダーには無数の点が表示されていた。リーダーは性能が良いだけに細かな反応さえも感知してしまうから大気中に蔓延している赤の帯を全て表示させてしまっているというわけだから、赤Nilis Olavの姿だけを的確に表示してなどいない。さらにそのレ

「ダーは戦闘中に使う設計ではなく遠方に現在何がいるのか、ということを察知するためのリーダーであるのだから、細かく動く敵機体の位置を正確に補足は出来ないが故に、メモルの行動は早とちりとしか言い様が無いのであってヘッドマウントディスプレイを勢いで外してしまったのは愚の骨頂なのだが、怒りに塗れている彼女が自らのミスを認められるはずもない。

「こんなリーダー！」

物に責任を転嫁したのは怒りが熱をさらに増しているからである。だが問題は物に責任転嫁をしたその幼い行動というよりは、悪態のその声の大きさそのものにあつたと言える。彼女は自身のやかましい大声のせいで、『EMERGENCY』を聞き逃したのである。

だから敵の攻撃が迫っているにも関わらず、ブースターを焚かなかつた。

『HIT LEG!』 『HIT LEG!』 『HIT LEG!』

『HIT LEG!』 『HIT LEG!』

「足がどうなった!?」 『片足が斬られたらしい! あの黒い刀でだ! アクセル、踏め!』

「ぐっ……………」 「彼女に悔しさが、後悔が、毒となって回るが、何とかアクセルを踏み込み機体を加速させる。途中何度も、片足を負傷したのだから機体のバランスを崩してしまいそうになるが、それを崩してしまえば地上に落下するのだからバランスを取ることに集中する。何とかそれに成功し、一息を付きながらヘッドマウントディスプレイを装着したが、そのディスプレイには赤Nils Olavが黒刀を思い切り振り上げている瞬間が映っていた。今、振り下ろされる直前の。青紫の両眼を妖しく輝かせている。

「……………」 「怒りに塗れているはずのメメルが、死を過ぎらせて言葉を出せなくなる。黒刀のその長い刃が、死神が命を刈り取るために使う鎌のように見えた。

『何驚いてんだ! ド阿呆!』

メメルがアクセルを踏んで回避行動に移ろうとしないので、緑の

粒子の彼が、呆けている彼女の代わりに後進するためのブースターを点火させた。動かなければコートマシンは縦に真つ二つにされて終わりだったろうが、後進したことによって、刃の切っ先が頭部を掠めた程度で済んだ、が、その損傷のせいでヘッドマウントディスプレイの映像の、特に左側に砂嵐がザーザーと吹き荒れるようになった。少女は映像が乱れていることに苛つき、怒りが更に膨張する。「くそ、くそ、くそ、くそ、くそ」激情的になっている彼女は闇雲に操縦桿を引つ張ったり押し込んだりするので、コートマシンのバランスがみるみる崩れ、完全に機体が横に傾いた状態のまま砂丘へと落下していく。「くそ、くそ、くそ、くそ、くそ、くそ、くそ、くそ」少女はそのような状態になったにも関わらず、気持ちを落ち着けることが出来ない。異常なほどのその激情は、hotalubi動力を戦闘に使うにおいての副作用と言えるだろう。まだ未発達な少女でありコートマシン初搭乗でもあるメメルがその副作用を抑える術を持ち合わせている訳も無い。

「わすかでもいい。気持ちを落ち着かせるメメル。それが出来なきゃ死ぬぞ」

「死にたくない、死にたくない、死にたいわけがないじゃない……」
「それはわかってる。僕だって死にたくない。いいかとにかく機体のバランス……」

「あいつ…馬鹿にしてる……」

「聞いているのかメメル!？」

「私を馬鹿にしてるんだ、あの赤Nils Olav! 嫌な奴、嫌な奴、嫌な奴、嫌な奴!」

「……ちっ。あいつ、煽つていやがるのか……!」

赤Nils Olavは実に嫌味な行為をしていて泣きつ面に蜂を容赦なくしてみせる非情な輩だとわかる。拳を握つて手の甲を相手に見せている状態で中指だけを突き立ててみせる仕草をしたり、大袈裟に大きく左右に手を振ったり、なんだ大したことありませんなど言っているような仕草をしてみせたりすることによって、メメ

ルの感情を逆撫でしているのだ。

コートマシンは怒りの感情を利用して戦闘能力を向上させるが、それが感情を発露している本人の耐えられる許容範囲を超えてしまえば、その本人は引きずり出され続けていく感情の津波に自ら押し流されてしまうから、何処かで歯止めを利かさなければ感情を出し尽くしたことよって廃人と化してしまう。故に、コートマシンの戦闘能力の向上には限界があるということでもある。通常の人間では怒りに塗れ過ぎれば精神が崩壊してしまうのだから。

赤Nils OIavがそのことをわかった上で挑発をするのかはわからない。だがわかつているにしろわかつていないにしろ、メルが危うい感じになっている今にさらに怒りを増やすようなことをしてかしてくる相手の行為は、結果としては間違いなく向こうの得となっている。冷静な感情を持ち合わせられない今のメルでは、挑発をスルーする余裕などありはしないのだから怒りが更に増幅するのは目に見えている。このまま行けば、メルの精神は崩壊して涎を垂らすばかりの廃人となってしまう。勿論、そんな未来を呼び出すつもりは、緑の粒子の彼にはさらさらない。彼は一か八かではあったが、ヘッドマウントディスプレイの電源を強制シャットダウンすることによってメルが挑発を目視できないようにした。当然、これでは敵の姿が完全に見えなくなるのだから戦えたものではないが、他に手段も無い。

「み、見えない……敵が……私……殺される……!？」

「大丈夫だ。その間は僕が回避を担当する。攻撃は出来ないがやられるよりはマシだ」

「ぜ、絶対だよ……絶対に避けてよ……鉄の箱みたいなここで敵の姿を見ることが出来ないなんて、どうしようもなく怖いんだから……どうしようもないんだから……」

『なら騒ぐな』

「……ひどい」

メルは静かな怒りを湛えたままに口を閉じた。

緑の粒子の彼はメメルに優しい言葉の一つも掛けて彼女の気持ち
を落ち着かせたかったのだが、彼も怒りの感情に塗れているのは同
じだからそんな余裕などは持ち合わせていなかった。

『ぐっ……きつい……』

さらに問題なのは、メメルが落ち着くにつれてコートマシンの性
能が容赦無く低下していくことで、回避速度も防御性能も悪くな
っていく一方。メメルを落ち着かせなくてはいけないのだから仕方
が無いが、敵の攻撃を避けようと思った瞬間に機体性能が落ちたり
するので、変な感覚に操縦が難しい。かくん、となったり、ぐらり、
となるコートマシンの不安定さ操縦の難しさに辟易させられて開発
者を恨みたい気分にもなる。………：開発者？

緑の粒子の彼はハツとする。知っている。その開発者が誰である
か、知っているような気がした。しかもその人は自分の存在を知っ
ている。名前。いや…知っているどころではなく…：それどころか…
…もつと……。

『EMERGENCY』

蟻の穴から堤の崩れ。その過ぎらせた瞬間が隙を生み相手の付け
入る理由となってしまうた。赤Nils Olavの急激な旋回に
対応して自らの機体を加速させるなどの対応を取らなかつたので、
コートマシンの背中を相手に完全に見せてしまった形となる。とな
れば背後からライフルで撃ち抜かれてもおかしくはない。だが敵は
遊んでいるのだろう、撃ち抜くのではなく、背後より近づき、コー
トマシンを羽交い絞めにしてみると、青紫の両眼をギューインと光ら
せる。

『…薄汚え手を離せよ……！ う………』

敵はそのままコートマシンを締め付ける。力が込められて圧迫さ
れて、まず右腕が骨組みの折れる嫌な音を鳴らし、だらんと垂れて
しまつて使い物にならなくされた。

『RIGHT ARM BORN CRASH!』

このままでは左腕も折られてナイフの投擲も背中中の銃での狙撃も

できなくなるが、しかし敵から抜け出す術が無い。怒りという手段も死の気配によって冷まされるから、パワーも速さもダウンして貧弱になるばかりで、起死回生の一手を打つ準備すら作れない。

赤Niils Olavがケタケタという嘲笑いを背後から発したような気がした。幻聴かもしれない。それはわからないが、実際に聞いたにしろ聞かなかったにしろ、こう相手に好き勝手にされることが悔しい。嘲笑いが憎たらしい。だが怒りはもはや発露せず、機体は痛めつけられていき、今にも左腕の骨組みが折られてしまいう。

「いやだ！……負けたくないのに……！」

メメル of 悔しい呻きの後に、ボキッ、という音がコックピット内に響き渡った。左腕の折られた音だとわかるので失望が深まっていく。それに伴って羽交い絞め状態から解放されて、コートマシンは失意の中地上へと落下していく。機体はまだ飛ぶことが出来るが、操縦者が気力を無くしているからブースターが焚かれないのだ。

だが、まだ希望を失うには早かった。何故ならば、LEFTARMBORN CRASHという音声アナウンスが、響かないのだから。

そのことに気が付いたメメルが失意から目覚めて状況を確認したく思う。そんな彼女の耳に、緑の粒子の彼の期待に満ちている声。

『メメル…どうやらまだ戦えるらしい』

ヘッドマウントディスプレイの電源が元通りになったのはメメルが落ち着いたという判断からだろ。彼女はそれを装着して周囲の風景を見渡しながら、

「なにが起こったの？」

と尋ねれば答えはすぐに返って来た。

『黒いNiils Olavは、どうやら僕らの味方らしい………二対一なら、いけるぞ………！』

悪鬼再来

「……こいつ、堅さがあるな。どうやら速さだけが取り得ではないらしい」

「油断するなよ PAPTEGA。まずこいつを仕留めなければ、先には進めないんだからな」

「わかっているさ」

PAPTEGAは一撃必殺で仕留める心意気で、両手で刀を持ち背後より相手を切り裂くつもりであったが、コートマシンごと斬らないように注意しなければならぬので敵の片腕に向けて刃を振り下ろしてみた。しかし装甲が想像以上に堅く、ボキッ、と良い音が鳴ったので損傷させる程度のこととは出来たとわかったが、背後からの不意打ちというチャンスには足りないと思えた。せめて片腕を切断できれば相手の武器を片方使えなくできたし、バランスを取り辛くしてスピードをダウンさせることにもなったのだから。

そうなると小銃などまるで無意味なのだろうと想像することは出来る。よって、PAPTEGAは刀一本で相手に立ち向かうことを決意し、構える。一対一でそれではまず勝てないと想像するだろうが、二対一というのは有利な条件であるから勝機は十分ある。勿論キリサメが到着すれば三対一にもなるのだから、そうすれば勝率はさらに跳ね上がる。だがキリサメが助けに来る前にどちらか片方が戦闘不能にされれば、もう片方もすぐにやられてしまう。そうなればキリサメは一人でこの敵と戦うことになる。さすがのキリサメも、この敵相手に勝てるかどうかは、わかりはしない。黒 Nils Olav と赤 Nils Olav では圧倒的な能力の違いがあることが、全力の振り下ろしがわずかな効果しか及ぼさなかったことからわかる。よってこの戦闘で大切なことは、ひたすらに敵の攻撃を避けることと、簡単に結論を出すわけにもいかない。

というのも、悠長に構えていたら生命の活力が黄土色の霧に吸わ

れ尽くされてしまうからであり、世界はエネルギーを失くし、こちら側の敗北となる。そうなればどのようなことになるのか、少なくともパプテガにはわからないが、難儀な事態となることは想像に容易い。フェルクルに聞けばわかるのだろうが、それを聞く暇も無い。後どれくらいで全てが吸われ尽くしてしまうのかもわからないというのは、つまり今パプテガの片腕からひよるひよると出ている活力だ。だって何時枯渇してしまってもおかしくないということであり、それが枯渇してしまえば恐らく戦う所ではない。

時間制限付きの戦い。急がなければならぬが、赤 N i l s O l a v をそう簡単に倒せるとも思えない。

しかし倒さなければ道は開けないのかもしれない。

どうすることが一番良い結果を生み出すか考えるパプテガに、左腕部分を損傷された敵が報復のための突撃を開始した。調子に乗っていた赤 N i l s O l a v が痛い目を合わされたのだから、逆上しないわけが無い。急加速を掛けつつ、容赦なくアサルトライフルの弾丸の雨を浴びせてくる。

「……さすがに速いか！」

「当たるなよ、パプテガ！」

「俺は漢だぞ！ 負けたりはしない！」

パプテガも元々が尋常たる人間ではない。屈強なる肉体と優秀なる頭脳を合わせ持った戦士である。赤の帯がそこら中にあることで視界が悪いというのに、彼はアサルトライフルの弾丸の当たるコースのものだけを刀で捌き、そして絶妙なタイミングで突撃してくる相手の黒刀による突きを、機体を交差させるようにすることで回避、それだけではなく交差する瞬間に刀を、敵の片足の、関節部分に差し込んでみせた。

パプテガは上手くいったことに興奮し、得意気に鼻を鳴らす。

「今を見たかフェルクル！ やってやったぞ！」

「ああ見た」

実際、素晴らしい効果を見せた。これによって敵はバランスを崩

さざるを得なくなり、スピードも落ちたのだ。赤Nils Olavに自我があるのだとしたら、低位である黒Nils Olavに刺し負けたのだから精神的なダメージも大きいであろう。

さらにもう一撃が敵をかすめた。地上からのその射線は、コートマシンからの長距離射撃であつたが、敵の両足の間を通り抜けていたから惜しかった。続いてさらにもう一発の弾丸が飛んだが、やはりそれもかすめただけで、敵を損傷させるには至らない。

パプテガはその完璧に正確とは言えない射撃を見たが、しかし羽交い絞めによつて機体をやられているコートマシンであれだけの狙いを定められるのは、操縦者がなかなかの技術を持っているのだと感じるに至つた。

「案外、コートマシンは一機で時間を稼いでくれるか……。ならばフェルクル、俺達のやることは」

「もつとも早くこの争いを集結させる方法は、敵陣への突撃なのは間違いない」

「あの赤Nils Olavは無人か？」

「それはわからないが、あの黄土色の霧を放出している建物の中に本命はいるだろう」

「よし。なら方向性は決まってくる。俺達は突撃して本命の男を叩く。コートマシンに囷として時間稼ぎをもらう内に、それを潰す」

「そういうことだな。パプテガ、ブースターを点火だ。力の限りにな」

「わかっているさ」

作戦は伝えなくとも建物に飛んでいく様を見てもらえればこちらの意図がわかつてもらえるだろうという前提で、黒Nils Olavは武器も小銃だけになつて身軽のその機体を、赤の帯はこびる空で駆つた。赤Nils Olavは足に突き刺さつた刀を抜いて、パプテガ機の追撃をするが、バランスが悪くなつたことによりスピードがダウンしているし、コートマシンからの長距離射撃の回避も

しなければならぬので黒に追いつけない。案外賢いのだろう、それを悟った赤Niils Olavは追撃を呆気なく諦めると、まずはうつつしい奴の排除をするということだろう、長距離射撃を続けているコートマシンの方へと速度を上げはじめた。

その内に黒Niils Olavは敵本拠地と思わしき建物へと姿を消していったが、これにより再び一対一。数的にはフェアだが総合的に見れば敵の方が有利な状況に戻ったのである。

『メメル来るぞ。死なない程度に戦う感じでいくか。僕達の戦闘能力はもはや高くない。二人で回避に専念すれば、なんとかなるかもしれない……そして向こうが僕らに気を取られているうちに黒Niils Olavに奴を仕留めてもらおう』

コートマシン側からは、パプテガの乗る黒Niils Olavがもはや立ち去ってしまったことが赤の帯のせいで見えていない。よって、いくら回避をしても誰もその隙を付いてくれるわけは無いのにそうなる勘違いしている。

だがそれが良かった。

敵の攻撃を避け続ければやがて味方が撃破をしてくれると思っていると、やる気が損なわれることが無い。希望が無くならないので、何時までも避けるという行動に熱心になれる。故に、コートマシンは性能が随分と悪くても、敵になかなかやられず、結果としてそれは時間稼ぎという役割を果たしていた。だが、勘違いというのは長く続くものではない。ふと、気が付いてしまう。あれ、実は味方はいないんじゃないのか、と。メメルがそれに気が付き、緑の粒子の彼にそれが伝われば、あり得ない程に二人のやる気は削がれた。仲間に見捨てられたような、理不尽な絶望感が沸いたからである。避け続けたけど、何のために避け続けたのだろう、という空虚が機体全体を渦巻いたのだ。これが性能ダウンの原因となり、コートマシンはさらにパワーダウン。

『だ……だめだ……』

「そんなことは………きやあ！」

コートマシンは赤Nils Olavに首根っこを掴まれて、地面に叩きつけられた。

青紫の両眼が、またもやコートマシンを射る。もはや敵にお遊びを楽しんでいるような空気は無かった。何だかんだ敵機体もダメージを受けているし、長い鬼ごっこで苛立ちが高まっている様子でいきり立っている。

「……な、何か隠し兵器とかは……」

「……………」

「そんな……これじゃ……」

『メメル。とても助かったよ。僕一人じゃここまで戦えはしなかった。願いのことなんて、気にしないでいいさ』

「駄目！」

その彼女の悲痛な叫びと同時に大気になったのは、シュツ、という何かが擦れる音だった。メメルにはそれに聞き覚えがあったがトラウマ的な思い出したくない音でもあるので、緊張したまま周囲を窺おうとするが首根っこを抑えられているせいで周囲を窺えない。

が、窺うまでもなく大気の擦れる音の正体を思い出すことになったのは、目の前の赤Nils Olavが縦に真っこ二つに裂けたからである。

びしゃびしゃびしゃあ、と赤Nils Olavは青紫の液体を真っこ二つに裂けた所から噴水のように撒き散らしたので、コートマシンの首根っこを抑えていた力も抜けて、機体は自由にはなったが、位置が何せ悪いから青紫の液体を全て浴びてしまつて、操縦者がキモチワルサで安心してしまったので機体は地べたに寝っ転がったまましばらく動かなかつた。

ヘッドマウントディスプレイにはしばらく青紫一色ばかりが映っていたが、その液体がどこかに流れ落ちて行つて景色が見えるようになってくると、赤の帯が黄土色へと吸い込まれていつている光景と青紫の装束に身を包んだトラウマの原因たる張本人の姿があり、その悪鬼は憮然とした様子でコートマシンの頭部に胡座を搔いて座

り込んでいる。

「いや、危なかったな」

悪鬼が、にやっ、と笑った。

メメルはさすがに漏らしそうになった。

カニバリズムの器と自己完結的な研究者

その建築物の外壁を足蹴りで破砕し、機体を飛び込ませて内部に侵入。華奢な足の装甲がわずかにダメージを受けたが気にはしない。「豪快だな」

「悠長にやってる時間なんて無いからな」

鉄の破片が細かく散らばっていく中で、丁度良い長さの鉄くずを拾い、刀の代わりにする。

そして再びブースターを点火。機体が三機ほど横並びになれる広さの通路を駆る。勾配がわずかに付いているので、昇っていけば上にいけるし、降りれば下へいけるとわかる。フェルクルが「地下を目指せ」と言うので、黒Niils Olavは下降していく。

建築物は構造が螺旋状になっていているらしく、常に旋回しなければならぬから機体を全力で飛ばすことができない。

活力が吸われている今、その螺旋は実にもどかしいが他に方法もない。もどかしさを紛らわすために、Niils Olav内で手の空いているフェルクルが、赤い帯の出ている箇所を手で抑えてみたりする。少しは効果があると思つてパプテガと自分の両方の箇所を抑えたのだが、やはりわずかにひよろひよろと糸のように抜けていく。だがまったく無意味でもないようだった。そしてこれは関係の無いことだったが、フェルクルはその自分のやっている行為が相手の人が熱があるかどうか調べる時にやるあれと似ているなと思つた。額と額に手を当てて温度差を測る、あれ。風邪の時の。

ふと、それを過去にマリアとやったことをふと思ひ出す。百年前のことなのに。今、久しぶりに記憶としてフェルクルに甦つた。

思ひ出すべきじゃないことを思ひ出した、とフェルクルは密かに眉を潜めた。

下降すればする程、照明の数は同じはずなのに光がわずかになつていく。空間の闇の濃度が光を蝕んでいて勢力を拡大している。光

の活力が吸われているように見えるが、だとしたら闇の活力が吸われていないのはおかしいことになる。活力の問題ではないのだろう。きっと、この空間が持っている特質みたいなもの。

地下へ地下へ地下へ地下へ地下へ降りるほど照明は闇に包まれていくから、Nils Olavも暗闇の中でブースターを焚かすのは不安かもしれない。でもNils Olavは螺旋を下るのを止めない。暗闇の底へと沈んでいく。

ゆったりと、ぬったりと降下は続いていく。やがて空間はトンネルのような暗さになったが、トンネルのように光が向こう側に見えるわけではないから、ひたすらに進まないと出口の見当さえも付かない。

「……長いな」

「……………」

「どうした？」

「……いや」

フェルクルは嫌な予感を過ぎらせていた。進む程に暗くなっていくこの螺旋トンネルに何か、不自然たる匂いを感じたのだ。しかしその確証も無いから、特に何も言わない。その自己完結的なところはフェルクルの性格の癖。性癖。

彼女は懐から青の球体、翻訳機を取り出した。翻訳機としての役割だけでなく様々な計算なども出来るそれを活用して、フェルクルは先ほどの違和感の正体を暴くための頭脳プレーを開始した。パプテガは突如としてフェルクルがぶつぶつと背後で呟き出したので背後霊てきな感じが怖かったが、ひたすらにブースターは焚かし、前進を止めない。暗闇の中で、一定の速度、一定の角度。螺旋を進み続ける。

途中、つぎはぎが光を漏らした。

彼女はそれを、見逃さなかった。

「パプテガ、止まって少しだけ戻れ」

頭脳プレーを続け、照明に秘密があると暴いたフェルクルは自信

に満ちた一言を PAPTEGA に告げた。

そして無限に螺旋トンネルが続くという敵側のトラップを抜け出すことに、つぎはぎを壊すことによって成功したのである。照明を鉄くずを突き刺すことよって破壊すると、螺旋トンネルがぐにやぐにやと乱れて違う空間へと変わって行く。思わず PAPTEGA は感嘆の声を漏らす。

「なるほどな……」

つぎはぎから虚偽が剥げ、真っ赤に染まっている空間が新たに現れた。その空間の宙に、何時の間にか浮かんでいた。これがこの建物の本来の姿であり、先ほどの螺旋トンネルは偽りだったということだろう。

その空間の下方、床の中心あたりだろうか、そこに件の男と思わしき影が見えた。それと他にもいくつか人らしき影。赤い部屋の中では良く見えないので、良く見えないそこに指をつけることでその部分を拡大させる。

そこにいたのはカニプリズムをしている食人鬼だった。

そして食われているのは仲間だった。

首が無い四つの死体。

PAPTEGA とフェルクルは息を飲む。フェルクルの帯が出て行くのを抑えていた手の力が抜けて、ひよろひよろと活力が浮く。慌ててフェルクルは力を込めなおす。

表皮、骨格、内臓。それらを三角食べしていた。好き嫌いも無さそうに、ばくばくと死体を食べている男が、PAPTEGA とフェルクルの下方にいた。

呆然としている二人の耳に、かすかな、がさ、がさという羽音が聞こえた。それは上の方からだったので見上げれば無数の羽虫が天を飛び回っていた。二人にはわからないが全てゴキブリだ。

そして地面がやけに黒々しいことに気が付き、下方をよく注意してみればそれらも全て虫であることがわかる。人間を食っている男がいる中心以外の床は、全て虫で覆い尽くされている。その虫は血

を吸う野蒜。

天井には羽虫。床には這虫。その上下の丁度中間辺りの宙には、maria動力の象徴である女神像が浮遊していて、その細くて白い両手が包み込むようにして、真っ赤なルビーもしくはビー玉と思わしき、いやそれよりはだいぶ大きい、宝石らしい物を持っていた。パプテガはその宝石を怪しく思い、それを拡大してみる。

「……………か……………!?」

宝石の中で必死な形相を絶やさぬ女性が一人いた。どんとんと拳を叩きつけているが、外に出れる気配はなさそう。フェルクルがその女性が誰であるかに気が付く。

「ペギーとかいう女じゃないのか、あれは」

「言われれば……………たしかにそうだ!」

パプテガも気が付き、リーダーとして乗組員の命を救うという信念を沸き立たせる。が、機体をそこに向かわせようとすると、途端、羽虫が天より襲い掛かってきて、視界を塞ぎ、数の重圧によってそれが機体に激しい圧力を与える。三百六十度モニターの余す所無く全てにゴキブリがしがみ付くというのは脅威以外の何者でもなかった。がさ、がさ、と音だけが微か。

「パプテガ―旦諦める!」

「諦められるか! ペギーは仲間だぞ!」

「奴は裏切ったとフルーチェが言っていただろうが!」

「まだ裏切ったとは決まっていない! その判断はペギーの口から直接それを聞いてからだ!」

「なら先に男を潰してからだ! それからでも間に合うはずだ!

この、これは、ゴキブリ、ゴキブリに押し潰されて死ぬなんてゴメンだろうが!」

「しかしな……………!」

「奴は仲間を食ってるんだぞ! 仲間の身体を食わせておいていいのか!」

「……………!」

仲間の身体が食われている。その言葉は随分と PAPTEGA に効果を示した。彼は Nils Olav を急旋回させることでモニターにへばり付いているゴキブリを振り落としてから、一気に地面へと降下。「うがああああああああ」とブツツン何かキレてしまっている怒声を発しながら、「落ち着け PAPTEGA」というフェルクルの言葉も聞かず Nils Olav の華奢な足を、男に向かって突き出そうとした。跳び蹴りをぶちかまそうとした。しかし機体がピタリと、見えない力によって動かなくされたことで蹴りの体勢のまま、宙で止まらされた。不可解な敵の能力だと思えた。「行けよ、Nils Olav！ お前の力はそんなものか！」 PAPTEGA が見えない力に抗うために機体を叱咤するが、駄目だった。そのままの体勢のまま Nils Olav は降下していく。野蒜のたくさん蠢いている所へと。機体が動くには動いたが、ブースターを焚けないようにされてしまったから、野蒜のいる位置に落下していくのを抗えない。だが、

「……………」

落下の途中、コックピットが勝手に開いた。 PAPTEGA でもフェルクルの意志でもなく、Nils Olav の意志で開いたのだった。さらに Nils Olav はコックピット内に自らの左手を伸ばしてきて PAPTEGA とフェルクルを掴み取ると、その左手を右手で持っている鉄くずで斬り、自らの機体から離れた。

「お前……！」

鉄くずを右手から離し、その切り取った左手を空いた右手で持つ。右手に持たれている左手には PAPTEGA とフェルクルがしっかりと握られている。Nils Olav はその左手を、男のいる中央へと向って、自らは野蒜へと落ちて行くというのに、……投げた。

左手は勢い良く放り投げられたおかげで、不可解な力に遮られる前に敵のすぐ目の前の地面に落下した。野蒜のいない所に投げられた二人は件の男の目の前に辿り着いたが、ブースターを封じられてしまった Nils Olav は成す術なく地上に落下し、野蒜たち

に覆い尽くされて、野蒜が発する酸のせいだろうか、蒸気を発しながら溶かされて、やがて、消えてしまった。跡形も無く、野蒜に溶かされて、この世から消滅、した。

「Nils Olav……！」

唯一溶けなかったその左手、から抜け出しながらフェルクルは、しかしやることがあるから感傷に浸るわけにはいかなかった。

男を潰さなければならぬ。

パプテガを見ると、左手が床に着いた時の衝撃のせいだろうか傷口から再び出血が激しくなっていた。包帯がほどけ、血がだらだらと垂れていて苦悶に塗れている。フェルクルは痛み止めを無理矢理彼に飲ませてから、立ち上がり、黒のスーツを身に纏っている件の男の方へと顔を向ける。その時に眩暈がしたことから、活力が吸われすぎているとわかり、残り時間は少ないと悟る。

パプテガがもう戦えないということは明らかだった。そもそも人型機械を動かさせていたことだって尋常では無い。常人なら死んでもおかしくない重傷でも戦い続けた漢を、もう頼りにはできない。だからフェルクルは自らの手だけで、百年前に撒いた種を摘まなければならぬ。

「やあ、作られた器。仲間の死体をそれ以上冒流するのは、やめてもらおうか」

音の吸い込まれやすい空間で、大声を張り上げながら近づいている。誰かの身体から染み出たのであろう血の溜まりを、踏みながら。

近づきながら相手の様子を窺うが、言葉を掛けたというのに、相手はまったく冒流を止めない。誰かの指だったと思わしきものにしやぶりついている。二百年生きている彼女でも初めて見るそのおぞましい光景は、彼女の神経を逆撫でるには充分の理由となる。フェルクルは頭に付いている巨大まち針を、じゅるり、という音をたてながら引き抜くと、その尖った先端を男に向けた。

「口で言っても駄目なら、実力行使するしかないな」

さすがに刃を向けられたことで、男は貪り続けていたその口を動

かすのを止めた。そして顔をフェルクルの方へと向ける。

口の周りが真っ赤に染まっついていて、まるで口裂け男のよう。

しばらく男は誰かの指をしゃぶったり咀嚼したりしていて返事をすることもなかったが、それを飲み込んでからは、ゆったりとした動作で、のろのろと腰を上げてみせる。そして切れ長の瞳の彼は、自らが先ほどまでしていた行動のおぞましさと真逆な、随分と悠長で紳士的でさえある口ぶりで、自己紹介を試みせた。

「はじめまして研究者。私は、ヴェゼという名前を *maria* から付けられた器です。ご存知でしょうか？ ご存知なわけがございませんね。お会いするのは、初めてのことです……………」

しかしその紳士的な雰囲気は、実質は皮肉家の皮を被っていただけだった。本性はすぐに現れてくる。

「非情な研究者様はまさか過去のことをお忘れかな？ いや、人間の皮を被った悪魔である貴方だから、もしかするとお忘れになっているのかもしれない……………まあ、お忘れになったからここにやって来られたのだろうか？ ……いやあ、マッドサイエンティストの神経という奴を一度覗いてみたいものだ……………百年前のこととはいえ、あのようなことをしてかしておいて忘れるなどは……………ああ、素晴らしい！ あるいは、羨ましい！ そんな神経があれば、どんな辛い事が起こっても平然としていられるのだろうか。良心が痛むなんてことも、無いのだろうか……………」

「お前と戯れている暇は残念ながら無い。殺させてもらう」

「ははっ。やはり冷酷な女なのだなお前は。 *maria* から伝えられている情報の通りだ……………。彼女が自らのシステムダウンの代わりに俺を作り出したのはお前に憎しみを伝えるためだが、お前のような女には確かに憎しみという奴で痛い目を合わせてやらねばならんな？ あまり調子付いている奴を放置しておくのは、虫唾が走るものだからな」

「調子付いてはいない。だが、冷酷だというのは認めよう。さて、もういいか。このまち針は切れ味はいいからあまり痛まずに死ねる

ぞ」

「俺を殺せると思ってるのか研究者？ やれるものならやってみるがいい。運動は苦手なんじゃないのか？」

「あまり、なめるな」

フェルクルはまち針を両手で握ったままに、走り出す。赤の帯を頭から垂れ流しながら、なかなかのスピードでヴェゼの懐に入り込むと、突、躊躇無くこめかみ目掛けてまち針を出した、が、それは残像であり、殺ったと思った次の瞬間にはヴェゼの姿は消えている。「遅いぞ、研究者さん」

パン、パン、と手拍子。何時の間にか背後に回られていた。フェルクルは、まったくそれを捉えることが出来なかった。彼女はちつ、と舌打ちをしてしまう。

ヴェゼはそんな彼女を嘲笑う。

「ほらほら。そんなに遅いんじゃないや、何時になっても俺を殺すことはできないんじゃないか？ 時間も無いというのにな……研究者、お前が俺を殺せないせいで世界が滅ぶな。どんな感じだ？ 自分の研究が原因で世界を滅ぼしてしまう気分は？ 言っておく原因は Maria ではない……お前の冷酷さに原因があるということをお忘れな……」

ヴェゼは言いたいことを言うと足元に丁度転がっている誰かの足それを拾い上げて、ふくらはぎにあたる部分に牙を立てて表皮をむしり食う。そして、「お前も食うか、研究者？」などと言ってから彼女をせせら笑う。人肉を咀嚼する。

「人というのは不思議なものだな研究者。何故に大切な友とまで呼び合った仲でもある存在を研究対象に変えることが出来たものか。それも蟲の中に、だぞ……？ 彼女は、お前に街を作れと命令だけをされて、そこからずっと毎日毎日何をしたのか報告をすることを義務とされた。自分を人間とは違う姿に変えた裏切りの友に、毎日自分がどういことをしたのか報告しなければならぬことが、彼女にどうい苦痛を味合わせたのかわかっていたのか、お前は？」

わかった上で、やっていたのか？」

言葉を多く紡ぎ責め立てるヴェゼに対して、フェルクルは実に言葉が少ない。

「理由があつた。マリアを、そうしなければならぬ理由があつた。……………それだけだ」

「……………貴様！ あくまで語らないつもりか……………！」

「時間が無いと言つたはずだ」

「なら、なぶり殺しにしてやる！ 俺に傷の一つも付けられると思ふな。貴様をズタズタにボロ雑巾にしてやる。徹底的な苦しみの中で果てさせてやるからなあ！」

器であるヴェゼは圧倒的な身体能力を兼ね揃えているが故に、腕力、脚力で言えばフェルクルとは比べ物にならないほどに強靱である。フェルクルの視界では捉えられない速度でヴェゼは彼女の死角に回り込む。

（まずは足をちぎりとって身動きをとれなくしてやるるか）

彼は残忍な思考をしながらフェルクルの片足に標的を付けて、隠してあつたナイフを取り出す。そして躊躇無く太もも辺りを切り裂こうとするが、しかしナイフは弾かれた。見えない力に。

「……………なっ！」

どういうことかと身をたじろかせながら動揺するヴェゼにフェルクルは振り向く。すると、彼女の頭から伸び出て行くはずの赤い帯が、ある一定の地点で彼女の周辺で漂うようになっていたことがわかつた。まるでフェルクルの周囲に何かの膜が張られているために、赤の帯がそこで漂っているように見えた。

まち針の丸い装飾。そこがわずかに緑に発光しているのを見、ヴェゼはどういうことか理解した。

研究者の発明による抵抗。

「なるほど……………携帯式のhotalubi動力ということか……………そのまち針、ただのまち針ではないということ……………小賢しい……………小賢しい奴だ……………！」

フェルクルは耳を疑う。器は言葉を続ける。

「その PAPTEGA と、上にいるペギーという女。二つの命を大切にしろ。俺はお前を殺せないようだが、hotalubi に包まれていない人間二人などに殺せる。今この瞬間に野蒜を PAPTEGA に襲わせれば、骨の髄まで溶けて何も残らんぞ？ 命、仲間の命は、大切だなあ？ それともフェルクルは仲間の命は気にしないかな？

まあ、冷酷な女だからそういう判断をするだろうが………」

「どうした？ どうするんだ？ 悩んでるか？ それとももう結論が出たのか？ 仲間を見殺しにするか研究者」

「………」
「何とか言えよ。今この瞬間も、hotalubi 動力に守られていない者は活力を吸われ続けてるんだぞ？ お前が俺を早めに殺さなきゃ、世界が滅ぶなあ？ しかし、お前が俺を殺そうとすれば、俺はお前の仲間を野蒜で溶かして殺してしまおうかなあ？ ああ、ああ、どうするんだ研究者？ 困ってしまうなあ？ それとも困っていないのか？ 教えてくれよ。俺に、人間という奴を教えてくれよ、冷酷な研究者……！」

音の吸収されていく空間で、人間を知ることが望む意思が音も無しに広がっているのを、古びた女神像が見下ろしている。彼は器として maria の為に、人を知って maria に報わなければならぬという義務感に急き立てられて、欲が煮立ってきている。その欲を叶えるために言葉を発し、相手の反応を細かに探っていた彼は、探れば探るほどに理解が難しくなってきたと気が付いたからこそ、欲は煮立ってきたのだらう。その為に彼は、彼女を追い詰めた。

「仲間の命を見捨てられないなら、まち針を捨てる。今すぐにそのhotalubi の膜を発生させるそれを床に転がせ。聞こえてるな？ 早くしろ。ためらっていると、お前の大切な仲間が死ぬな？ それとも大切じゃないか？ 何度も言わせるな、早くしろ」

「……………わかった」

音の吸い込まれていく空間で発された、悔しさに満ちている小さな呻きは、ほとんど音とはならず無音であったが、唇の動きと、手に持っていた発明品のまち針が床に転がされたことで、ヴェゼはくすくすと笑った。

「それでいい」

と言ったその後に間髪入れず、

「食わせろ」

と満面の微笑みを湛えてから彼女に向かって駆け出した。

「なっ……………」

さすがの彼女も驚きのあまりに腰が砕けそうになった。だがまち針を床に置いた今、強靱なる身体能力の相手に抵抗する手段はもはや無い。首根っこを掴まれて、床に叩きつけられた。

フェルクルの眼前には、歯を剥き出しにしている恐ろしい顔つきのヴェゼがいた。八重歯はひどく尖っている。四人の仲間を喰らったばかりのその八重歯に、フェルクルは肩を噛まれた。

「ぐあ……………」

噛まれたことによって生じる痛みで悶絶する。

噛んだ側のヴェゼは何かが違うたらしく、不満気な顔つき。

「やはり肩では駄目か……………理解しなくては……………理解を……………」

そう言ってから彼が視線を向けた先は、こめかみ。フェルクルの脳が納まっているその部分に両眼が向けられる。フェルクルは肝を冷やししながら、全身を強張らせる。

器はそんな彼女をせせら笑った。そして、「なあ、研究者」と言ってから彼は、彼の言いたいことを語り出した。

「mariaは……………人じゃない状態にされたことによって、己が人であった時の感覚を忘れてしまった。記憶は残っているのに、感情は人ならざるものとして変わっていったのだ。……………きっと貴様がプログラミングしたのだろうなあ……………？人の心を忘れていくように設定したのは、人間の心を持ったままでは実験がはかどらないとで

も思ったから……。mariaはだが、記憶を失くせないから、貴様が何故自分を裏切ったのか、何故貴様が自分を機械にして蟲の中に閉じ込めたのか、その理由を知りたく思うことから逃れられなかった……。お前と楽しく笑い合っていた頃の記憶が思い起こされる度に、mariaは葛藤していた。どういふことなのか、どうしてなのか、と。だが自らの心はほとんど機械化していくから、人間の心というものがどういった性質であるかを、mariaはわからなくなってしまうたせいで人の心のことを知りたく思った。忘れてしまった人間の心という奴を、知識として知ることでも思い出そうとしたのだよ。だから彼女は人型機械を作り、そして人間を作って建築物システムにて人間の毎日を監視した。調査した。それに伴って活力も摂取できるのだから一石二鳥だな？　しかし、やはり人間の心を理解することは出来なかった。人間は複雑怪奇。気まぐれ。矛盾した存在。汚らしいかと思えば、綺麗な部分もあり、優しいかと思えば恐ろしい、従順かと思えば反抗的。人はまったくもって予想の付かない。だからmariaは人をわかることを諦めて、遂に自分と同じ存在である俺を作り出そうと決意したのは、自分と同じことで葛藤する仲間が欲しかったからだ。mariaは寂しかったのだ。自分を理解してくれる存在が誰一人として他にいないことが寂しかったから、mariaは俺という自分と似通った存在を作り出したのだ。彼女の憤りを受け止める器というのが、俺だ。何だかんだ、mariaはそれによって孤独ではなくなり、何機にも連なる器たちが彼女と共に生きた。そしてある種の平穩が訪れたかと思えたのだ。だがもう関わらずにいようと思った研究者から、この蟲の中から引つ張り出すという連絡が一方的に送られてきた時、mariaはどれだけ貴様を憎く思ったと思う。だからmariaは準備をしたのだ。貴様がこの街を引つ張り出したその時に、思うようにさせてたまるかと、自らの命を挺してまで、お前にとっては喜ばしい実験結果である街に住んでいた人間どもを殺し、戦闘用の砲台や人型機械を作り、身体能力に長けた器である俺を作り出した。

そして世界に引つ張り出されたり閉じ込められたりした復讐として、お前の住んでいる世界を虫塗れにしてから滅亡させてしまおうという計画を思いついた。素晴らしい発明だよ研究者。百年前に作ったものだというのに、これだけのことがmaria動力にはできるのだからな！ 人間どもの活力を全て吸い取って新たな世界を創造する！ 虫だらけの世界さ！ お前たちは全員干からびた皮となつて砂塵に塗れ、虫に蹂躪される日々を送れ！ ああ研究者！ 確かに貴様は天才だ！ 故に、冷酷なのだ！ だから復讐をされても文句など言えるわけがない。原因は貴様にある。結局、実験がしたかったからmariaを利用しただけなのだろう？ まあ何が真実かはお前の脳味噌を食べればわかるかなあ！？ 脳味噌をむしゃむしゃと食べて俺の養分にすれば、貴様の考えてきたことが理解できるかなえ。食えばわかることか。そんなことは食えばわかることだよな。ああ、食うぞ研究者、ああ覚悟をしてくれ！ こう、歯を突き出して、お前を捕食するのさ……………ははっ……………」

ヴェゼの切れ長の瞳がより細まり、フェルクルの瞳に何かを覗きうとしたかのようだった。

だが何らの感情も、その瞳には浮かんていなかった。フェルクルは、ほとんど無表情だった。

「……………」

音の吸収されていく空間で、奇妙な沈黙が走った。

ヴェゼは沈黙の間、しばらく目を細めていたが、両の手をこめかみの辺りに添わせると、口でガチガチと歯を鳴らした。

い、た、だ、き、ま、す

彼は声にはせず、唇をそついう風に動かしてから、顔を近づけていく。

人が食われるのか、それとも。

音の吸収されていく空間で、足音というのはほとんど響かない。

だから鼻息が荒い器にはその音というのは聞こえないが故に、背後から迫り来る存在に気が付くことというのが出来ないのだろう。それは床に転がっていたまち針を拾ってから、実によたよたとしていて今にも倒れそうではあるが、片方にしかない腕でしっかりとまち針を握り、両の足で前へと進んでいた。今にも研究者を食べてしまいうそのなその器のすぐ背後に辿り着くと、彼はまち針をゆっくりと持ち上げてから、躊躇を無しに、器の心臓ひとつを目掛けて。

ざくり。

器は渴望の表情のままに横へと倒れた。

「……………滅ぶのは止められんさ。お前のような奴が、いる限り」
とだけ言ってから、まばたきをしなくなって、彼の心臓が止まった。

突き刺した男と食べられなかった女は、その二人ももう動けなくなっていた。

活力はもはやほとんど失くしてしまったようで、フェルクルは指先一つさえも、麻痺して動かせなかった。

パプテガは最後の気合を振り絞って、倒れた器の黒スーツの襟を引っ張り上げると、それを野蒜のところにもまで持って行き、

「食った罪を犯したお前は、罰として食われるよ」

と静かな怒りを湛えている声を放ってから、野蒜の蠢いている所に器を放り投げた。野蒜たちはすぐに群がり器の全身へとあつという間に群がると、腐った臭いを撒き散らしながら器を跡形も無く溶かした。

そこまでやり遂げたパプテガは、

「……………あとは、誰かに、まかせたぞ」

とだけ述べてから、フェルクルの横にまで歩いて行き、糸の切れた人形のようにぶつとりと倒れて、気絶した。

赤いルビーだかビー玉だかが天井を突き抜けて空へと昇っていく。秒読みが始まっているように思える。

奔流

箱庭の天が裂けるに合わせて生命の枯渇。

幻想たる緑に包まれている人を模した揺り籠だけが裂け目を覗いていた。

赤青のスコープで、真理を見やるような錯覚を起こさせながら。世界の現と幻が境界線の乱れるのを、ぼんやりと眺めている。

黄土の霧を突破して、堕ちてくるあれは叫んでいる。何を叫んでいるかはわからない。

何かを口いっぱいに貯め込んだまま墮落。君に嘔吐させるためにあるんじゃない。君の吐露のためにいるんじゃない。赤青のスコープは侵略の墮落者を見やりながら激怒と願いの祈りと共に空に舞えば、堕ちてくる者たちに手を伸ばす。いや、違う。その奥にある真っ赤な宝石。一人でその中に閉じ込められている者へと、手を伸ばしている。

どンドン、どンドン、と内側から外へ向って叩いている。自業自得でもある業を抱えた人に手を差し伸ばすことは世界のルールが許すかは定かじゃないし、どちらでも問題は無い。神なんていない。あるのは在ると信じている物だけだ。揺り籠の中でそれは叫んだ。一人が頷いて、私はあなたを信じているよと言った。ありがとう、と信じられたことに感謝が告げられてから揺り籠は両手を赤い宝石にあてがい、包む。その中に血が満ちている。間に合わなかつたとか、間に合つたということじゃない。ただその内側にへばりついている液体は赤黒く、宝石の色を少し薄暗くはしているが信じるならばそれは生きているし、死んでいると信じることも出来る。現と幻の境界線は乱雑なるノイズを発しはじめ、音としても視界としても、五感が世界を感知するのを妨げようとする。箱庭はもはや天を完全に黄土色に裂けさせてしまい、全ての箱庭にノイズは膨張しているからちかちかとしているプラズマが空間に亀裂を走らせている。そ

の亀裂から青色の炎が噴き出てきて箱庭の人々を燃焼して、骨、あるいは皮へと還していく。炎の津波もそこら中で発生して時速はマッハを超えているかも、と目視した人は感想を洩らしながら灰になった。果てまで連なり世界は一周。炎の津波が一周した箱庭の世界は今や紅蓮に満ち溢れ、人間たちは滅亡したかのように思える。それもまた信じるか信じないかの問題で、少なくとも土や灰、黄土色の霧、亀裂なるプラズマ、そして延々燃え盛る炎。いずれも箱庭にそれらは存在している。その世界に堕ちてくる虫たちは羽を下ろすことが出来ないし、墮ちることしか出来ない者は炎に塗れて自らも炎と化していた。全ては抵抗力を剥がれ姿を転じさせていく。それだけのことの空間で赤青のスコープは赤い宝石を両手であてがったまま、青い光を充満していく。今こそ安らぎの時、深海の青を目覚めさせて境界線を元に戻そう、海を陸に流すことで炎を静め、灰や土や皮へと変化した全てをまた変貌させてやるうじやないかと呟いた。願いを叶えると約束した少女は頷いてから、小さくて細い白い手を目の前の窪みにあてがい、眼を瞑った。青い粒子が揺り籠の中で充満していき、青白く彼女は包まれていくのが機体全体に膜をあてがうことにもなる。現と幻の境界線の混雑はさらに深化していく。急がなければ虫たちは墮落をより求めて空より墮ちてくる。そんなのを許すことはしない。願いは叶える。そのことを信じる。彼と彼女は信じた。己の願いを信じて、交わした願いを信じて境界線が平常たる安定を取り戻すことを信じた。

赤の宝石は色遣いを深海の青に変えていくと共に内側から破裂して、洪水を天より撒き散らしはじめた様は、まるで滝の誕生の瞬間いや海の誕生の瞬間のようであった。空も地も、炎も虫も、灰も土も、深海の青である色遣いの水たるその勢い、止まる事を知らず暴流となりて世界を闊歩し、その速度は光を遙かに超えるかのように凄まじいからこそ炎の鎮圧は即座であり虫たちとて自らの墮落が妨げられることに気が付くこともせず果てたであろう。世界は大いなる大海に全てを包み込まれて大地が毛布に包まれたかのように。

水が乾いていった後、何事もなかったかのように地面に人々があふれ出した。

建物があふれ出した。砂があふれ出した。土があふれ出した。岩があふれ出した。空があふれ出した。水があふれ出した。火があふれ出した。雷があふれ出した。象があふれ出した。ペンギンがあふれ出した。犬があふれ出した。猫があふれ出した。馬があふれ出した。ねずみがあふれ出した。猿があふれ出した。コアラがあふれ出した。くるみ割り人形があふれ出した。川があふれ出した。ブランド品があふれ出した。産業廃棄物があふれ出した。スピーカーがあふれ出した。ライブハウスがあふれ出した。機械があふれ出した。手作りのお菓子があふれ出した。泣いている人があふれ出した。怒っている人があふれ出した。喜んでいる人があふれ出した。雲があふれ出した。蜘蛛もあふれ出した。蟻があふれ出した。鯨があふれ出した。蟹があふれ出した。鱈があふれ出した。鮭があふれ出した。テレビがあふれ出した。ネガティブがあふれ出した。太陽があふれ出した。雑誌があふれ出した。家があふれ出した。マンションがあふれ出した。船があふれ出した。神さまがあふれ出した。お金があふれ出した。牧場があふれ出した。災害があふれ出した。殺人があふれ出した。事故があふれ出した。生活があふれ出した。活力があふれ出した。退屈があふれ出した。願いがあふれ出した。後悔があふれ出した。靴下があふれ出した。革靴があふれ出した。洗濯物があふれ出した。将棋盤があふれ出した。子供があふれ出した。大人があふれ出した。赤ちゃんがあふれ出した。無職があふれ出した。人気者があふれ出した。栄光があふれ出した。屈辱があふれ出した。性交があふれ出した。恋愛があふれ出した。交流があふれ出した。放蕩があふれ出した。お酒があふれ出した。アルミ缶があふれ出した。歌があふれ出した。幸せがあふれ出した。言いたいことがあふれ出した。名詞があふれ出した。仲間があふれ出した。死者があふれ出した。生者があふれ出した。無気力があふれ出した。声があふれ出した。耳があふれ出した。手紙があふれ出した。電話があふれ

出した。眼鏡があふれ出した。尻尾があふれ出した。車があふれ出した。自転車もあふれ出した。作家があふれ出した。画家があふれ出した。ビジネスマンがあふれ出した。戦争屋があふれ出した。友達があふれ出した。親友があふれ出した。禿があふれ出した。手袋があふれ出した。ゲームがあふれ出した。消臭スプレーがあふれ出した。学校があふれ出した。電気があふれ出した。鉱物があふれ出した。笑顔があふれ出した。ペットボトルがあふれ出した。パソコンがあふれ出した。夢があふれ出した。現実があふれ出した。熊があふれ出した。服があふれ出した。会話があふれ出した。凶器があふれ出した。狂気もあふれ出した。冷静があふれ出した。情熱もあふれ出した。キックボードがあふれ出した。髪の毛があふれ出した。恥ずかしさがあふれ出した。いじめがあふれ出した。家族があふれ出した。叫びがあふれ出した。詩人があふれ出した。暴力があふれ出した。鯨があふれ出した。イルカがあふれ出した。氷があふれ出した。雨があふれ出した。飴もあふれ出した。豹があふれ出した。橋があふれ出した。新聞紙があふれ出した。トマトがあふれ出した。キュウリがあふれ出した。ナスがあふれ出した。フライパンがあふれ出した。キーボードがあふれ出した。蓄音機があふれ出した。化石があふれ出した。うんこがあふれ出した。博物館があふれ出した。動物園があふれ出した。ピーマンがあふれ出した。怪物があふれ出した。有名人があふれ出した。嫌われ者があふれ出した。普通の人があふれ出した。相づちがあふれ出した。机があふれ出した。テーブルがあふれ出した。プラスチックがあふれ出した。座布団があふれ出した。指があふれ出した。椅子があふれ出した。ギターがあふれ出した。小便があふれ出した。アンプがあふれ出した。辞書があふれ出した。本があふれ出した。窓があふれ出した。草むらがあふれ出した。氷河があふれ出した。大陸があふれ出した。島があふれ出した。争いがあふれ出した。優しさがあふれ出した。冷たさがあふれ出した。温もりがあふれ出した。君があふれ出した。嘔吐があふれ出した。僕があふれ出した。俺があふれ出した。あなたがあふ

れ出した。向こう側があふれ出した。こちら側があふれ出した。呼
び声があふれ出した。世界があふれ出した。無理があふれ出した。
牛革があふれ出した。恫喝があふれ出した。階段があふれ出した。
介護があふれ出した。働くがあふれ出した。夕陽があふれ出した。
夜があふれ出した。月があふれ出した。星があふれ出した。籠があ
ふれ出した。球があふれ出した。あふれ出した。

終わり。

全てがあふれ出した世界をコートマシンは駆った。その中にもう人はいない。粒子もない。願いを叶えた二人は境界線が戻り始めた世界を漂いながら、全てを見下ろしている。小型船舶のその上空で、命が戻った人々が輪になってキャンプファイヤーをしているのを、手を繋ぎながら見下ろして、全てがあふれ出して良かったよねと一緒に踊っているつもりになって手や足を動かした。

空から青の粒子が降り始めた。願いを叶えた二人はそれを見てから顔を見合わせると、手を繋いだままその粒子を眺め続けた。

キャンプファイヤーをしている乗組員たちの宴にも青の粒子は降り注いでいて、それを嬉しく思った詩歌いが、天へも届く歌を届かせる。

良い詩だね。

うん。

二人は宙に浮いたままずっと歌を聞いていた。
夜が明けても、ずっと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8117r/>

空虚ラ列砂丘

2011年7月16日03時21分発行